

第Ⅳ章 遺 物

出土遺物は大量で、その種類は中国・タイ・ベトナム・朝鮮・備前の陶磁器、瓦質土器、瓦、須恵器、土器、玉類、遊具、古銭、銅製品、鉄製品、石器、骨器、食料残滓などである。特に中国陶磁器が多く、出土遺物（人口遺物）全体のおよそ80～90%を占めている。

1 青 磁

検出された陶磁器の中で青磁が最も多い。碗、皿、盤、杯、香炉、壺、水注、瓶、仏像などが検出されているが、中でも出土量の多い碗、皿、盤、杯、香炉の出土状況を第1表に示した。この表は分類可能な破片と底部破片を集計したもので、分類できずに集計表に出ていない破片も多くある。この表で見ると碗 5331、皿 1167、盤 1070、杯 18、香炉 14 で碗が圧倒的に多く、皿、盤と続いている。推定個体数は、例えば碗で見ると、底部だけで 730 個あることから 1,000 点近い碗があったものと考えられる。

青磁は素地、施釉、釉調等で窯が異なると考えられる

A 窯系—総体的に素地が白色微粒子で、釉が厚く、緑色・青緑色・黄緑色等を呈する一群である。

B 窯系—総体的に素地は灰色でやや粗粒子、釉は薄く、青灰色、緑灰色等を呈する。釉は高台外面まで施釉され、畳付から外底までは露胎である。ほとんど無文である。畳付は水平に切られ、畳付外端を軽く面取りして竹の節にしてあるのと、面取りのないのが見られる。

に大別した。さらに年代が近いと考えられるグループをまとめてⅠ群、Ⅱ群、Ⅲ群とし、各群の中で、器形、文様、施釉等によって a・b・c・・・と小分類した。なお、分類基準や出土一覧表、観察表等に出ている分類番号で、A・Bの書いてないのはすべてA窯系で、A窯系・B窯系のあるものにかぎってA・Bを使用した。

また、観察表を作成した碗、皿、盤、杯、香炉については、個々の遺物の説明は観察表で述べ、各々の節では主に分類基準を述べた。

(1) 青磁碗

中国陶磁器の中で最も多量に検出されたのが青磁碗である。復元できた碗の器形、文様等によって、輪花碗、蓮弁文碗、雷文帯碗、外反口縁碗、玉縁口縁碗、直口口縁碗に分類し、さらに各グループの中で、群、類などの分類を行なった。

① 輪花碗（第1図1、PL. 13）。

口縁に4～6ヶ所の小さな切り込みを入れる、いわゆる輪花碗である。薄手の碗で、高台は逆三角形の薄い高台である。1個体だけの出土であり、小分類はできない。器形、施釉、釉調などから南宋の砧青磁の範疇と考えられる。

② 蓮弁文碗（第1図2～10、第2・3図、第4図1～4、PL. 13～16）

蓮弁文はかなり時代幅があるが、大きく鎬蓮弁文、無鎬蓮弁文、線刻細蓮弁文に分類できる。

I群—鎬の稜が明瞭な幅広鎬蓮弁文碗。内底は凹む。高台際まで施釉で、高台と外底は露胎である。（第1図2～4、PL. 13）

II群—無鎬蓮弁文碗で、器形、文様、施釉等でつぎのように小分類した。

II a 篋による雑な細い蓮弁が弁間をもって描かれている。内底が凹む点や施釉方法はI群に類似する。（第1図7、PL. 13）。

II b 片切り彫りや丸彫りで弁先の尖った蓮弁を描き、蓮弁の上に1本の圈線を廻らす。（第1図8～10、PL. 13）

II c 片切り彫りで弁先の尖った蓮弁を描き、口縁は若干玉縁で、畳付だけが露胎である。（第2図1・2、PL. 14）

II d 篋描きのやや幅広蓮弁で、器高の低い薄手外反碗。（第2図3、PL. 14）。

II e 深い片切り彫りで弁先の尖った幅広蓮弁を描き、内体面に刻花文をもつ肉厚の碗。（第2図6、PL. 14）

III群—線刻細蓮弁文で、文様、施釉、器形等でつぎのように小分類した。

III a 器高に比して口径の狭い碗で、篋描きの細蓮弁を碗周に60～70枚廻らす。弁先が丁寧に描かれ、弁尻は高台際まで延びている。厚い釉を全面施釉した後で、外底釉を蛇の目状に掻き取っている。（第2図7～9、PL. 14）。

III b 口径はIII aに比してやや広い。篋描きの細蓮弁を碗周に40～50枚廻らす。したがって弁幅がIII aに比して広い。弁先もIII aに比して崩れており、弁尻は高台際まで延びず、高台脇で止まっている。釉は全体的に薄く、外底までかかるのはなく、高台内面途中までかかるのと高台外面までかかるのがある。（第3図1～8、PL. 15）。

III c 腰部でやや脹れ、内湾状を呈する。III a、III bに比して蓮弁の線が細く短く、弁数に統一性がない。弁先はかなり崩れているのと消滅しているのがある。弁尻は高台脇まで延

びず、腰部か胴部で止まっている。釉は薄く、施釉方法はⅢ aに類似。(第4図1~4、PL. 16)。

③ 雷文帯碗 (第4図5~10、PL. 16)

雷文帯碗は少なく、復元できたのも1個だけであり、群としての分類が困難なので、施文方法で小分類した。器形はすべて直口縁である。

a 篋描きの雷文帯を外体面上部に廻らすものである。雷文帯の下に刻花文が描かれている。内体面には刻花文のあるものとなひが見られる。(第4図5~9)。

b スタンプの雷文帯を内・外体面上部に廻らすものである。(第4図10)。

④ 外反口縁碗 (第5・6図、PL. 17・18)

外反口縁碗はかなり時代幅があるが、2つの群に大別した。なお、この外反口縁碗にはA窯系とB窯系がある。特にB窯系が多量に検出された。

I群-第5図1に示した1点だけである。高台は小さく内刳りが浅い。畳付から外底までは露胎で、釉は薄く、同安窯系の釉色、釉調を呈する。むしろC窯系と独立させた方がよいが、1点だけなのでここに納めておいた。

II群-I群以外の外反口縁碗をすべてこの群に入れた。青磁碗でB窯系があるのはこの外反口縁碗だけである。

A II a 大振りの碗で、外底釉が全部掻き取られている。(第5図2・3)。

A II b やや小振りの碗で、外底釉が蛇の目状に掻き取られている。内底に印花のあるものとなひが見られる。(第5図4、第6図1~3)。

A II c 有文の碗である。内体面に刻花文が見られる。(第6図4)。

B II a 大振りの碗で、薄手に仕上げられている。(第5図5)。

B II b 普通サイズの碗で、やや薄手に仕上げられている。内底に印花のあるものとなひが見られる。(第5図6~8、第6図5)。

B II c 口径に比して器高の低い浅碗で、薄手に仕上げられている。内底を掻き取るのも見られる。(第6図6・7)。

⑤ 玉縁口縁碗 (第7図1・2、PL. 19)

(注1)
口縁が玉縁で大振りの碗。いわゆる佐敷タイプである。すべて同一群に納まると考えられるので、小分類を示した。

a 無文の大振り碗。外底は平坦に仕上げられている。高台内面から外底までは露胎である。(第7図1)。

b 有文の大振り碗。内体面に陽印花の牡丹唐草文が描かれている。外底は平坦に仕上げられている。高台内面から外底までは露胎で内底釉を掻き取っている。(第7図2)。

⑥ 直口縁碗 (第7図3~6、PL. 19)

同一群と考えられるので、小分類を示した。

- a 底が厚く、器高に比して口径のやや狭い直口口縁碗である。器形や施釉方法など線刻細蓮弁碗 b に類似する。(第7図3～5)。
- b 口径に比して器高が低く、腰部がやや脹れ、内湾状に見える直口口縁碗である。器形は線刻細蓮弁文碗 c に類似する。(第7図6)。

第2表 青磁碗観察表

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台 口径	素地	施釉	釉 色	貫入	文 様	備 考
第1図1 PL. 13	輪 花 碗		5.1 6.1 4.7	青白色微 粒子	釉は厚く全面 施釉で、畳付 だけ露胎	淡 緑 色	全面に荒 い貫入	口縁部は4枚の輪 花	薄手で釉厚 4区 pit 3区 II 55～60 5区 VII
" 2	蓮 弁 文 碗	I	16.2 7.5 4.7	灰白色微 粒子	薄い釉	淡 緑 灰 色	なし	間弁をもつ鎬蓮弁 で、弁先を篋描き	5区 III 4区最下層
" 3		"	16.4 — —	"	"	"	"	"	3区 II 15～20
" 4		"	— — 4.8	"	薄い釉を高台 際まで施釉、 高台と外底は 露胎。高台外 面には釉垂れ。	"	"	鎬蓮弁は高台際ま で延びている	内底が凹む 3区 II 25～30 5区 IV 5～10
" 5		—	15.8 — —	"	薄 い	淡 黄 緑 色	"	わずかに鎬が見ら れる篋描きによる 雑な蓮弁	内底が凹む 3区 II 25～30
" 6		—	14.0	"	"	"	"	"	3区 II 15～20 5区 II
" 7		II a	14.8 8.0 4.6	淡灰色微 粒子	厚い透明釉を 高台際まで施 釉。厚い釉だ れが高台外面 に見られる。 高台と外底は 露胎	青 緑 色	全面に荒 い貫入	篋描き蓮弁が高台 脇まで見られる。 蓮弁はやや細く、 弁間があいている。	内底が凹む 5区 II、III 3区 pit

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第1図8 PL.13	蓮 弁	II b	11.4 — —	白色微粒子	やや厚い失透釉	淡緑 灰色	なし	丸彫りで弁先の尖った蓮弁。蓮弁の上に1本の圈線が廻る。	3区II 45～50
” 9 ”		”	17.9 8.1 7.9	”	”	”	”	片切り彫りによる弁先の尖った蓮弁で、上に1本の圈線が廻る。内底に印花。	底部が厚い 3区II、15～20 4区I、5区II
” 10 ”		”	15.6 6.7 5.9	”	やや厚い釉が 畳付まで施釉	淡青 緑色	全面に荒 い貫入	鑄がわずかに見られる肉厚の細い蓮弁で、弁周を細線で描いている。蓮弁上に1本の圈線	口縁は若干玉縁 5区IV 15～20 4区II 10～15
第2図1 PL 14	碗	II c	13.1 5.4 5.3	”	全面施釉で、 畳付だけ露胎。	”	なし	片切り彫りによる弁先の尖った細い蓮弁。内底に圈線。	口縁は若干玉縁 2区II 0～10、 3区II 55～60 4区I、5区II、 IV 15～20
” 2 ”		”	13.3 5.7 5.5	”	”	オ灰 リ ブ色	なし	” 弁間があく	口縁は若干玉縁 3区II 45～50 5区III、VII
” 3 ”		II d	12.3 5.1 4.0	灰白色微 粒子	薄い失透釉が 高台外面まで 施釉。畳付か ら外底は露胎。	緑 灰色	全面にこ まかい貫 入	篋描きによるやや幅のある蓮弁で高台脇で止まる。	3区II 20～25 4区II 15～20 5区II、III
” 4 ”		—	12.5 — —	白色微粒 子	厚い失透釉	淡 緑 色	”	篋描きによる弁先の尖った細い蓮弁。	3区II 15～20
” 5 ”		—	14.6 — —	灰白色微 粒子	薄い釉	淡 緑 灰 色	なし	篋描きによる弁先の尖った細い蓮弁、弁間があく。	3区I
” 6 ”		II e	14.2 8.1 6.6	白色微粒 子	厚い失透釉で 全面施釉のあ と外底の釉を	淡 緑 色	なし	片切り彫りによる幅広蓮弁。内体面には片切り彫りに	厚手の碗 第2表土 ” 3 ”

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
					掻きとっている。			よる文様。内底に印花。	第4 B 表土
第2図7 PL・14	蓮 弁	Ⅲ a	11.1 7.2 4.8	白色微粒子	厚い釉を全面施釉のあと外底を蛇の目状に掻き取っている。	淡黄緑色	非常に細かい貫入がところどころに見られる。	篋による細蓮弁が外面全体に、64枚施文されている。弁尻は高台際まで延び、弁先は1枚1枚丁寧に描かれている。内底に印花あり。	施釉や高台造りなど丁寧。 2区I、3区Ⅱ0～5 5区Ⅱ
" 8 "	文 碗	"	12.5 7.4 5.4	"	"	淡緑色	細かい貫入が内外全面に見られる。	細蓮弁が外面全体に68枚施文されている。弁尻は高台際まで延び、弁先は2弁に1枚の割合で描かれている。内底に印花があるがはっきりせず。	" 2区Ⅱ30～35 3区Ⅱ15～20 4区Ⅱ 5～10
" 9 "		"	14.2 7.8 6.0	"	"	暗緑色	非常に細かい貫入がところどころにみられる。	篋による細蓮弁が62枚。弁尻は高台際まで延び、弁先はやや丁寧に描かれている。内底に印花があるがはっきりせず。	" 3区I、Ⅱ0～10 4区I 5区Ⅱ
第3図1 PL・15		Ⅲ b	13.2 7.1 4.7	灰白色でやや粗粒子	やや厚い釉が高台内面途中まで。高台内面途中から外底までは露胎。	淡緑色	荒い貫入が内外全面にみられる。	篋による細蓮弁が雑に約42枚。弁尻は高台脇まで、弁先は雑に描かれている。内底に印花。	施釉や高台造りなど雑 3区Ⅱ20～25
" 2 "		"	13.9 7.5 6.5	"	"	"	"	"	" 2区Ⅱ0～10 3区 pit " Ⅱ0～10

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第3図3 PL. 15	蓮弁	Ⅲ b	13.8 7.4 5.2 灰白色で やや粗粒 子	やや薄い釉が 高台内面途中 まで。高台内 面途中から外 底までは露胎	淡緑色	外面には ないが、 内面にや や荒い貫 入	篋による細蓮弁が 雑に廻る。弁尻 は高台脇までで、 弁先は雑に描かれ ている。内底に印 花（弁は約45枚）	施釉や高台造 りなど雑 3区Ⅱ0~10、 柱穴内 4区Ⅱ5~10 5区Ⅱ、Ⅳ5~10
" 4 "	文碗	"	14.0 8.8 5.5 "	やや厚い釉が 高台内面途中 まで、高台内 面途中から外 底までは露胎	"	やや荒い 貫入が内 外全面に みられる。	" 内底に印花なし （弁は約45枚）	" 3区Ⅱ10~15 5区Ⅱ
" 5 "		"	14.0 7.8 5.7 "	やや薄い釉が 高台途中まで、 高台内面途中 から外底まで は露胎	"	外面には 見えない が、内面 には荒い 貫入	" 内底に印花なし （弁は約50枚）	" 4区Ⅱ5~10 5区Ⅱ、Ⅳ0~5
" 6 "		Ⅲ b	14.4 7.2 5.9 "	やや厚い釉が 高台内面途中 まで、高台内 面途中から外 底までは露胎	灰青色	細かい貫 入がとこ ろどころ に見られ る。	" 内底に印花なし （弁は約40枚）	" 3区Ⅱ、0~10 5区Ⅱ、Ⅳ35~40
" 7 "		"	14.2 7.2 5.3 "	やや厚い釉が 高台外面まで、 畳付から外底 までは露胎	灰緑色	"	" " （弁は約41枚）	" " 4区Ⅰ、3区Ⅱ10~ 15 5区Ⅱ
" 8 "		"	13.7 7.2 5.3 "	やや薄い釉が 高台外面まで。 畳付から外底 までは露胎。 口縁部に厚い 釉垂れ	"	"	" " （弁は約40枚）	" " 2区Ⅱ15~20 3区Ⅰ、Ⅱ0~10 4区Ⅰ、 盛土
第4図1 PL. 16		Ⅲ c	12.4 6.5 4.9 灰色の荒 い素地で 白色粗粒 子混入	"	灰青色	なし	尖施文具で外体面 上半分に細蓮弁。 内底に「大」の字 のある捻じ花。	外体面に轆轤 痕の稜線がみ られる。

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第4図2 PL. 16	蓮弁	Ⅲc	10.6 6.0 4.0	白色粗粒子	やや厚い釉が高台内面途中まで、高台内面途中から外底までは露胎	淡白緑色	荒い貫入が内外全面にみられる。	尖施文具で外体面上半分に細蓮弁。内底には印花花文	外体面に轆轤痕の稜線がみられる。 2区Ⅱ0～10 3区Ⅲ0～5
” 3 ”	文碗	”	10.0 6.0 3.8	灰白色粗粒子	薄い釉が高台内面途中まで、高台内面途中から外底までは露胎	淡黄青色	外面にはないが、内面に細かい貫入	” 内底に印花なし	” 2区Ⅱ10～20 3区Ⅰ
” 4 ”	”	”	11.4 6.8 4.8	”	”	”	細かい貫入が内外全面にみられる。	” 内底に印花があるがはっきりしない。	” 2区Ⅱ0～10
” 5 ”	”	a	15.1 7.4 5.9	白色微粒子	厚い釉	淡緑色	内体面に荒い貫入	篋描きによる雷文帯。刻花文が外体面に施文されている。	底部が厚い 5区Ⅳ10～15、 Ⅴ0～5
” 6 ”	雷文	”	14.4 — —	”	厚い釉を全面施釉のあと、外底を蛇の目状にかき取っている。	”	非常に細かい貫入がところどころにみられる。	外体面には7つの雷文帯と3つのくずれたラマ式蓮弁が廻っている。内底には印花花文	5区Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ
” 7 ”	帯	”	15.0 — —	”	厚い釉	”	内外体面に荒い貫入	外体面に雷文帯、内体面に刻花文。	4区pit
” 8 ”	碗	”	14.7 — —	”	”	”	”	外体面に雷文帯と刻花文、内体面に刻花文。	3区Ⅱ30～35
” 9 ”	”	”	14.7 — —	”	”	”	”	外体面に雷文帯	2区Ⅱ10～20
” 10 ”	”	b	16.5 — —	”	”	淡緑色	”	外体面の雷文帯とラマ式蓮弁の弁先までがスタンプで、弁横を篋で描いて	3区・5区の表土 3区Ⅱ15～20 5区Ⅱ

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
								いる。内体面の雷文帯はスタンプでその下に刻花文。	
第5図1 PL. 17	外	A I	16.8 7.8 5.1	白色微粒子	薄い透明釉を高台外面まで、畳付から外底までは露胎	淡緑色	部分的に荒い貫入	内底に印花花文	高台内削りが浅く底部が厚い。 2区2号土壌40~50
" 2 "	反口	A IIa	18.4 8.1 6.7	"	厚い失透釉を全面施釉後、外底釉を掻き取っている。蛇の目が不明	淡緑色	"	なし	大振り 5区Ⅳ20~25、 Ⅴ、Ⅶ
" 3 "	縁碗	"	17.3 7.5 8.2	"	"	"	"	"	口縁は若干玉縁状で大振り 4区Ⅱ10~15 5区Ⅱ、Ⅳ0~4
" 4 "		A IIb	15.6 6.9 6.7	"	厚い釉を全面施釉後、外底釉を蛇の目状に掻き取っている。	濃緑色	"	内底に印花花文	3区Ⅱ35~40 4区Ⅰ、Ⅱ0~5、 5区Ⅱ、Ⅲ
第6図1 PL. 18		"	16.0 7.0 6.9	赤褐色のやや粗粒子	"	黄緑色	細かい貫入が内外全面にみられる。	なし	3区pit 5区Ⅲ、Ⅶ
" 2 "		"	15.6 6.5 6.2	灰白色微粒子	"	淡緑色	"	"	3区Ⅱ10~15 4区pit 5区Ⅲ、Ⅳ15~ 20
" 3 "		"	15.2 7.1 6.1	"	"	濃緑色	"	"	3区Ⅱ40~45 4区Ⅰ、Ⅱ0~5 5区Ⅱ、Ⅳ8~16
" 4 "		A IIc	16.3 7.0 7.0	白色微粒子	厚い透明釉を高台内面途中まで。内面途中から外底ま	"	部分的に荒い貫入	内体面に刻花の人形手風の文様。内底に印花花文	外底は平坦に仕上げている。 3区Ⅱ55~60、 5区Ⅶ

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉 色	貫入	文様	備考
					では露胎				
第5図5 PL. 17	外 反 口 縁 碗	B II a	19.0 7.5 6.6	灰色でや や粗粒子	薄い透明釉を 高台外面まで 施釉。畳付か ら外底までは 露胎。	灰 緑 色	やや細かい 貫入が 内外全面 にみられ る。	内底に1本の圏線	薄手で大振りの 碗。外底は平 坦に仕上げら れている。畳 付は滑らかに 研磨。 3区II 10~15、 pit 5区III
" 6		B II b	15.4 6.2 5.5	"	薄い失透釉を "	"	なし	なし	4区III 25~30
" 7		"	15.1 6.3 5.6	"	薄い透明釉を "	"	"	内底に印花花文	3区II 20~25 4区II 15~20、 5区IV 35~40、V
" 8		B II b	14.6 5.9 5.2	灰色でや や粗粒子	薄い失透釉を "	灰 緑 色	なし	なし	3区pit II 50~55
第6図5 PL. 18		"	15.2 6.3 5.4	"	"	"	"	内底に印花花文	2区II 25~30、 4区I
" 6		B II c	18.2 6.5 5.7	"	"	"	"	なし	口径に比して 器高の低い浅 碗 3区II 10~15土留 4区I、II 0~5 5区II
" 7		"	17.6 5.9 6.3	"	薄い釉を高台 際まで施釉し、 高台から外底 までは露胎。 内底釉を掻き 取っている。	"	"	外体面に1本の圏 線	" 5区II、IV 0~5

挿図番号 図版番号	名称又は 仮称	類	口径 器高 高台 口径	素地	施釉	釉 色	貫入	文様	備考
第7図1 PL. 19	玉 縁 口 縁	a	17.8 7.4 6.6	灰白色で やや粗粒 子	やや厚い失透 釉を畳付まで 施釉。高台内 面から外底ま では露胎。	淡 緑 色	荒い貫入 が内外全 面にみら れる。	内底に印花	外底は平坦に 仕上げている。 大振りの碗
" 2 "	碗	b	17.9 8.2 7.2	"	" 内底釉は掻き 取っている。	"	"	内体面全体に陽印 花の牡丹唐草文	4区I II5~10 5区II、IV0~5 "
" 3 "	直 口 口 縁	a	15.0 8.1 5.2	"	やや厚い失透 釉を高台内面 途中まで施釉。 高台内面途中 から外底まで は露胎	灰 緑 色	"	内底に印花があ るが明瞭でない。	3区炉跡内 4区I、5区II
" 4 "	碗	"	13.9 7.2 5.7	"	"	淡 緑 色	"	外体面に1本の圈 線	外底は平坦に 仕上げている。 厚い底部 盛土、3区II15~20
" 5 "	"	"	14.3 7.7 5.7	"	やや薄い失透 釉を高台外面 まで施釉。畳 付から外底ま では露胎	黄 緑 色	細かい貫 入が内外 全面にみ られる。	内底に印花があ るが明瞭でない。	3区II10~15、 4区I 5区II、IV0~5 "
" 6 "	"	b	13.9 6.2 5.2	"	薄い失透釉を 全面に施釉。外 底の掻き取り がないために 芽がくっつい ている。	黄 灰 色	部分的に 細かい貫 入	なし	5区II、IV5~10

※ 法量の単位は cm

(2) 青磁皿

碗のつぎに多いのが皿である。しかし、碗の場合と比較してB窯系が少ない。皿は主に器形によ
って、口折皿、外反口縁皿、稜花皿、玉縁口縁皿、直口口縁皿に分類し、各器形の中で、群、類な

どの分類を行なった。

① 口折皿 (第8図、第9図1～6、P.L. 20・21)

口折皿とは平鏝をもついわゆる鏝縁皿で、鏝の形態によって2つの群に大別した。この皿にはA窯系とB窯系が見られる。

I群—内体面から鏝上面へ折れる部分が明瞭な鎬を示している口折皿である。総体的に薄手である。

A I a 内体面に幅広篋による蓮弁文が廻る。高台は畳付が細く、わずかに内側に傾斜する。鏝端を若干つまみ上げる。素地は薄くて釉が厚く、全面施釉で、畳付だけ掻き取って露胎にしてある。(第8図1・2)

A I b 外体面に鎬蓮弁文を廻らす口折皿である。鎬蓮弁の弁周を2叉線で描く。高台は畳付が細く、鏝は平坦である。素地は薄くて釉は厚い。全面施釉で、畳付だけ掻き取って露胎にしてある。(第8図3～5)。

A I c 無文の口折皿で、鏝上面がわずかに凹む。素地は薄く釉が厚い点や釉色、釉調などA I aに類似し、高台造りや施釉などもA I aと類似するものと考えられる。(第8図6・7)。

B I a 器全体が薄手で、外体面に2本線による蓮弁文が描かれており、内底に双魚文が貼付されている。(第8図8)。

B I b 外体面に2本線による蓮弁文が描かれているが、底部が厚く、内底に双魚文が貼付されていない。(第8図9)。

II群—内体面から鏝上面へ折れる部分が丸味をもつ口折皿である。I類に比して厚手である。

A II a 外体面には非常に肉厚の無鎬蓮弁文が廻っている。(第8図10)。

A II b やや深い口折皿である。外体面には、片切り彫りで弁先の尖った細い蓮弁が描かれている。(第9図1)。

A II c 浅い口折皿である。外体面には、片切り彫りで弁先の尖っていない蓮弁が描かれている。(第9図2・3)。

B II a 浅い口折皿である。外体面には、片切り彫りで弁先の尖っていない蓮弁が描かれている。A II cに対応する皿。(第9図4)。

B II b 鏝が短く、外体面には、尖施文具で弁先の尖った蓮弁を深く描いている。(第9図5)

B II c 無文の浅い口折皿である。(第9図6)。

② 外反口縁皿 (第9図7・8、第10図、P.L. 21・22)

検出された外反口縁皿は同一群と考えられるので小分類で示した。この外反口縁皿にはA窯系とB窯系がある。

A a 外体面、内体面、内底に丸篋による簡略化された蓮弁文を廻らす皿である。(第9図7

・8)。

A b 無文の外反口縁皿で、内底に印花のあるのとないのが見られる。外反口縁皿で最も多いのがこの無文外反口縁皿である。(第10図1～4、6～8)。

A c 無文の外反口縁であるが、腰の稜が明瞭な腰折皿である。(第10図9)。

B a 無文の外反口縁皿である。A bに対応する皿。(第10図5)。

③ 稜花皿(第11図1～4、P L. 23)

口唇部はラマ式蓮弁の弁先形の稜花が刻まれて凹凸を呈する腰折皿である。皿の大きさや内体面の文様などで若干の差異はあるが、同タイプと考えられる。(第11図1～4)。

④ 玉縁口縁皿(第12図1・2、P L. 24)。

口縁部が玉縁状を呈する浅い皿である。外底は平坦に仕上げられ、内底釉は円く掻き取っている。佐敷タイプの碗とセット関係にある皿である。

⑤ 直口口縁皿(第12図3～10、P L. 24)。

同一の群と考えられるので、小分類で示した。なお、この皿にはA窯系とB窯系がある。

A a 外体面に片切り彫りの蓮弁が廻っている皿である。(第12図3)

A b 内体面に篋描きの蓮弁文が廻っている皿である。(第12図4)

A c 無文の皿で、内底に印花のあるのとないのがある。(第12図5・6)

B a 無文の皿で、内底に印花のあるのとないのがある。A cに対応する皿。(第12図7～10)

第3表 青磁皿観察表

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第8図1 P L. 20	口 折 皿	A I a	17.1 4.4 8.8	白色微粒子	厚い釉を全面施釉され、畳付だけ露胎	青緑色	なし	内体面には幅広丸篋描きの蓮弁文が廻っている。	口縁先端は成形ではつまみ上げられているが、施釉でめだたなくなっている。 4区表土
" 2 "		"	13.0 — —	"	"	薄青緑色	"	"	口縁先端がつまみ上げられている。 5区V
" 3 "		A I b	13.7 —	"	厚い釉	淡緑色	"	外体面に細い鎚蓮弁が廻り、弁周を	薄手 5区Ⅲ

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 径	素地	施釉	釉 色	貫入	文 様	備 考
	口		—					2本の細線で描かれている。	
第8図4 PL. 20	折	AIb	12.8 — —	白色微粒子	厚い釉	青緑色	なし	外体面に細い鎬蓮弁が廻り、弁周を2本の細線で描かれている。	5区II
” 5 ”	皿	”	11.4 3.3 5.1	”	厚い釉が全面施釉され、畳付だけは露胎	淡緑色	”	外体面に細い鎬蓮弁が間隔をおいて配されている。弁周は明瞭ではないが、2本線で描かれている。内底に双魚文が貼付	5区II
” 6 ”		AIc	12.7 — —	”	厚い釉	青緑色	”	なし	5区IV0～5
” 7 ”		”	12.1 — —	青白色微粒子	薄い透明釉	灰緑色	”	”	釉調、釉厚、口づくりなど南宋タイプ 5区IV10～15 ” 35～40
” 8 ”		BIa	12.2 3.8 5.0	薄灰色で微粒子	やや厚い透明釉を高台外面まで施釉。畳付から外底までは露胎	黄青色	”	外体面に2本線による蓮弁文。内底には双魚文が貼付されている。	本丸で使用された皿と考えられる。高台内削りが深い。 3区II55～60 本丸A-2II0～5
” 9 ”		BIb	— — 5.4	薄灰色でやや粗粒子	薄い透明釉を高台外面まで施釉。畳付から外底までは露胎	白青色	”	外体面に2本線による蓮弁文。内底に1本の陽圏線。	高台内削りがやや浅く、底部が厚い。
” 10 ”		AIIa	12.9 4.7 5.2	鉄分の多い赤褐色の粘土質で軟質	厚い釉を畳付まで施釉。高台内面から外底までは露胎	淡緑色	荒い貫入が内外全面にみられる。	無鎬の肉厚蓮弁で、弁周を1本線で描いているが、弁がオーバーラップす	底部が厚い 3区II35～40、 4区II0～5 4区II法面、5区

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
	口							る形で描かれている。内体面に劃花文。	Ⅲ、Ⅳ 25～30
第9 図1 PL-21	折	A II b	12.9 4.5 5.8	灰白色微 粒子	薄い釉を高台 内面途中まで 施釉。高台内 面途中から外 底までは露胎	灰 緑 色	部分的に 荒い貫入	外体面に片切り彫 りで弁先の尖った 細い蓮弁が廻って いる。	外底は平坦に 仕上げられて いる。 2区Ⅱ 25～30 3区Ⅱ 0～10
” 2 ”	皿	A II c	11.4 3.6 5.8	白色微粒 子	やや厚い釉を 全面施釉後に 外底釉を蛇の 目状に掻き取 っている。	淡 緑 色	な し	外体面には片切り 彫りで、弁先を丁寧 にそろえない雑な 蓮弁が間隔をあけ て描かれている。 内底に印花文と陽 圏線	4区表土 5区Ⅳ 20～25
” 3 ”		A II c	11.9 3.2 5.9	青白色微 粒子	やや厚い釉を 高台内面途中 まで施釉。高 台内面途中か ら外底まで露 胎	灰 緑 色	な し	外体面には片切り 彫りによる幅広蓮 弁が廻っている。 内底には印花文。	3区土留
” 4 ”		B II a	12.4 3.6 5.4	灰白色微 粒子	やや厚い釉を 高台外面まで 施釉。畳付か ら外底までは 露胎	”	部分的に 荒い貫入	外体面に篋による 弁先を揃えない雑 な蓮弁。	3区Ⅱ 40～45 5区Ⅳ 20～25
” 5 ”		B II b	12.1 4.5 4.4	灰色で粗 粒子	やや薄い釉を 高台外面まで 施釉。畳付か ら外底までは 露胎	”	”	外体面には、尖施文具 で弁先の尖った蓮 弁を深く描いてい る。線が直線で深 いのが特徴	口折部分が外 へあまり延び ない厚手の皿 2区Ⅱ 10～15 3区Ⅱ 25～30 4区 I
” 6 ”		B II c	12.4 3.3 5.1	灰白色の 粗粒子で 白色粗粒 子を含む	薄い釉を ”	”	な し	な し	底部が厚い 5区Ⅱ、Ⅳ 0～5

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第9図7 PL. 21	外	A a	13.0 4.2 6.2	青白色微 粒子	厚い釉を全面 施釉した後で、 外底釉を蛇の 目状に掻き取 っている。	灰 青色	〃	外体面、内体面、 内底に丸篋による 簡略された蓮弁を 描いている。	4区I、III 10～15 5区II、VI 35～40
〃 8 〃	反 口 縁 皿	〃	12.3 3.7 6.0	白色微粒 子	厚い釉を畳付 まで施釉。高 台内面から外 底までは露胎	淡 緑色	〃	外体面には弁先の ない線刻細蓮弁。 口唇に篋を押して 凹凸をつけた稜花 状口縁。内体面は 丸篋で描いた蓮弁。 内底は中央に印花、 周りを篋描きの蓮 弁。	4区I、V 5～10 5区I、IV 25～30 pit
第10図1 PL. 22		Ab	12.4 3.8 6.5	〃	厚い釉を全面 に施釉した後 に外底釉を掻 き取っている。	青 緑色	〃	内底に印花花文	砧青磁に近い 色をした上質 の皿
〃 2 〃		〃	11.5 3.4 5.9	〃	やや厚い釉を 全面に施釉し た後に外底釉 を蛇の目状に 掻き取ってい る。	青 緑色	〃	内底に印花花文が あるが明瞭でない	5区V
〃 3 〃		〃	12.8 3.8 6.3	〃	〃	〃	〃	なし	2区石穴 4区II 5～10 5区II
〃 4 〃		〃	12.5 3.5 6.2	〃	〃	〃	〃	〃	3区II 10～15、 盛土 5区III
〃 6 〃		〃	11.6 3.5 6.6	〃	〃	薄 緑色	〃	〃	4区I
〃 7 〃		〃	12.6 3.6 7.0	〃	〃	〃	〃	〃	5区VII、III

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 高台 口径	素地	施釉	釉 色	貫入	文様	備考
第10図8 PL. 22	外 反 口 縁	A b	13.0 3.8 6.5	白色でや や粗粒子	やや厚い釉を 畳付まで施釉 し、高台内面 から外底まで は露胎。なお、 内底釉は掻き 取っている。	薄 緑 色	細かい貫 入が内外 全面にみ られる。	なし	5区Ⅳ30～35、 Ⅴ0～5 Ⅶ
“ 9 “	皿	A c	11.6 2.7 5.1	灰白色で やや粗粒 子	薄い釉を高台 外面まで施釉。 畳付から外底 まで露胎	“	部分的に 細かい貫 入	“	腰の稜が明瞭 2区Ⅰ、Ⅱ10～20 1号土拵、5区Ⅱ
“ 5 “		B a	13.1 3.4 6.2	灰色でや や粗粒子	薄い透明釉を 高台外面まで 施釉。畳付か ら外底までは 露胎	灰 緑 色	荒い貫入 が内外全 面にみら れる。	内底に印花花文	2区Ⅱ30～35 5区Ⅴ
第11図1 PL. 23	稜 花	—	11.0 3.0 5.5	白色微粒 子	やや厚い釉を 全面施釉した 後で外底釉を 蛇の目状に掻 き取っている。	“	“	内体面上部には口 唇のラマ式蓮弁 弁先に合わせた3 本の櫛目文。下部 には刻花文。内底 には印花花文	口縁はラマ式 蓮弁の弁先形 稜花が6つ廻 っている。 3区Ⅱ30～35、4 区Ⅰ、5区Ⅱ、Ⅲ
“ 2 “	皿	—	13.9 3.1 6.7	“	“	“	“	“	“ 2区Ⅱ10～20、 石穴内 3区Ⅱ25～30
“ 3 “		—	13.8 3.3 6.6	灰白色の やや粗粒 子	“ なお、内底も 蛇の目状の掻 き取り	“	“	“ 内底には1本の圈 線	“ が7つ廻って いる。 3区Ⅱ15～20、 pit
“ 4 “		—	13.5 3.6 7.0	黄白色で やや粗粒 子。軟質	やや厚い釉を 全面施釉した 後で外底釉を 掻き取ってい る。外体面は あばた状に露 胎。	黄 緑 色	“	“ 内底には印花と圈 線	“ 3区Ⅱ30～35 5区Ⅳ20～25

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第12図1 PL. 24	玉縁 口縁	—	11.5 2.9 7.0	白色でやや粗粒子	やや厚い釉を高台外面まで施釉、畳付から外底まで露胎。なお内底釉は掻き取っている。	薄緑色	なし	内底に1本の陽圏線	外底は平坦に仕上げている。 2区II10~20、 3区II10~15、 4区I 5区III
” 2 ”	皿	—	12.2 3.4 7.1	”	”	”	部分的に荒い貫入	”	” 5区IV10~15
” 3 ”	直 口 口 縁	Aa	9.5 3.1 5.5	”	やや厚い失透釉を全面施釉した後で外底釉を蛇の目状に掻き取っている。	”	細かい貫入が内外全面にみられる。	外体面には1本の圏線が廻り、その下に片切彫りによる蓮弁。	2区II20~25
” 4 ”	皿	Ab	10.1 3.4 5.2	灰白色でやや粗粒子	”	黄青色	荒い貫入が全面にみられる	内体面に篋描きの蓮弁が廻り、内底には印花と陽圏線	2区pit
” 5 ”		Ac	12.3 3.6 6.8	白色微粒子	厚い釉を全面施釉した後で外底釉を掻き取っている。	淡緑色	”	内底に印花花文と陽圏線	口縁は若干玉縁状 5区II、M10~15
” 6 ”		Ac	10.4 2.9 6.0	白色微粒子	厚い釉を全面施釉したあとで外底釉を蛇の目状に掻き取っている。	淡緑色	なし	なし	3区II0~5、15~20
” 7 ”		Bc	13.1 3.8 6.8	灰色でやや粗粒子	やや薄い失透釉を高台外面まで施釉。畳付から外底までは露胎	灰緑色	なし	内底に印花花文と1本の陽圏線	3区I、II30~35 pit
” 8 ”		”	12.9 3.5 6.5	”	”	薄緑色	部分的に荒い貫入	内底に印花花文	口縁は若干玉縁状、外底は平坦に仕上げられている。

押図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台 直径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第12図9 PL. 24	直口口縁皿	Bc	11.6 3.9 5.9	灰色でやや粗粒子	やや薄い透明釉を高台外面まで施す。畳付から外底まで露胎。	灰青色	なし	外体面に1本の圏線。内底に印花と1本の陽圏線	口縁が僅かに外反 5区IV15~20、V
" 10 "	縁皿	"	12.6 3.2 6.4	"	やや薄い失透釉を "	灰緑色	細かい貫入が全面にみられる。	内底に1本の陽圏線	3区II 0~10

※ 法量の単位はcm

(3) 青磁盤

盤は破片数で1,000個以上あり、かなり多く使用されたと考えられる。口径25cm前後の大盤が大部分で、中には口径40cmを越す大盤も含まれている。器形によって鏝縁盤と直口口縁盤に大別した。なお、第13図1~4は小破片のため分類からはずしたが、1・2・4は内体面に片切り彫りの刻花文や櫛目文の描かれる古いタイプの盤である。

① 鏝縁盤 (第13図5・6、第14図、第15図1~3、P L. 25・26)

いわゆる鏝のある盤で、内体面の蓮弁によって2つの群に大別した。

I 群—内体面には幅広の篋で蓮弁が1本1本描かれている盤である。

I a 鏝は平坦で、鏝端が稜花の盤。(第13図5)。

I b 鏝端をつまみ上げる盤。(第13図6、第14図1)。

II 群—内体面に2本以上の櫛目による蓮弁が描かれている盤である。すべて鏝端がつまみ上げられている。

II a 内体面に2本櫛で蓮弁文が描かれている。(第14図2・3)。

II b 内体面に3本櫛で " "。(第15図1~3)。

II c 内体面に5本櫛で " "。(第14図4・5)。

② 直口口縁盤 (第15図4・5、P L. 6)

口縁が直口の盤である。同一群と考えられるので、小分類を示した。

a 内体面に2本櫛で蓮弁文が描かれている。(第15図4)。

b 無文の盤である。(第15図5)。

第4表 青磁盤観察表

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第13図1 PL-25	分類 外の 盤	—	24.9 — —	白色でやや粗粒子	厚い釉	淡緑色	全面に荒い貫入	内体面には片切り彫りの刻花文と櫛目文。外体面には圏線がみられる。	深い盤 5区Ⅳ5～10
” 2 ”		—	— — —	白色で微粒子	”	”	なし	内体面に片切り彫りの刻花文。	5区Ⅱ
” 3 ”		—	— — —	灰白色でやや粗粒子	”	”	全面に荒い貫入	鏝上面には鏝端の稜花に沿って1本の線刻文。	鏝端は稜花 5区Ⅳ30～35
” 4 ”		—	41.0 — —	白色でやや粗粒子	”	”	なし	内体面に片切り彫りの刻花文と3本単位の櫛目文	5区Ⅱ
” 5 ”	鏝 縁 盤	I a	25.7 — —	黄白色の微粒子。粘土質で軟質	”	黄緑色	全面に細かい貫入	鏝上面には鏝端の稜花に沿って1本の線刻文。内体面には約11mmの幅広筥による蓮弁文。	鏝が平坦 5区Ⅳ10～15
” 6 ”		I b	42.0 — —	白色微粒子	厚い透明釉	緑色	部分的に荒い貫入	内体面に約11mmの幅広筥による蓮弁文	鏝端をつまみ上げる。 1区Ⅱ 2区Ⅱ
第14図1 PL25の7		”	24.5 — —	青白色でやや粗粒子	厚い失透釉	淡緑色	全面に細かい貫入	内体面に約9mmの幅広筥による蓮弁文	” 3区Ⅱ50～55. pit
” 2 PL-25の8	”	Ⅱ a	25.9 — —	”	”	”	なし	内体面に2本櫛（1本の幅約4mm）による蓮弁文。	” 5区Ⅲ5～10
” 3 PL-25の11	”	”	25.8 5.7 10.5	白色微粒子	やや厚い釉を全面施釉した後で外底釉を蛇の目状に掻き取っている。	”	”	”	内底は1段下がる。 2区Ⅱ25～30 3区Ⅱ15～20 5区Ⅲ ”

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	類	口径 器高 台径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第15図1 PL.26	罽 縁 盤	II b	23.7 4.2 10.0	青白色微 粒子	やや厚い釉を 全面施釉した 後で外底釉を 蛇の目状に搔 き取っている。	黄 緑 色	部分的に 荒い貫入	内体面に3本櫛（ 1本の幅約4mm） による蓮弁文。	内底は1段下 がる。 3区II10～15. pit 5区II.Ⅳ0～5
“ 2 “		“	22.8 5.8 8.0	“	“	“	全面に荒 い貫入	“	“ 2区I、II0～10 5区II
“ 3 “		“	26.2 6.1 9.0	“	“	“	“	“	“ 3区pit、 4区II10～15
第14図4 PL.25 の9		II c	22.2 — —	灰白色で やや粗粒 子	厚い釉	淡 緑 色	なし	内体面に5本櫛（ 1本の幅約2mm） による蓮弁文。	罽端をつまみ 上げる。 2区II35～40
“ 5 PL.25 の10		“	23.4 6.2 8.9	“	厚い透明釉を 全面に施釉し た後で外底釉 を蛇の目状に 搔き取っている。	黄 緑 色	全面に荒 い貫入	“	2区II20～25 3区II15～20 pit 4区I、II6～10、 5区II
第15図4 PL.26	直 口 縁 盤	a	22.5 4.6 13.9	青白色微 粒子	“	緑 色	外体面か ら高台に かけて荒 い貫入が みられる。	内体面に2本櫛（ 1本の幅約4mm） による蓮弁文。内 底に印花と陽圏線	高台が付く。
“ 5 “		b	“	“	“	“	全面に荒 い貫入	内底に陽圏線	高台が付く。

※ 法量の単位はcm

(4) 青磁杯 (第16図、PL.27)

杯は少なく、10点ぐらいである。器形や文様によって腰折杯、蓮弁文杯、べっ甲口杯、碁笥底杯

に大別した。個体数が少ないので、小分類については今後の資料を俟ちたい。

① 腰折杯 (第16図1)

高台は細く、口縁がわずかに鐮状を呈する。素地は薄く釉は厚い。全面施釉で畳付だけ露胎である。

② 蓮弁文杯 (第16図2・3)

外体面には線刻蓮弁を、内体面には幅広の篋描き蓮弁を廻らす杯である。成形の段階では高台が(注2)付いているが、施釉で碁笥底状の底部になっている。この種の杯は新安の遺物にも見られる。

③ ベっ甲口杯 (第16図4)

成形の段階ではべっ甲口になっているが、厚い釉を施釉してほとんど内湾状の杯になっている。底部は碁笥底である。釉が厚いのが一つの特徴である。

④ 碁笥底杯 (第22図5～9)

無文の碁笥底杯である。底部や口縁などで若干の差異は認められるが、同一類の杯と考えられる。杯ではこの碁笥底杯が最も多い。

第5表 青磁杯観察表

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台 口径	素地	施釉	釉 色	貫入	文様	備考
第16図1 PL. 27	腰折杯	—	11.1 4.4 5.6	白色微粒 子	厚い失透釉を 全面に施釉。 畳付だけ露胎	青 緑 色	なし	なし	高台の高い薄 手杯
“ 2 “	蓮 弁 文 杯	—	11.6 3.7 (8.1)	“	やや厚い釉を 全面に施釉し て後で、外底 釉を掻き取っ ている。	淡 緑 色	荒い貫入 が全面に みられる。	外体面には1本の 稜線が廻り、弁先 のない線刻蓮弁。 内体面は幅広の篋 描き蓮弁	底は碁笥底状 4区Ⅲ15～20、 Ⅳ、5区Ⅲ
“ 3 “	杯	—	10.2 3.5 (6.4)	“	“	“	なし	“	“ 4区Ⅱ0～5、 5区Ⅲ、Ⅳ35～40
“ 4 “	べっ 甲口 杯	—	13.0 4.6 (8.6)	“	厚い釉を全面 に施釉。外底 釉の掻き取り の有無は不明	“	荒い貫入 が全面に みられる。	外体面には篋描き の蓮弁文。内体面 には刻花文。	底は碁笥底、口 縁造りに特徴 4区Ⅰ、盛土、 5区Ⅱ
“ 5 “			7.2	“	やや厚い釉を	灰	なし	なし	3区Ⅱ 50～55

挿図番号 図版番号	名称 又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉 色	貫入	文様	備考
	碁 筭 底 杯		3.3 (2.3)		底部際まで施 釉。底部界か ら外底までは 露胎	緑色			
第16図6 PL. 27		—	6.4 3.0 (3.6)	白色微粒 子	厚い釉を畳付 外端まで施釉。 畳付から外底 までは露胎	淡緑色	なし	なし	碁筭底だが、 畳付が平坦に つくられている。 2区II 35～40
” 7 ”		—	6.9 3.4 (3.8)	灰白色微 粒子	”	灰青色	”	”	” 5区III、V
” 8 ”			6.5 3.7 (3.0)	白色でや や粗粒子	やや厚い釉を 底部際まで施 釉。底部際か ら外底までは 露胎	薄黄緑色	”	”	内底が段を持 って凹む。畳 付が尖ってい る。 5区II、IV 5～10
” 9 ”			7.8 3.4 (3.7)	”	やや厚い釉を 畳付外端まで 施釉。畳付か ら外底までは 露胎	”	”	内底に陽圏線	碁筭底だが、 畳付が平坦に つくられてい る。 3区II 45～50、 4区I

※ 法量はcm、()は底径

(5) 青磁香炉

香炉も少なく、10点ぐらいである。大きさに大小はあるが、すべて三足香炉と考えられる。香炉にはA窯系とB窯系がある。

① 三足香炉 (第17図、PL. 28)

三足の千鳥足をもつ筒形の香炉で、資料が少ないので小分類で示した。

A a 口唇部が凹む寄口口縁で、外体面に算木文が廻っている。(第17図1・2)。

A b 直口口縁で、外体面には弦文が廻っているのと無文のとがある。(第17図6～9)。

B a 口唇部が凹む寄口口縁で、外体面に算木文が廻るのと弦文が廻るのがある。(第17図3～5)。

第6表 青磁香炉観察表

挿図番号 図版番号	名称 又は仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考	
第17図1 PL. 28	三 足 香 炉	A a	7.8 — —	灰白色で やや粗粒 子	厚い釉をかけ ているが、内 体面下部から 内底までは露 胎と考えられ る。	青 緑 色	荒い貫入 が全面に みられる。	外体面上部に幅3 mmの凸帯文を廻ら し、その下に算木 文を配する。	寄口香炉 1区II	
” ”		2	”	14.3 — —	白色微粒 子	”	淡 緑 色	”	外体面上部に幅2 mmの凸帯文を廻ら し、その下に3本 の算木文が見られ る。	” 3区II 50～55
” ”		6	A b	7.3 — —	”	”	黄 緑 色	なし	外体面には幅3mm の篋描きの弦文が 廻っている。	直口香炉 5区IV 0～5、V
” ”		7	”	7.3 — —	灰白色で やや粗粒 子	”	灰 緑 色	”	外体面に2本の細 線が廻っている。	” 2区II 35～40
” ”		8	”	7.4 — —	”	”	”	”	なし	” 5区IV 35～40
” ”		9	”	— — 3.2	白色微粒 子	厚い釉を内体 面途中から高 台外面まで施 釉。内体面途 中から内底ま でと、畳付か ら外底までは 露胎	薄 緑 色	”	”	” 3区Aの炉跡
” ”		3	B a	7.4 4.7 3.7	灰色でや や粗粒子	やや薄い釉を 内体面途中か ら高台外面ま で施釉。内体 面途中から内 底までと、畳 付から外底ま では露胎	灰 緑 色	なし	外体面に1本の凸 帯文と3本の算木 文が廻っている。	寄口香炉 1区II 3区II 50～55

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	類	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉 色	貫入	文様	備考
第17図4 PL. 28		B a	7.2 — —	灰色でやや粗粒子	やや厚い失透釉が全面にかかっている。	灰緑色	なし	外体面には幅 2 mm の篋描きの弦文が廻っている。	寄口香炉 5区II
“ 5 “		“	8.1 — —	“	やや薄い釉を内体面上部から外体面に全体にかけている。	“	“	外体面には幅 3 mm の篋描き弦文が廻っている。	“ 3区II 25～30

※ 法量の単位は cm

(6) 青磁壺 (第18図1～7、PL. 29)

ここにまとめたのは、いわゆる酒会壺と呼ばれている大壺とその蓋である。破片はかなり検出されているが小破片が多く、若干大きめの破片だけを図示した。

1は径17.2cm、高さ約4.2cmの櫛描き蓮弁文蓋である。素地は青白色微粒子で、黒色粗粒子が混入している。緑色の厚い釉が鋳端から甲全体に施釉され、鋳下面から裏面全体は露胎である。蓋甲下周（鋳際上部）を4等分する位置に5本櫛による櫛描き蓮弁が1枚ずつ描かれ、その左右には外反する櫛描き文が描かれる文様構成だと考えられる。蓋甲頂周にも同様な櫛描き蓮弁文が2本圏線を挟んで、逆方向に描かれている。頂部に撮みが付くかどうかは不明である。この蓋は一般的な酒会壺の蓋ではなく、鋳が短く合子の蓋のような形をしている。（2区II 10～20）。2は鋳が波打つ波状鋳の蓋と考えられる。素地は白色微粒子である。釉は鋳端から甲全体に厚い失透釉を施釉し、鋳下面から裏全面体は露胎である。蓋甲には片切り彫りによる刻花文が描かれているが、文様構成については明らかでない。（3区II 45～50）。3は径約24.2cmの蓋である。素地や施釉などは2と同じであるが、釉色は青緑色を呈する。鋳上面には鋳端に沿って2本圏線が廻り、蓋甲には片切り彫りの刻花文が描かれている。（3区II 25～30）。

4は口径13.8cmの蓮弁文壺である。口縁は低く垂直に立ち上がるいわゆる甑口である。素地は灰白色微粒子で、釉は厚い灰緑色の失透釉である。全面施釉の後口唇部釉を掻き取って露胎にしている。甑際から肩部に細い蓮弁が篋削りによって肉厚に仕上げられている。（4区II最下層）。5は広口の甑口酒会壺である。肩部に1つの段が設けられ、その下に片切り彫りによる刻花文が描かれているが、文様構成については小破片のため不明である。（3区pit）。6は大形壺の底部である。

素地は白色微粒子で黒色の粗粒子が混入している。厚い緑色釉を全面施釉のあと畳付だけ掻き取って露胎にしている。底はいわゆる落し底である。底部脇には丸筥による細蓮弁文らしいのが描かれている。(5区Ⅲ25~30)。7は底径9.8cmの壺の底である。素地は白色微粒子で、釉は緑色の厚い透明釉である。畳付だけ露胎で、底は落し底である。文様については明らかでない。(5区Ⅱ)。

(7) 青磁水注 (第19図1・2、PL・30)

水注と考えられる破片は非常に少ない。1・2は素地、釉調、貫入等から同一個体と考えられる。素地は白色微粒子で、釉は薄緑色の透明釉である。荒い貫入が全面に見られる。1は頸部破片である。やや厚い釉が内外面に施釉されている。頸部にはくずれた蕉葉文が描かれ、口縁内面には1本の圈線が見られる。(4区Ⅰ)。2は注口の破片である。やや厚い釉が外面と注口先端内面まで施釉されている。注口上面には水注本体とブリッジ状に結ばれていた痕跡が見られる。(5区Ⅱ)。

(8) 青磁瓶

瓶は少なく、復元できたものない。破片ではあるがある程度器形が推定できる。器形推定で見ると、玉壺春瓶、梅瓶、花瓶などがある。

① 玉壺春瓶 (第19図3・4、PL・30)

3は玉壺春瓶か水注の頸部である。素地は白色微粒子で、やや厚い緑色釉が内外面に施釉されている。頸部には細線描の蕉葉文がオーバーラップで描かれている。(2区Ⅱ)。4は玉壺春瓶の口縁部である。素地は白色微粒子で、釉は薄い緑色である。釉は外表面と内表面頸部まで施釉され、内表面頸部より下は露胎である。文様の有無については不明である。(4区Ⅰ)。

② 梅瓶 (第19図5・6、PL・30)

5は梅瓶の鐔付蓋と考えられる。素地は青白色微粒子である。緑色のやや厚い釉が蓋甲に施釉され、裏面は露胎である。甲には筥描きのくずれた捻じ花が施文されている。鐔の部分は意識的に細かく打ち欠いており、二次使用したものと考えられる。(3区Ⅱ50~55)。6は梅瓶の口縁部である。素地は灰白色でやや粗粒子である。釉はやや厚い灰緑色釉で、全面施釉の後口唇部釉を掻き取って露胎にしている。(5区Ⅱ15~20)。

③ 花瓶 (第19図7・8、PL・30)

7は環耳花瓶の環の破片である。素地は青白色微粒子で、釉は薄緑色でやや厚い。龍文が花瓶本体の頸部に貼付され、その龍文と花瓶本体の肩部に環が貼付されるものと考えられる。(3区25~30)。8は器体厚が約12mm、頸径が約15cmの大花瓶の頸部破片と考えられる。素地は白色微粒子で、釉は厚い緑色失透釉である。頸上部には幅約6mmの筥描きの弦文が廻り、頸下部には2本の凸帯文が廻っている。2本の凸帯文内には筥描きの蔓唐草文が描かれている。(4区Ⅱ15~20、3区pit)。

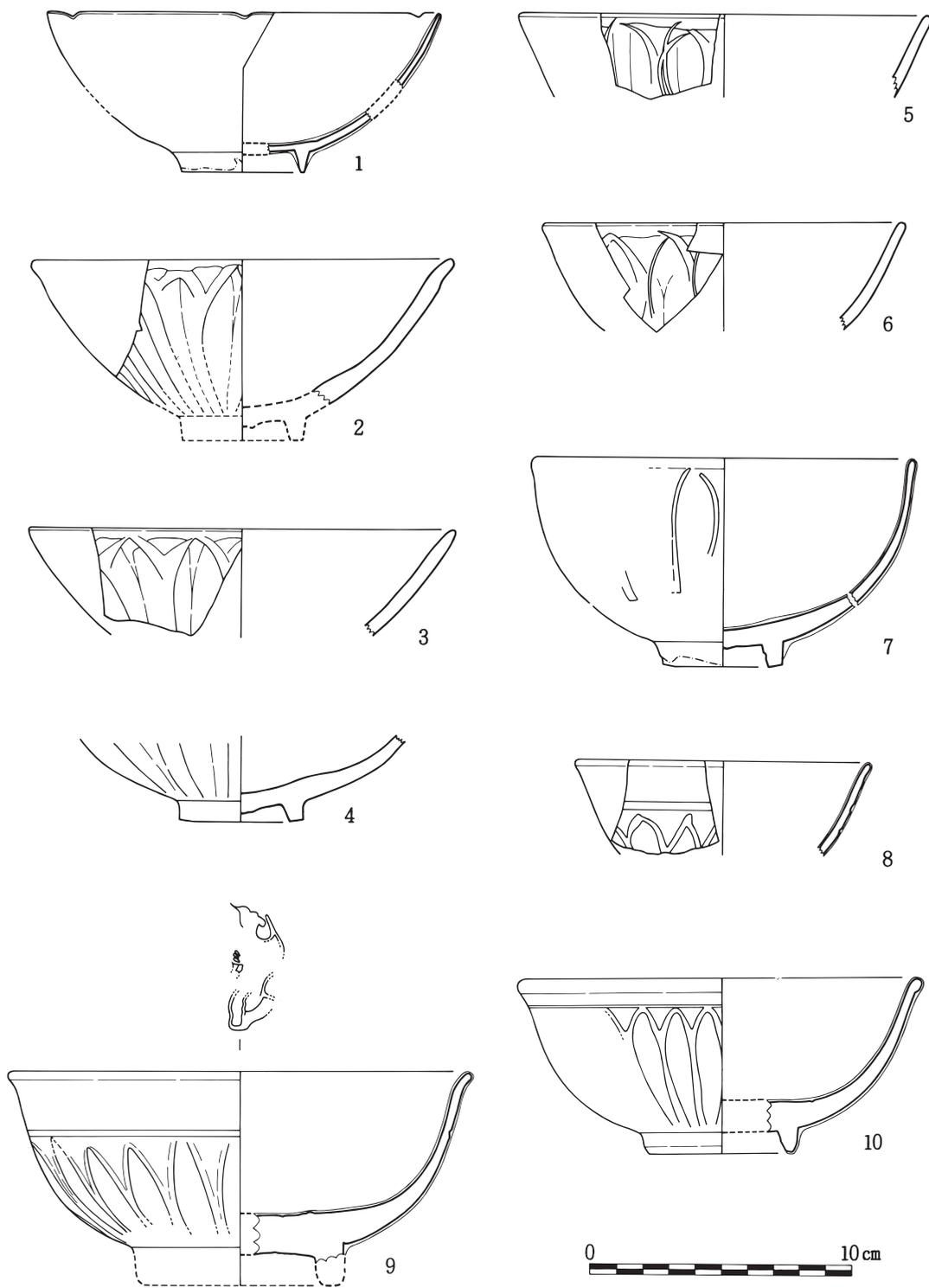
(9) 青磁仏像 (第19図9、P.L. 30)

I
出土したのはこの1点だけである。素地は白色微粒子で、釉は緑色釉である。厚い釉が外体面に施釉され、内体面は露胎であり、露胎面には細かい布目が見られる。頭は欠損しているが、頸から胸上部は露胎で淡紅色を呈している。頸前面には3本の沈線が描かれている。着物は施釉で表現され、着物の上には細い凸帯文にきざみを入れて陽円文状に表現した数珠が見られる。このような仏像は新安海底出土の遺物の中にも見られる。^(注3)(4区II 25～30)。(金武)

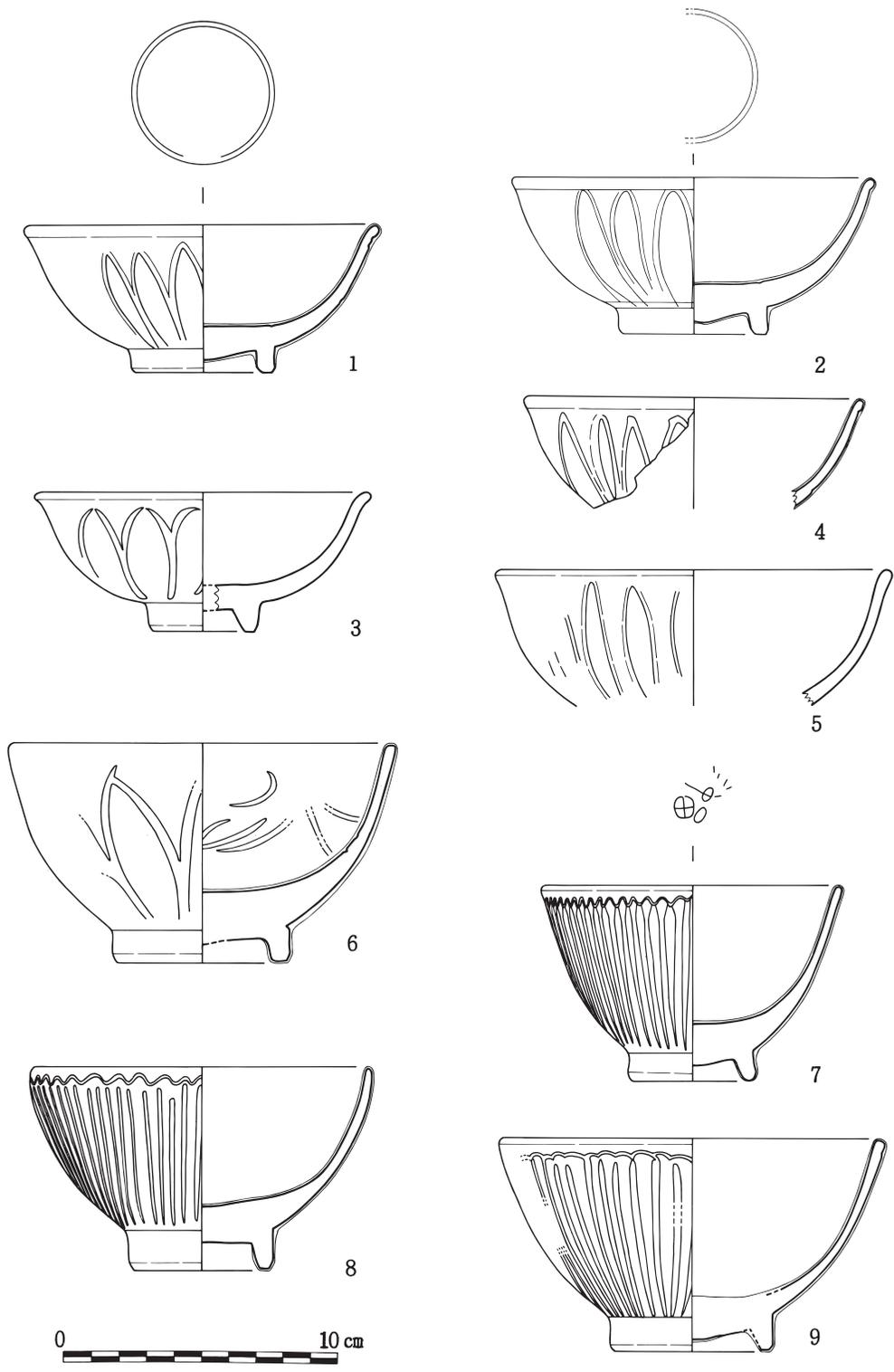
注 (1) 「佐敷グスク発掘調査報告」佐敷町教育委員会 1980

(2) 「新安海底文物」国立中央博物館 1977

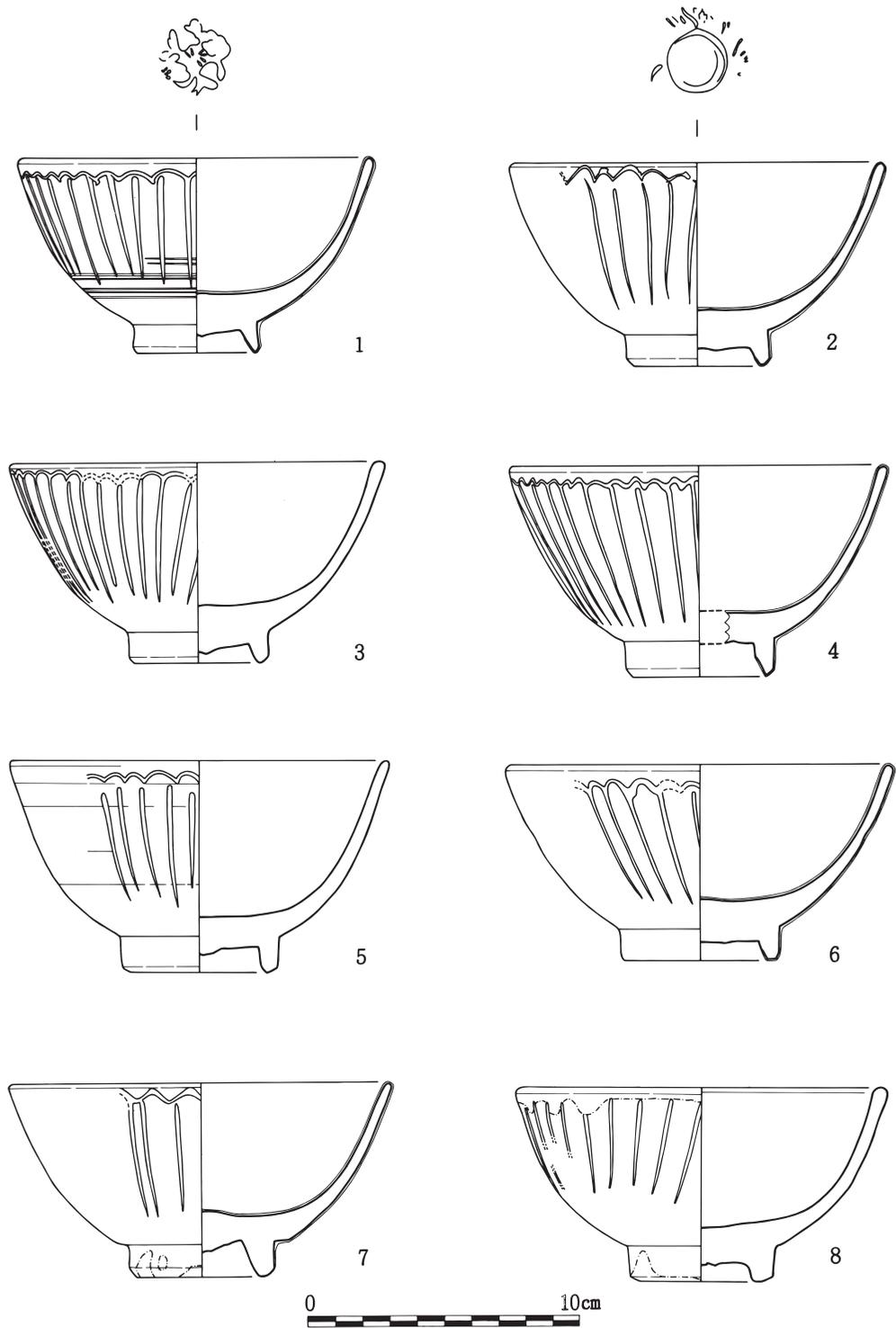
(3) 同 上



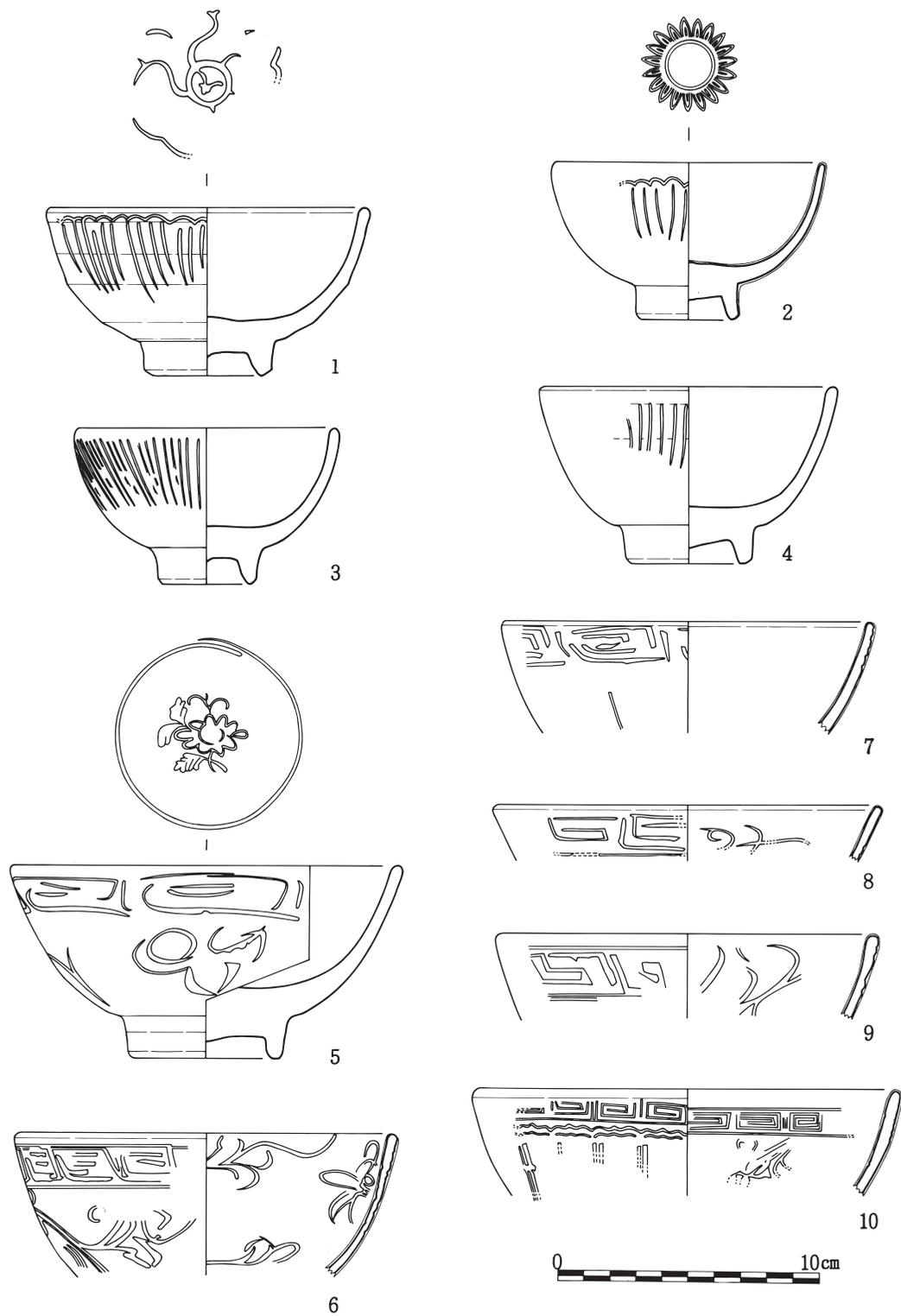
第1図 (PL.13) 青磁碗 (1. 輪花、2~4. 蓮弁文 I 7. 蓮弁文 II a 8~10. 蓮弁文 II b)



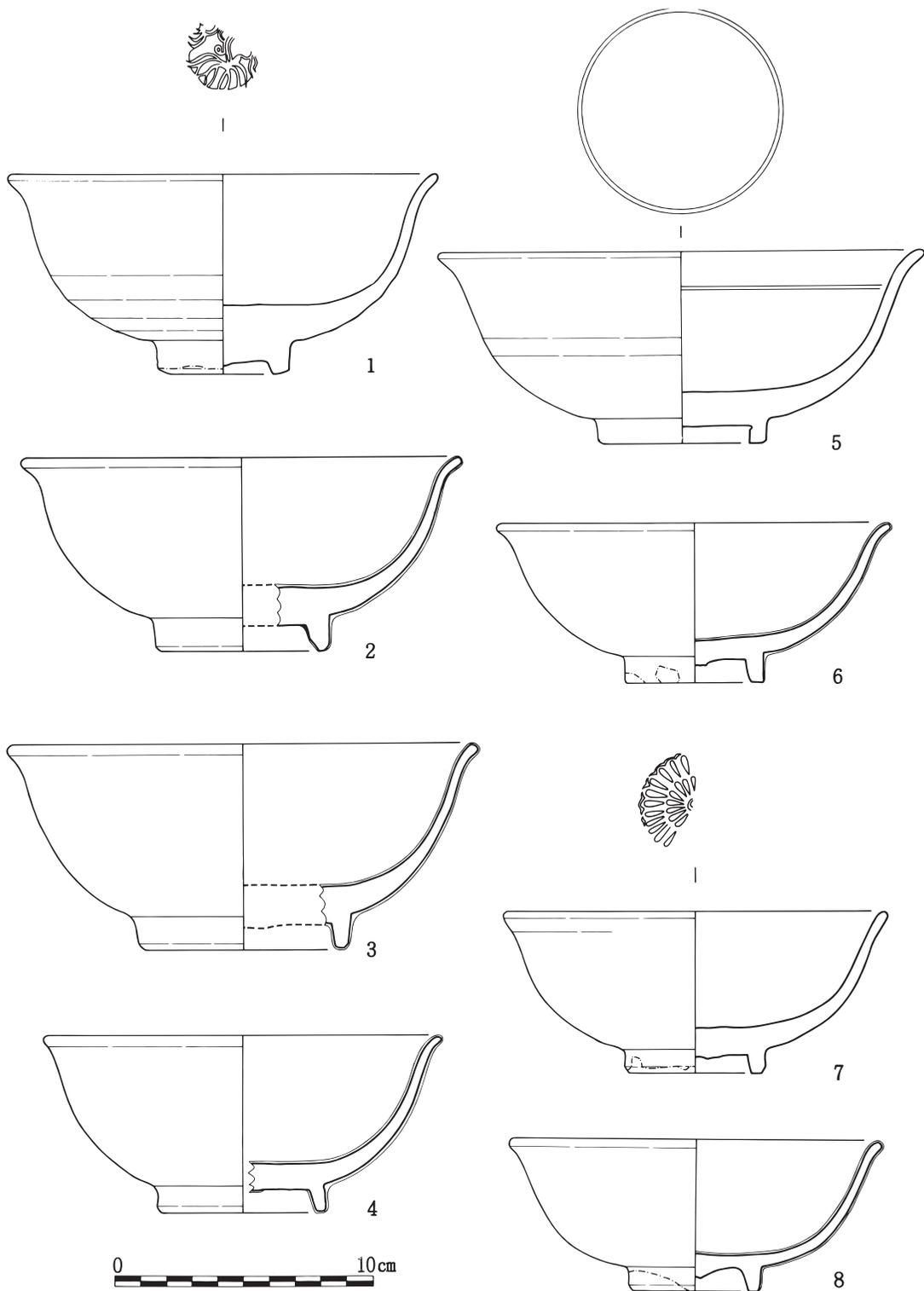
第2図 (PL.14) 青磁碗 (1・2. 蓮弁文IIc 3~5.蓮弁文II d 6.蓮弁文II e 7~9.蓮弁文III a)



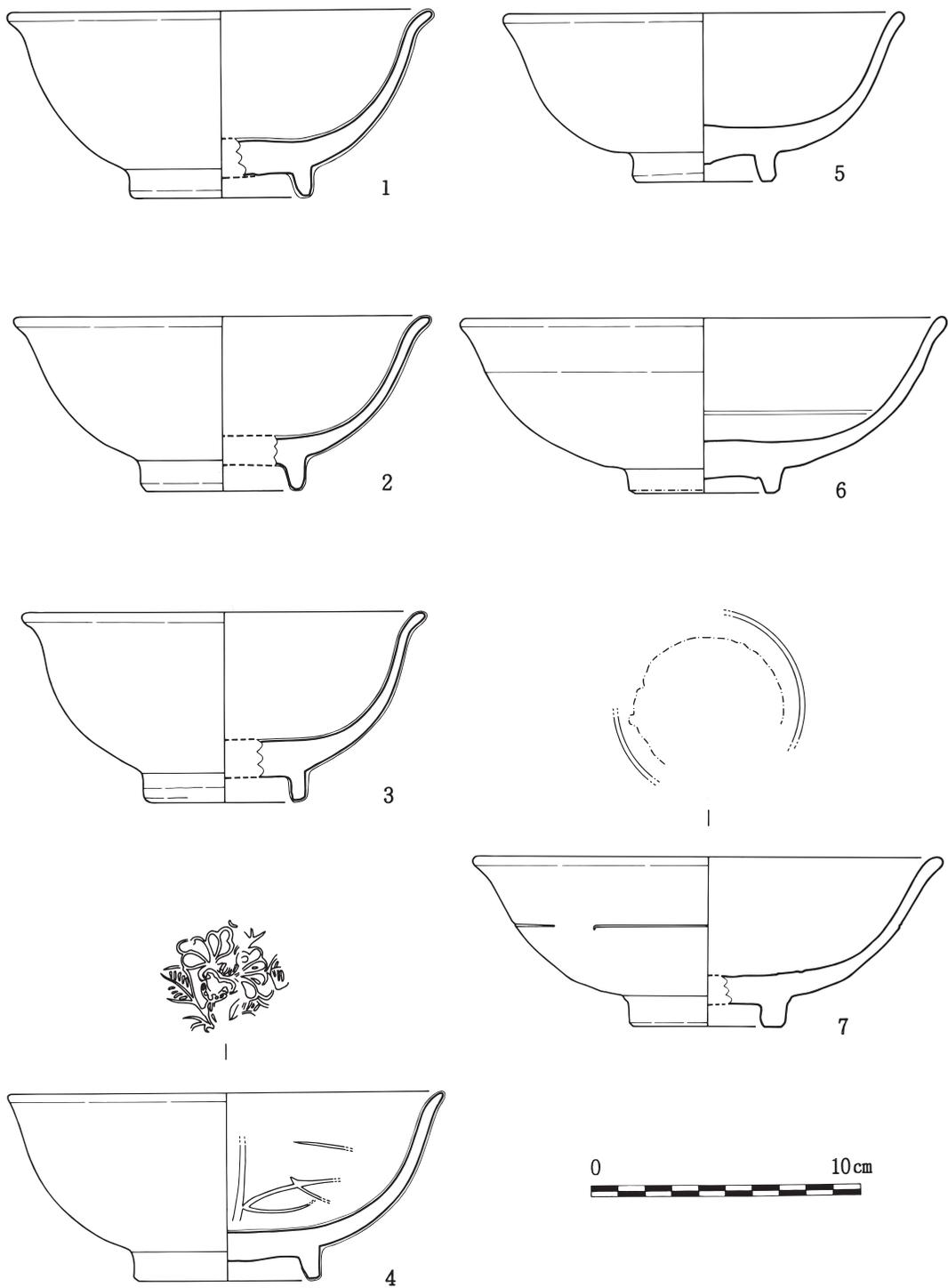
第3図 (PL.15) 青磁碗 (1~8. 蓮弁文Ⅲb)



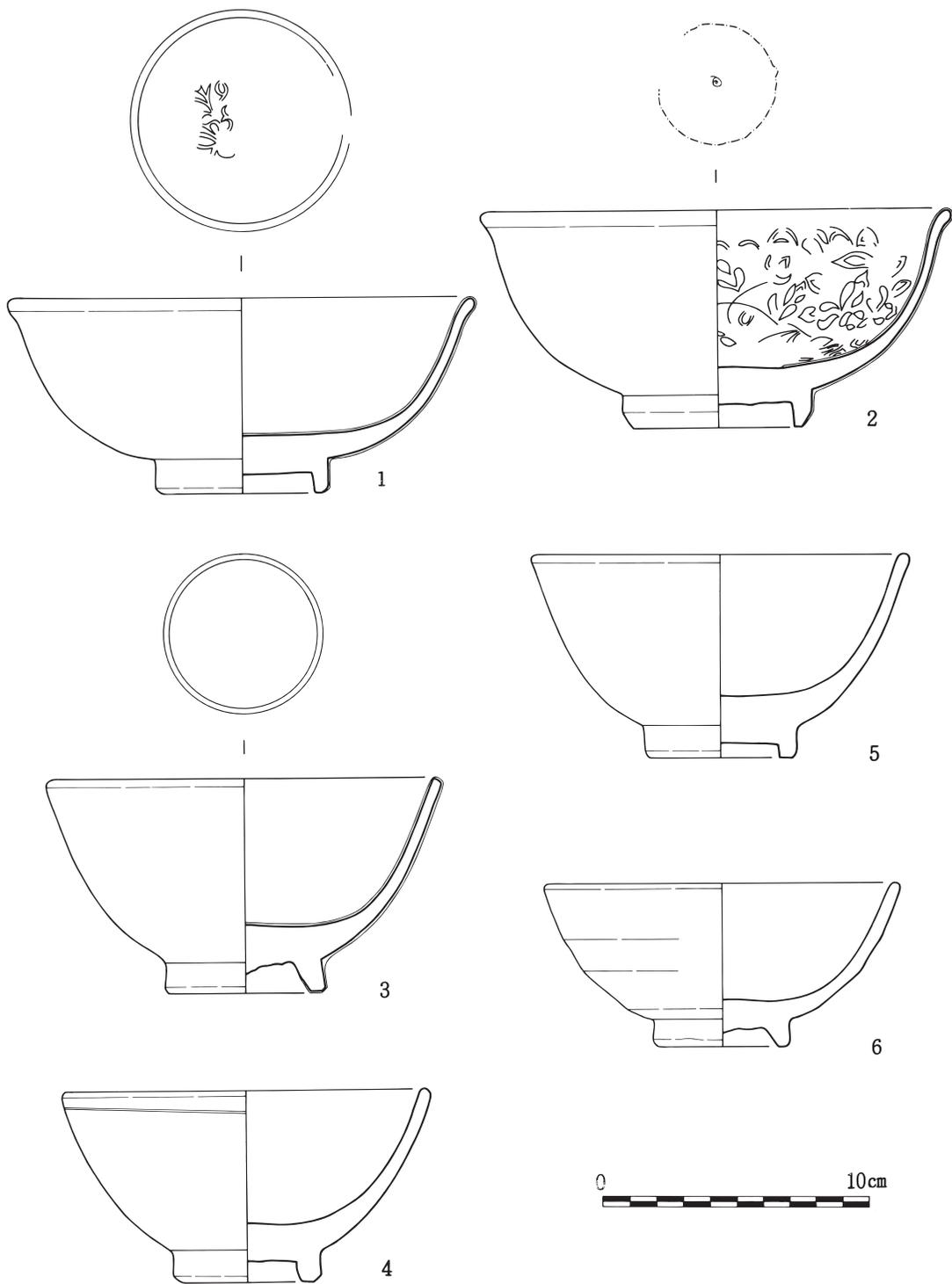
第4図 (PL.16) 青磁碗 (1~4. 蓮弁文Ⅲ c 5~9. 雷文帶 a 10.雷文帶 b)



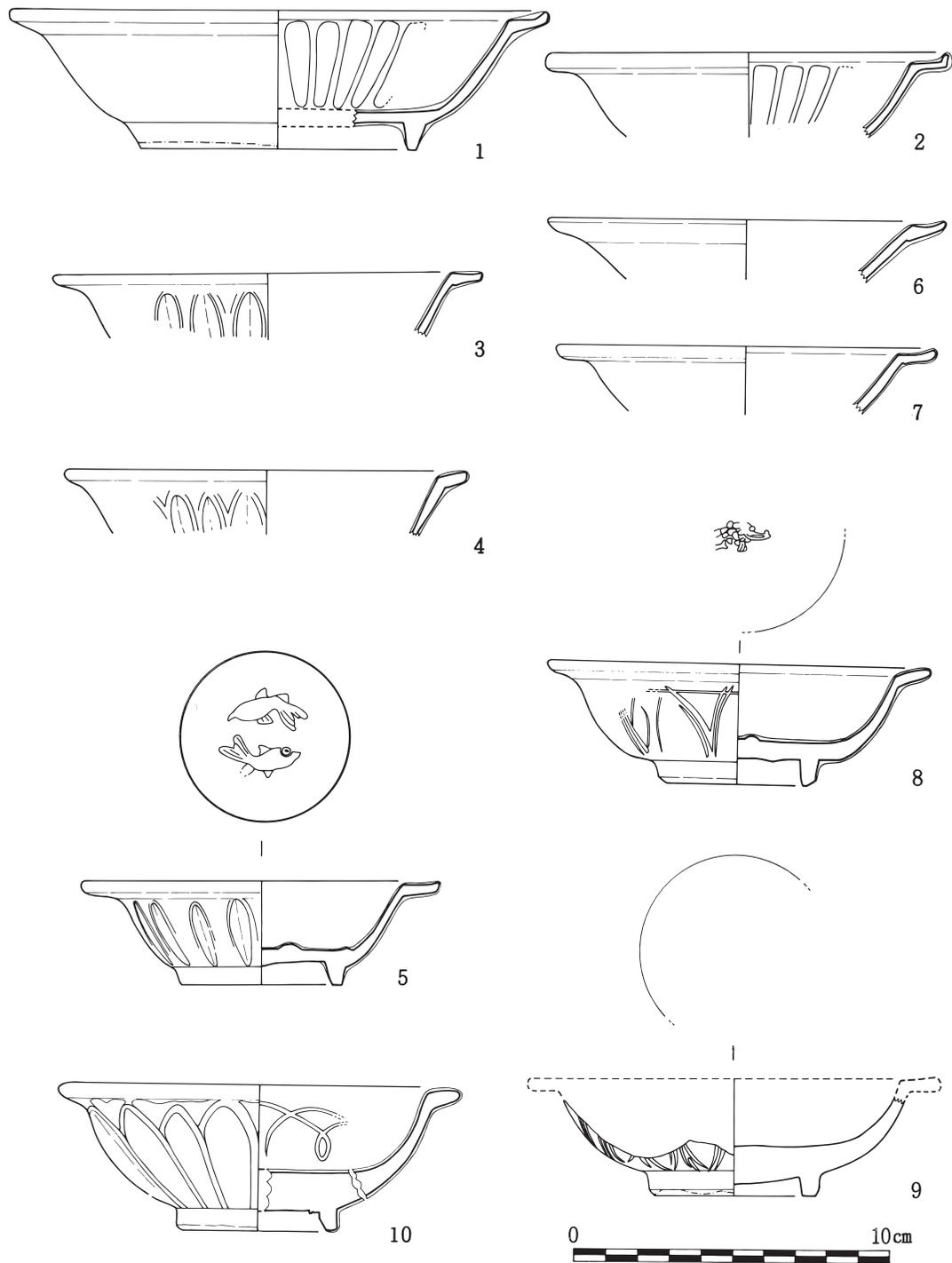
第5図 (PL.17) 青磁碗 (1. 外反口縁A I 2・3. 外反口縁A II a 4. 外反口縁A II b 5. 外反口縁B II a 6~8. 外反口縁B II b)



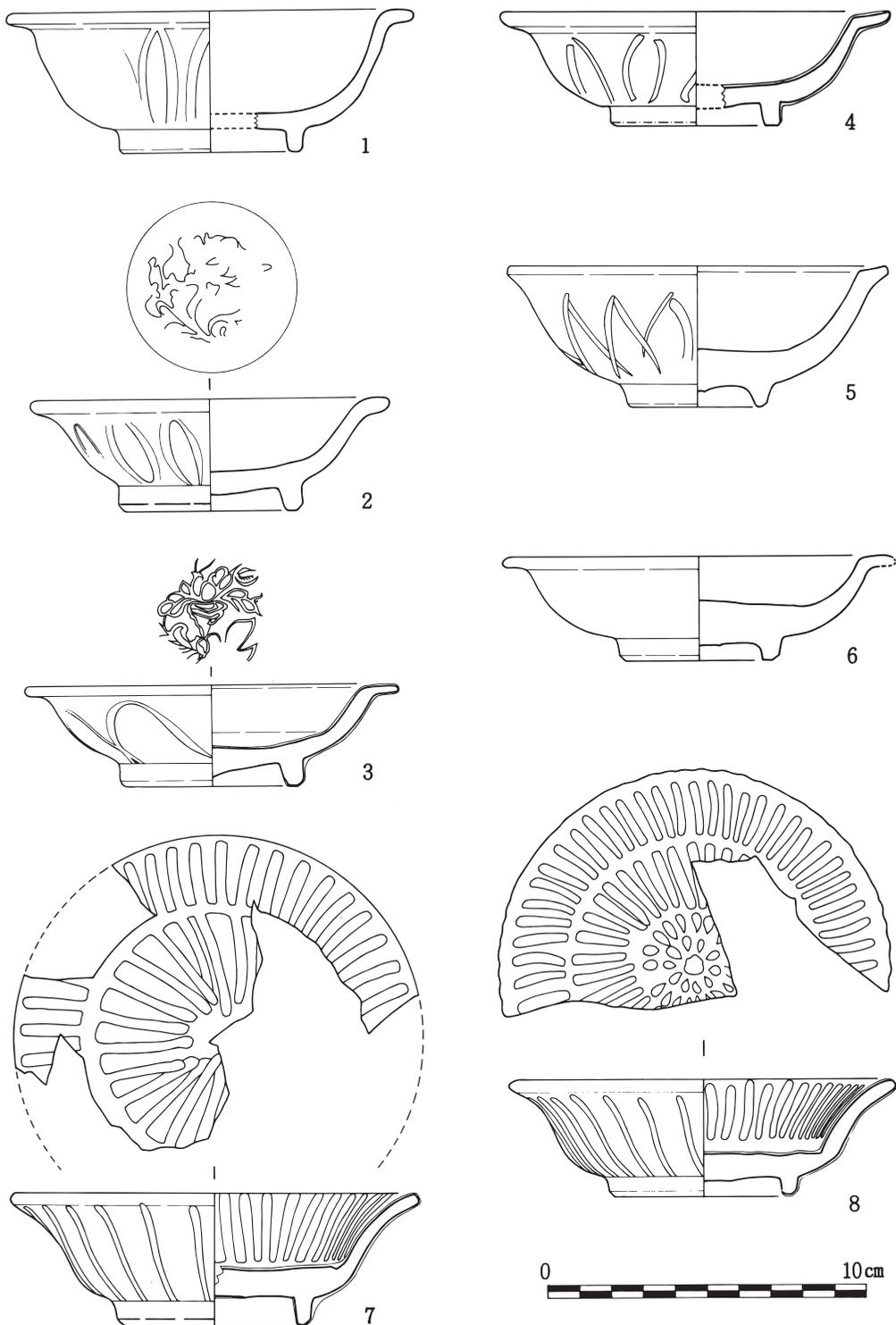
第6図 (PL.18) 青磁碗 (1~3. 外反口縁AⅡb 4. 外反口縁AⅡc 5. 外反口縁BⅡb 6・7. 外反口縁BⅡc)



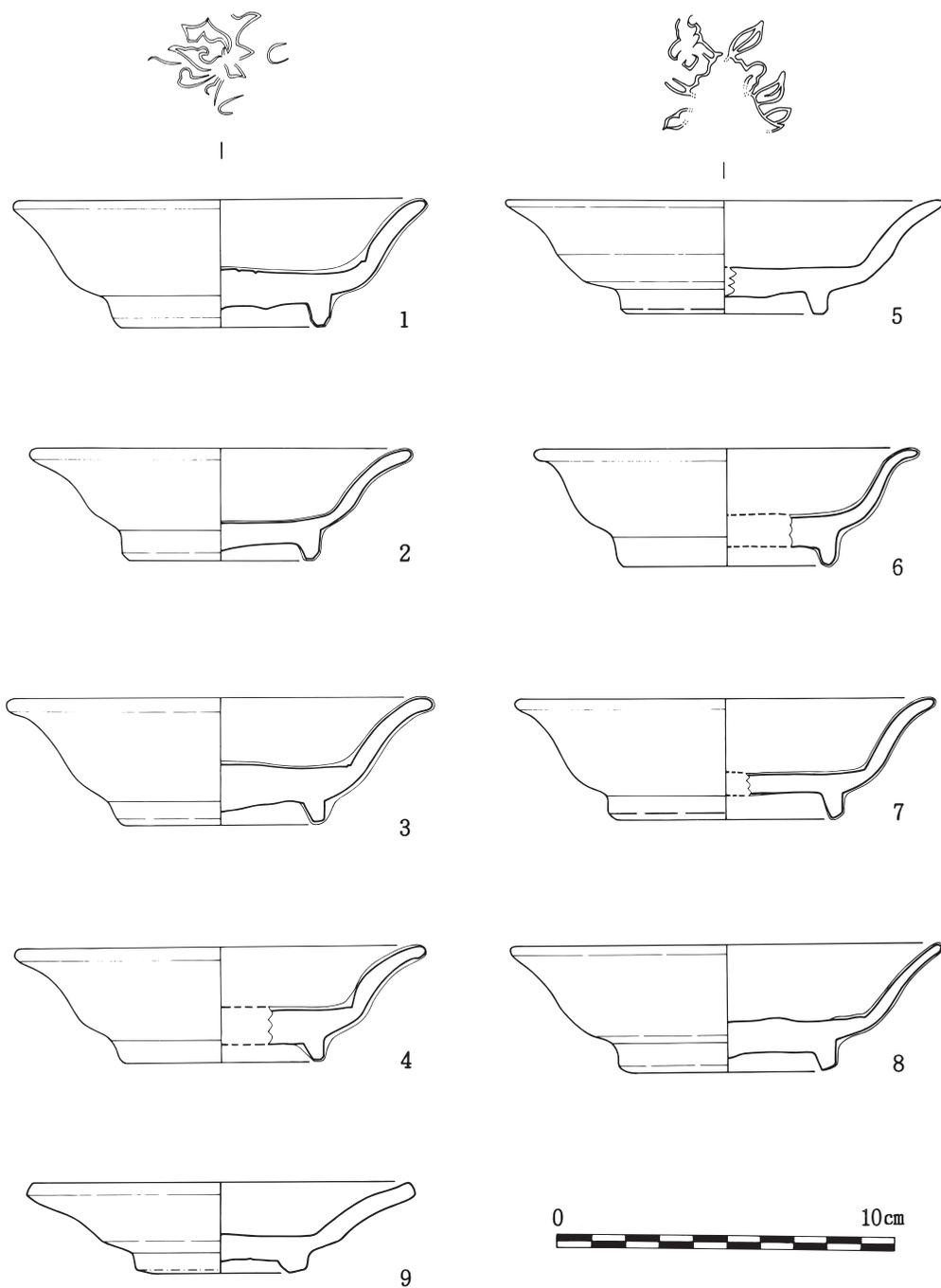
第7図 (PL.19) 青磁碗 (1.玉縁口縁 a 2.玉縁口縁 b 3~5.直口口縁 a 6.直口口縁 b)



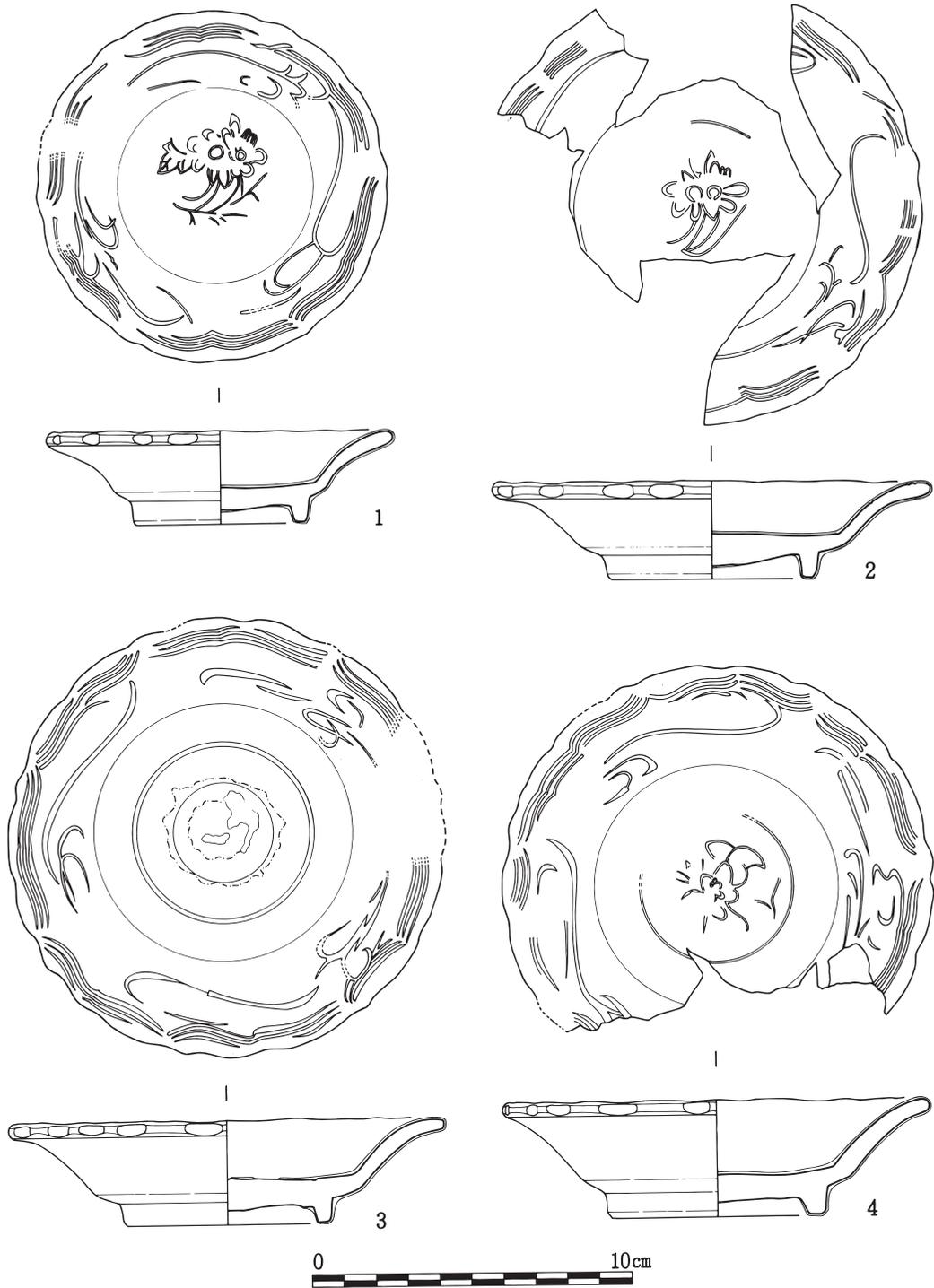
第8図 (PL.20) 青磁皿 (1・2.口折A I a 3~5.口折A I b 6・7.口折A I c 8.口折B I a 9.口折B I b 10.口折A II a)



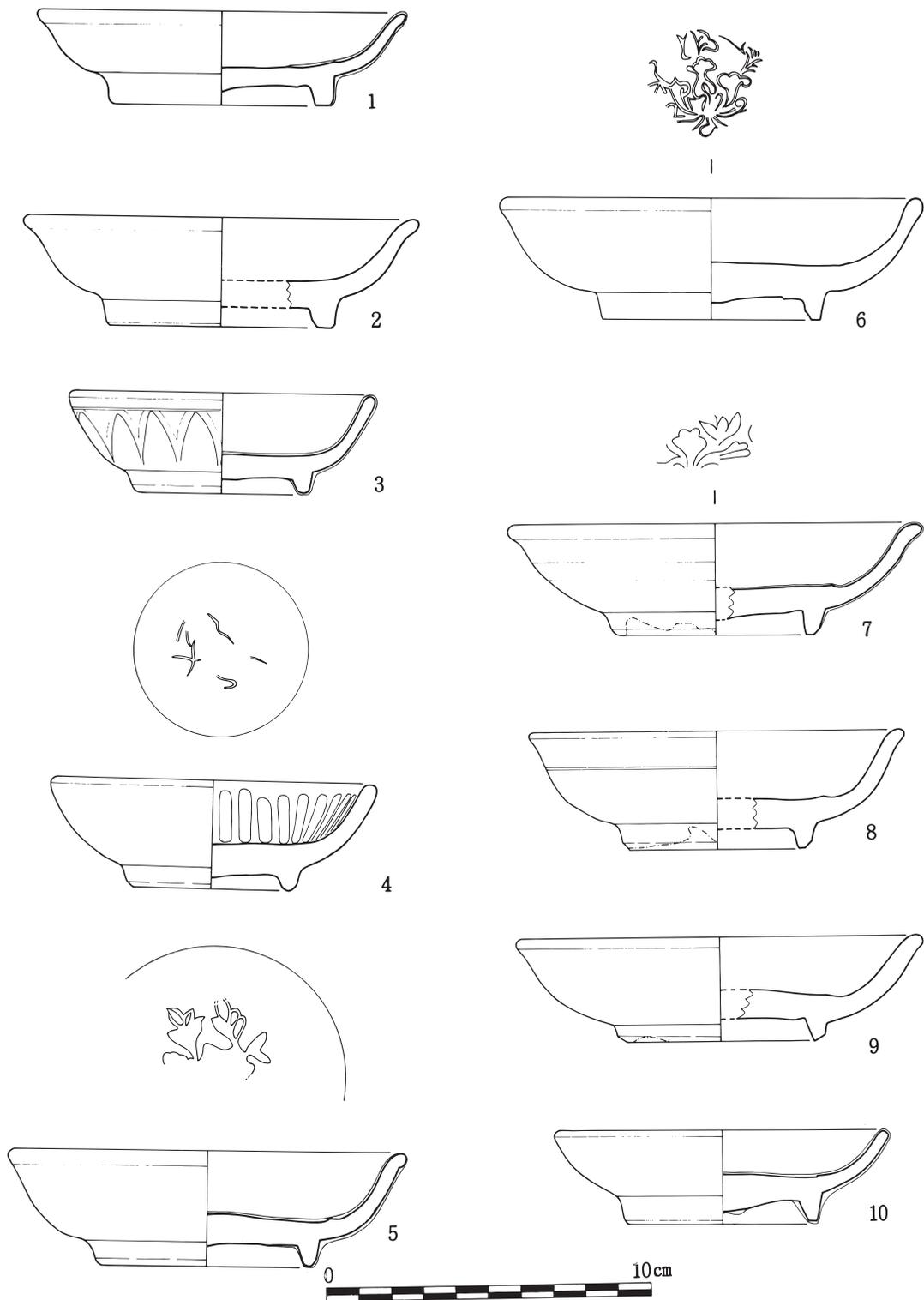
第9図 (PL.21) 青磁皿 (1. 口折A II b 2・3. 口折A II c 4. 口折B II a 5. 口折B II b 6. 口折B II c 7・8. 外反口縁A a)



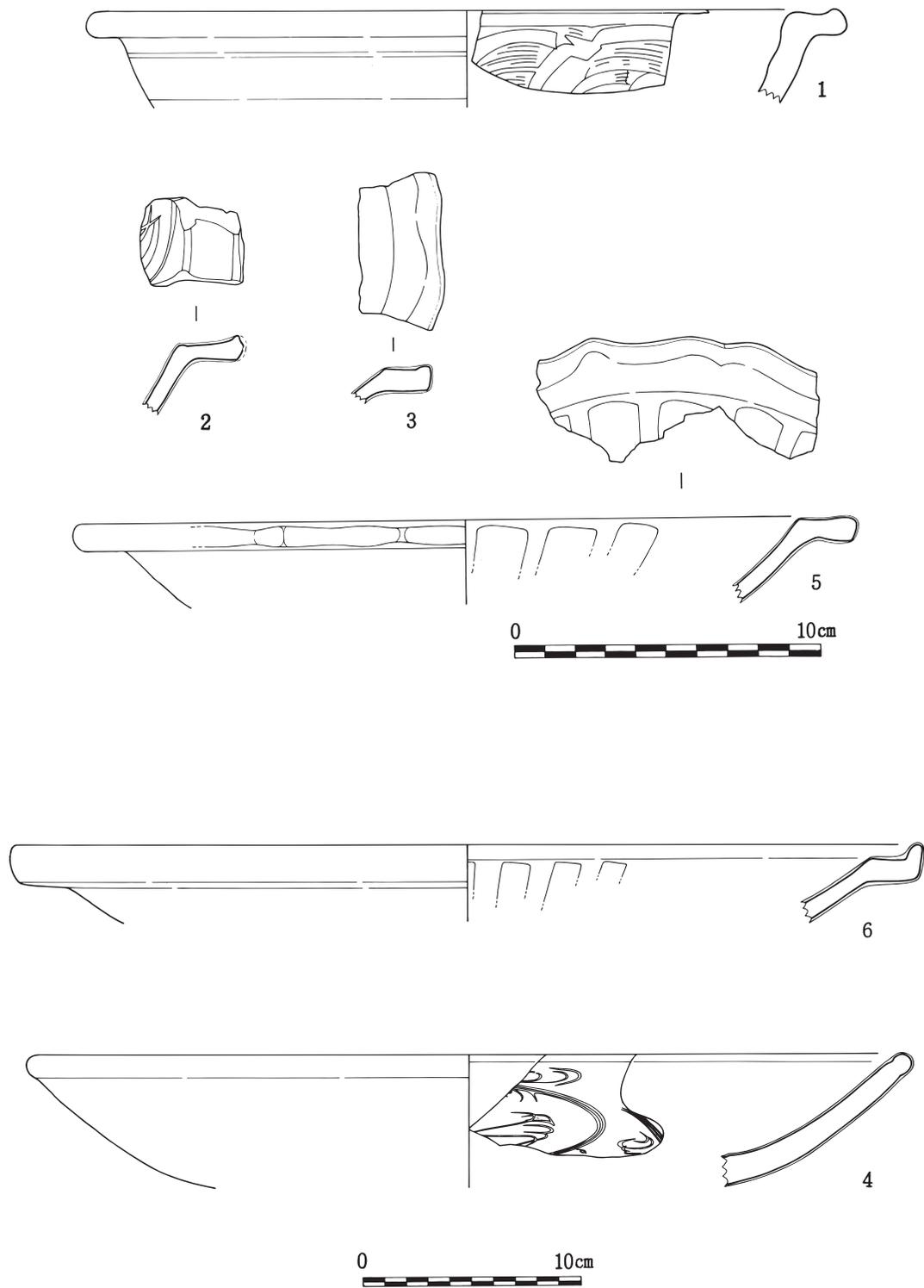
第10図 (PL.22) 青磁皿 (1~4. 6~8.外反口縁A b 9.外反口縁A c 5.外反口縁B a)



第11图 (PL.23) 青磁皿 (稜花)

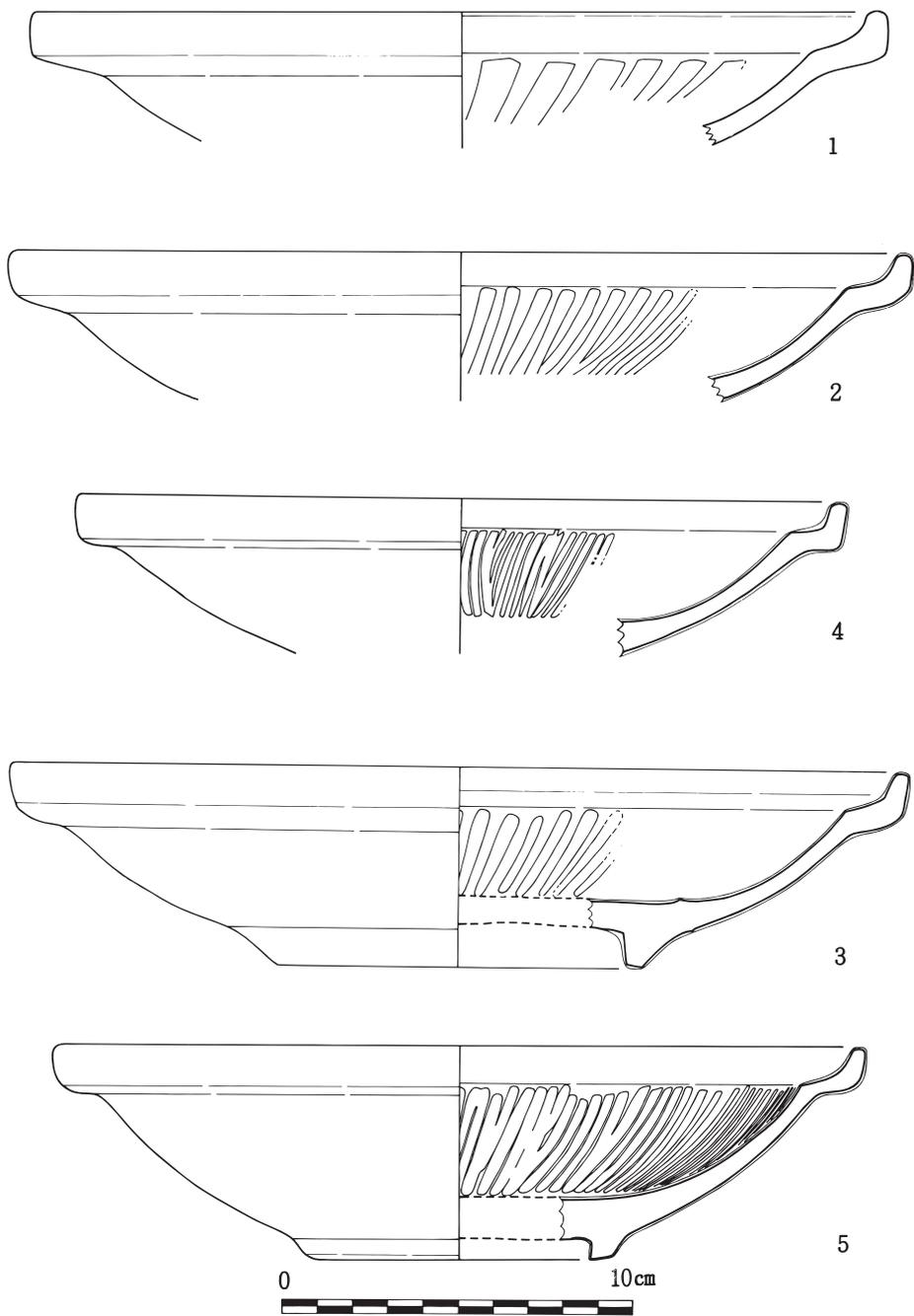


第12図 (PL.24) 青磁皿 (玉縁口縁皿1・2 直口口縁皿A a-3、A b-4、A c-5・6、B a-7~10)

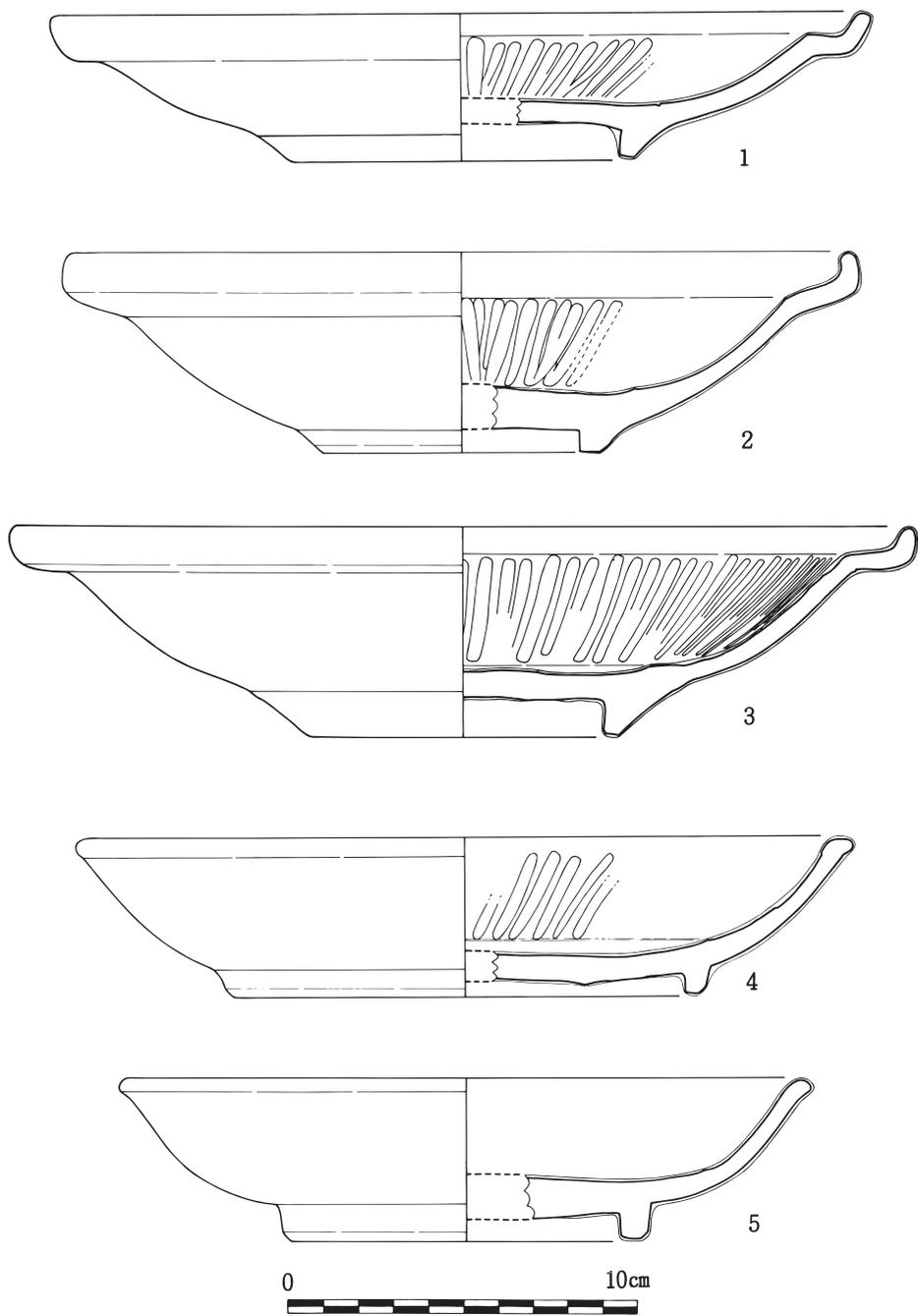


第3図 (PL.25の1~6)

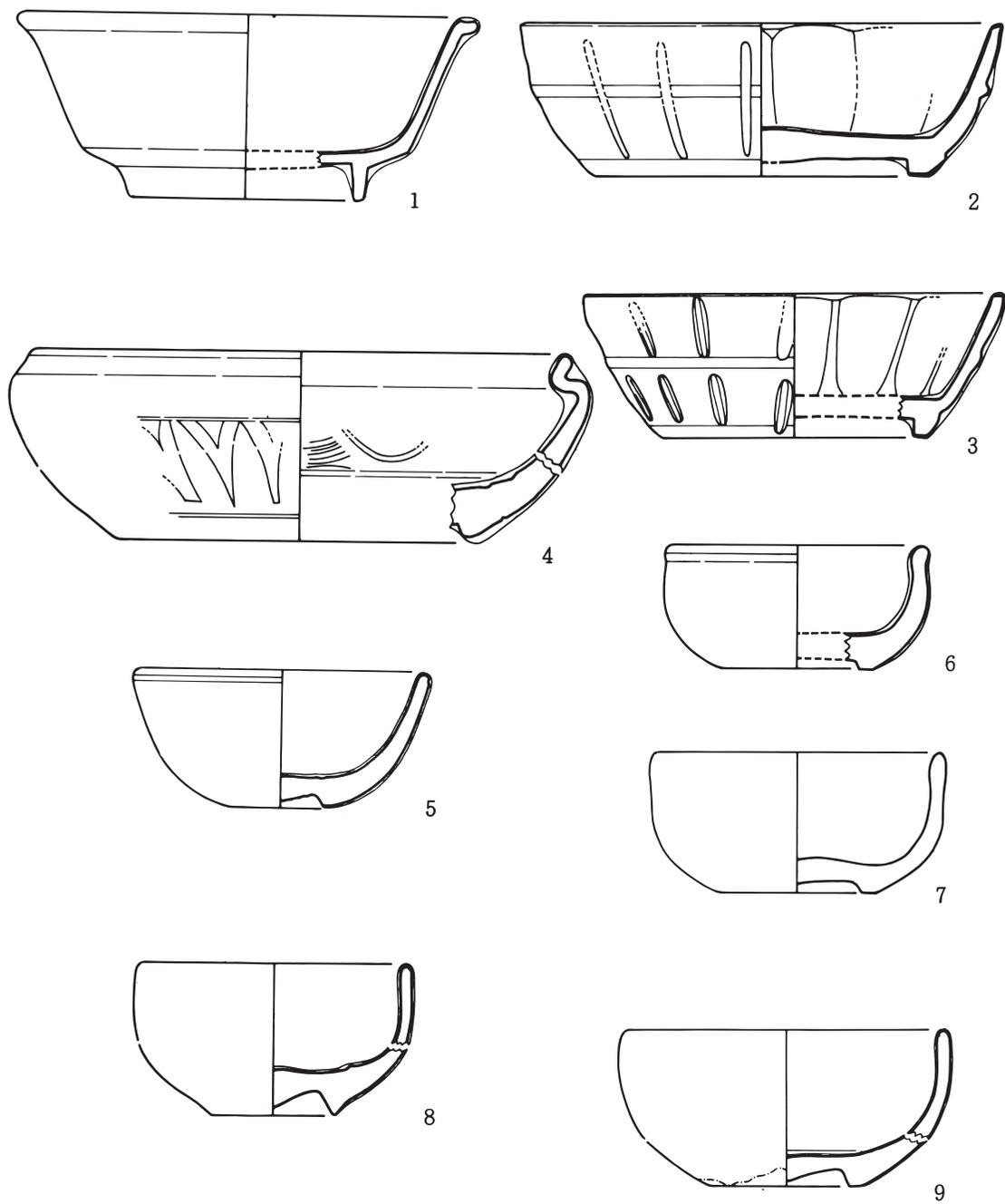
青磁盤 (5. 鐔縁 I a 6. 鐔縁 I b)



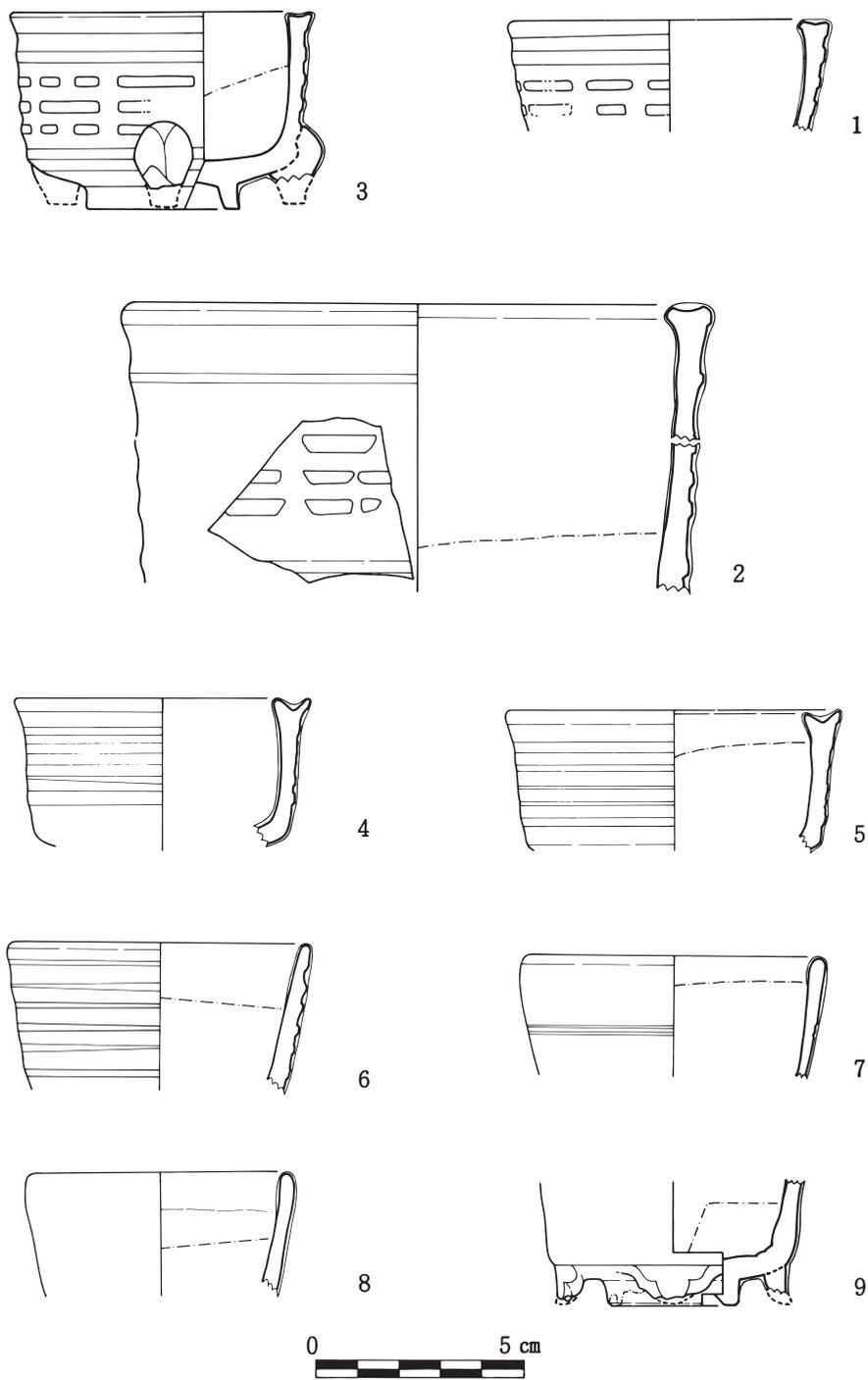
第14図 (PL.25の7~11) 青磁盤 (1. 鈿縁Ⅰb 2・3. 鈿縁Ⅱa 4・5. 鈿縁Ⅱc)



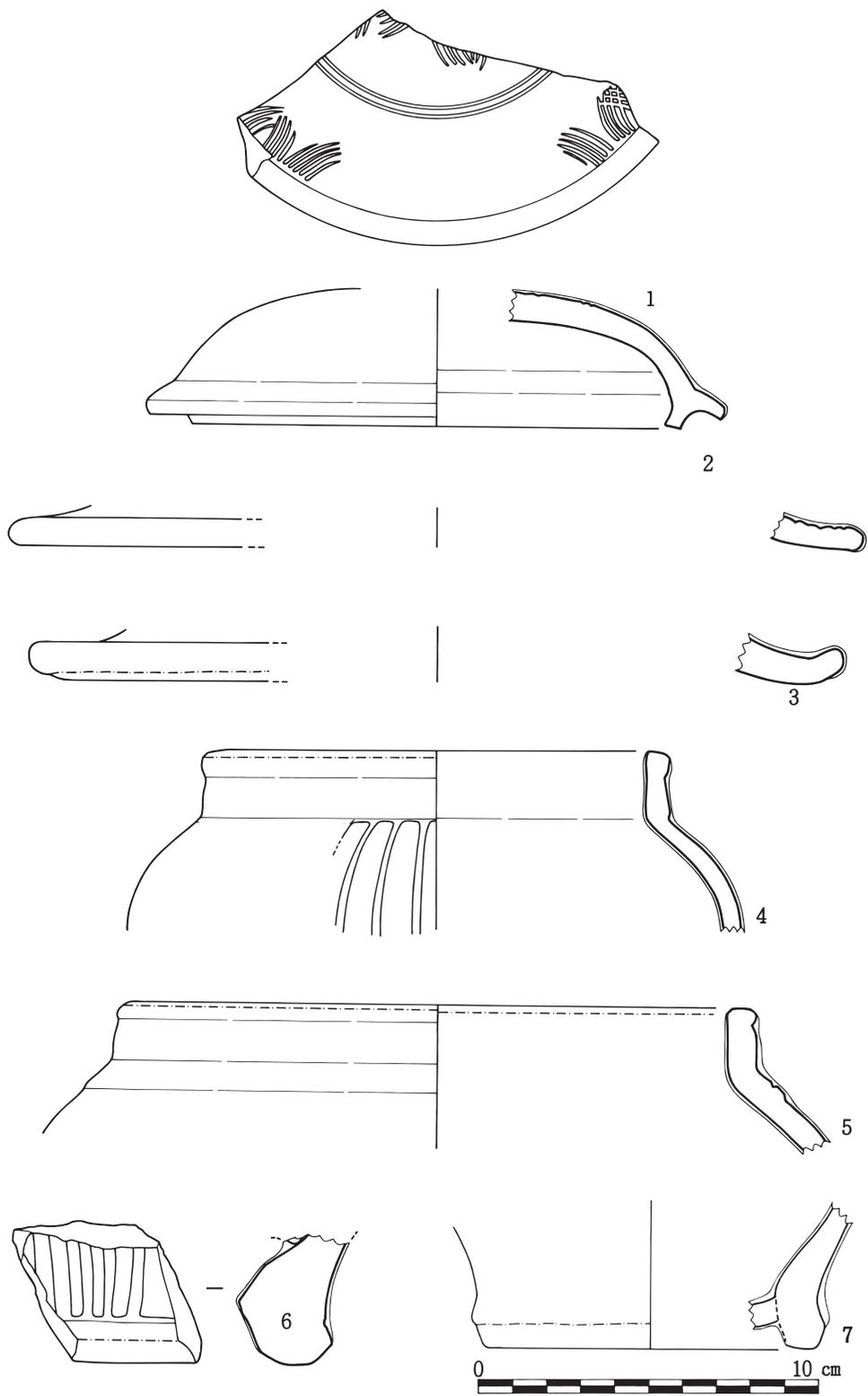
第15図 (PL. 26) 青磁盤 (1~3. 鐔縁Ⅱb 4・5. 直口口縁)



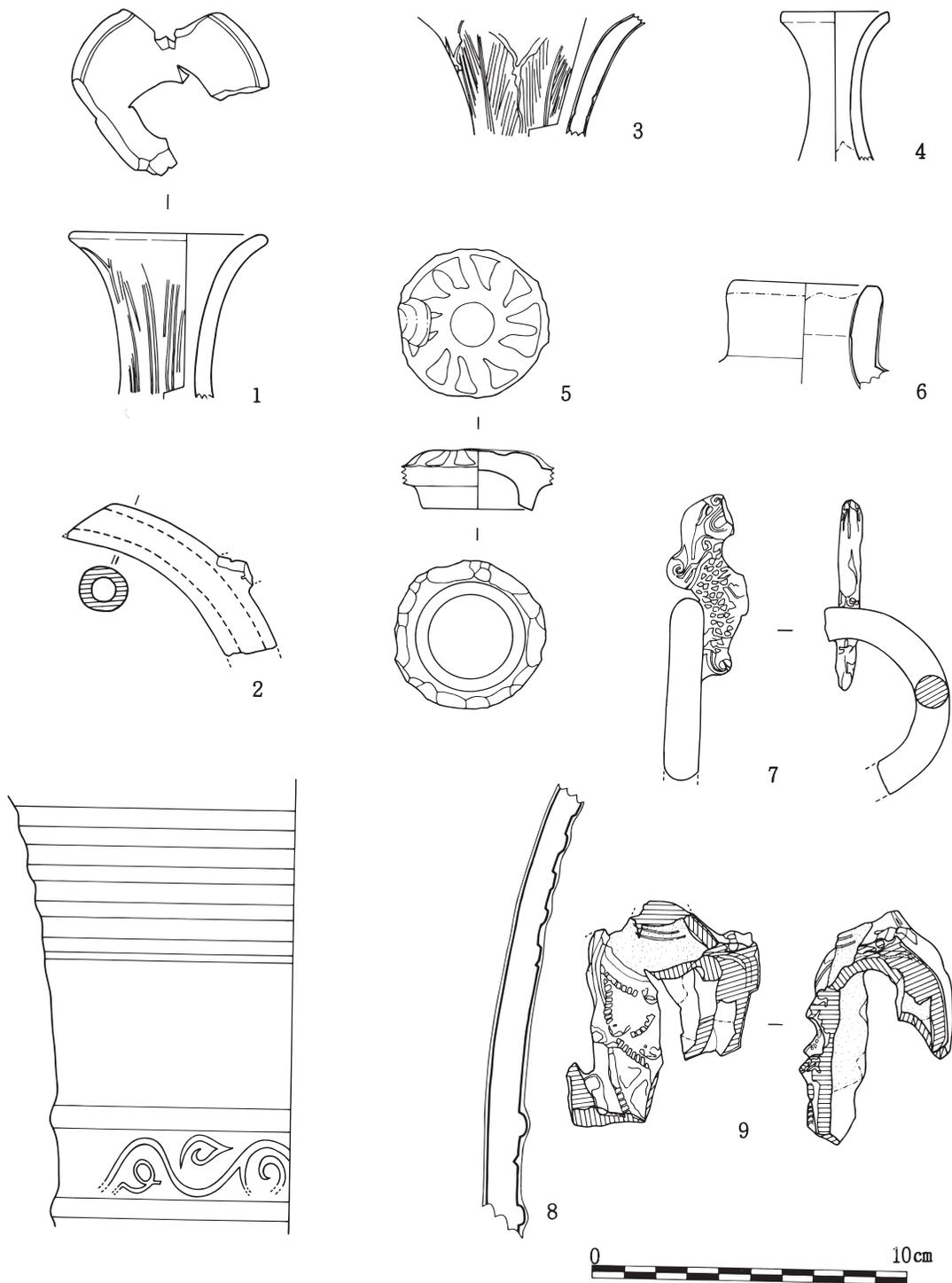
第16図 (PL.27) 青磁杯 (1.腰折 2・3.蓮弁文 4.べっ甲口 5~9.碁筭底)



第17图 (PL.28) 青磁香炉 (1・2.三足A a 6~9.三足A b 3~5.三足B a)



第18图 (PL.29) 青磁壺



第19図 (PL.30) 青磁水注 (1・2) 青磁玉壺春瓶 (3・4) 青磁梅瓶と蓋 (5・6)
 青磁花瓶 (7・8) 青磁仏像9 (斜線部は割れ面、点描部は露胎、白面は釉、円文が数珠)

2 白 磁

白磁は青磁、陶器について多く検出された。碗、皿、杯、鉢の器種が認められ、量的には碗が最も多く、皿、杯、鉢と続いている。底部片から推定できる個体数は、碗が53点、皿49点、杯16点、鉢1点、その他に皿か杯か識別不能なものが40点ある。総計すると概ね160点前後の白磁があったと考えられる。

これらの白磁は、接合の結果総数41点が復元できた。分類は、その復元資料を中心に碗9、皿9、杯を4タイプに分けた。

以下、分類基準を中心に概述し、個々の遺物の詳細は観察表で述べた。

(1) 碗

碗は器形と施釉等により次のように分類した。

I 類 (第20図1)

口縁端部を露胎にする、いわゆる口禿の碗である。小さな高台を持ち、体部は内湾、口縁は外反を示す。外器面腰部から下は施釉されない。皿I・II類(口禿皿)とセット関係にある碗である。

II 類 (第20図2)

所謂「枢府手」に属するタイプである。高台は高く幅広で、内側が斜めに深く削り出される。体部下位はふくらみを持ち、口縁はゆるやかな外反を示す。釉は高台外面までかかる。

III 類 (第20図3・4)

器肉が厚く口縁が内湾する碗である。接合復元されたものがなく口縁部片のみを図示した。底部片を見ると、高台幅は広く畳付外端に面取りがなく、断面が四角形を呈している。内底は凹みを持ち、外底は浅く雑に削り出される。外器面腰部から下は施釉されない。本類は近年、石垣島(注1)ピロースク遺跡においてまとまった出土があり、ピロースクタイプと仮称されている。

IV 類 (第20図5～7、第21図1・2)

腰部が豊かに張り、体部上位で一度内側に若干すばまり、またすぐに外反を示す大ぶりの碗である。高台づくり、施釉の特徴は、III類と同様である。内底は広く平坦につくり、印花が施される例が多い。最も多く検出された碗で、全体の約55%を本類が占めている。

V 類 (第21図3)

体部が直線的に大きく開き、口縁は若干厚みを持ち、僅かに外反を示す。高台は幅広く大きく削り出し、畳付外端は竹節状に大きく面取りを施す。内底は輪状に釉を掻き取り、外器面は腰部まで施釉される。

第8表 白磁出土一覽

※ その他とした識別不能破片は、殆んどが皿V・VI類と杯のいずれかかに属す。

地区 (cm)	碗										皿					杯				鉢	計			
	口系碗	枢府手	ポーツク タイプ	IV	V	VI	VII	VIII	IX	口系皿	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	菊花皿	腰折杯			八角杯	III	IV
一 区	I			18					1								3					1		2
	II			40				2	6							16						4		6
二 区	I	2	1	20			5		6							11						1		6
	II 10~20			28			5		11							7							1	6
	" 20~40								6							3						2		3
	" 40~60			8			1		6							3								3
	pit						1		2															1
区	I号土瓶			5																				3
	II号土瓶																							5
三 区	I			1					4	1														1
	II 0~15			37				1	2	1						2						1		5
	" 15~30			10		2				1														2
A	pit			2																		1		4
三 区	I	1		46	1				3													2		4
	II 0~20	3	1	105	6			2	13	4	1	6	3									1		12
区	" 20~40	1	1	65	5			3	2	1	3											3		17
B	" 40~60	4	2	49	1					2		1	2									2		9
	pit			1	11							1												1
四 区	I	1	1	121	2			2	8	6	1	3										3		11
	II 0~15			82	1	1		1		7		2	6									2		12
	II 15~30	1		10	1				3	1												1		1
	pit			5					14															20
五 区	I	5		16					4															6
	II	6	1	153	1			5	7	1	4	4	10	4	29							6		39
	III	4	1	104	2				13		6	8	4	2	21	2						5	1	51
	IV 0~15	4	1	75	3	1			1	15		3	1		4							5	1	23
	" 15~30	5		25					3			3										2		13
	" 30~45	1		24					1		1	2										2		15
	V	1		30					4	1		1										1		4
区	VI			6																		1		6
	VII			9	2																			7
	pit			5				1		1												2		1
計	破片数	28	10	20	1,021	26	5	14	16	70	90	7	22	38	20	9	138	6	32	76	39	21	7	217
	個体数	2	2	3	30	3	2	1	2	8	12	2	2	4	6	2	19	2	3	4	5	2	1	40
																								157



VI 類 (第 21 図 4)

深みのあるやや大ぶりの碗である。腰部は若干丸味を持ち、体部中位からゆるやかに外反を示す。高台は幅広くつくられ、外底は浅く削り出される。畳付外端は軽く面取りされている。内底は輪状に釉を搔き取り、外面は高台脇まで施釉される。

VII 類 (第 21 図 5)

器肉がうすく、腰部から口縁部に直線的に開く浅目の碗である。口縁端部は水平に切る。高台は低く、畳付外端は小さく面取りを持つ。内外面とも体部中位から下を露胎とする。

VIII 類 (第 21 図 6)

腰部から口縁にかけてのつくりはVII類と似る。高台は幅広く大きく削り出し、畳付外端は面取りがなく、断面が四角形を呈す。内体部下位から内底部にかけて釉を搔き取り、外面は高台脇まで施釉される。

IX 類 (第 21 図 7～8)

これもVII類同様、口径に対し器高の低い浅目の碗である。器肉が厚く、口唇を丸くおさめる点でVII類と異なる。内底とその周囲を露胎とし、外面は腰部まで施釉される。内底にはスタンプにより字款を施す例が多い。IV類に次いで多く検出されている。

(2) 皿

皿も器形と施釉等の特徴により次のように分類した。

I 類 (第 22 図 2～4)

口縁端部を露胎にする、所謂口禿を呈し、器高が 1.7～2 cm 前後の浅い平底皿である。釉は口縁端部を除き全面に施釉される。

II 類 (第 22 図 5～7)

I 類と同様、口禿の皿で、器高が 3.2 cm 前後と深目のものである。

III 類 (第 22 図 1)

体部が内湾、口縁が直行する平底の小皿である。底部は上げ底状を呈す。釉は外底を除き全面厚目にかかる。素地、釉調の特徴は碗 II 類(枢府手)に一致する。

IV 類 (第 22 図 8)

やや腰折れ状を呈する外反口縁皿である。畳付外端は軽く面取りが施こされる。腰部まで施釉され、高台脇から外底までは露胎。なお、内底釉は蛇の目状にかき取っている。

V 類 (第 22 図 9・10)

直口口縁の浅皿である。底部が厚いのに比べて口縁部から胴部までは薄手。口唇部は平坦で、高台は竹の節状に仕上げられている。腰部まで施釉され、高台脇から外底までは露胎である。

VI 類 (第 22 図 11～13)

挿入高台の直口口縁浅皿である。全面施釉のと、腰部まで施釉され、高台脇から外底までは露胎のものがある。

Ⅶ 類 (第23図1・2)

平底でやや厚手の直口口縁浅皿である。外底は上げ底状を呈する。内面は施釉されているが、口唇部から外底までは露胎である。口唇部に媒が付着しており、燈明皿として使用されている。

Ⅷ 類 (第23図3～8)

薄手の外反口縁皿である。高台断面は逆三角形状で畳付が細い。全面施釉で畳付だけ釉をかき取っている。最も多く検出された皿で、染付(皿Ⅰ類)や五彩などにも同タイプの器形が見られる。

Ⅸ 類 (第23図9)

いわゆる菊花皿である。内底は輪状に釉をかき取り、外面は高台外面まで施釉される。

(3) 杯

第24図1～9に示したものである。これらの杯は素地、釉調、施釉、高台づくり等を見ると次のような共通した特徴をもっており、同窯系の製品と考えられる。皿Ⅴ・Ⅵ類も同様の特徴を持つ。

- (1) 素地 : 淡い灰白色で堅くしまるものと、黄白色で比較的軟質のものがある。
- (2) 釉調 : 黄色味を帯び、細かな貫入を伴うものが多い。
- (3) 施釉 : 腰部または高台脇から下は殆んど施釉されない。
- (4) 高台 : 若干外開きなるものも多く、畳付外端は斜めに削り、面取りを施す。

これらの杯は、体部と口縁部のつくりにより4タイプに分けられる。

I 類 (第24図1・2)

いわゆる腰折れの杯である。屈曲部から上は直線的に開き、口縁は僅かに外反を示す。

II 類 (第24図3・4)

八角形を呈する杯である。腰部から下は丸味を持ち、上はゆるやかに外反する。

III 類 (第24図5～8)

腰部が丸味を持ち、体部中位から口縁にかけて外反を示すものである。

IV 類 (第24図9)

腰部が丸味を持ち、口縁が直口するものである。

(4) 鉢 (第21図9)

復元口径21.7 cm、高さ7.4 cmを測る鉢である。口縁は内湾し、内面上部には蓋受け状の段がある。高台脇には筋目状のカンナ痕が廻る。釉は若干緑味を帯びた白色で、高台脇上部までかけられている。素地は灰白色を呈し、堅くしまっている。この種の鉢は勝運城跡でも検出されている。^(注2)第4区Ⅱ層10～20 cm出土。

第7表 白磁観察表

(碗)

挿図番号 図版番号	類	名称 又は 仮称	口径 高台 器高 径	素地	施釉	釉色	貫入	備考
第20図1 PL. 31	I	口 禿 碗	13.8 — 46	淡灰白色 堅 緻	口縁端部と外面腰部から下を露胎とする。	淡緑 白色	なし	内底に径 3.8 cm の圏線が廻る。 5区Ⅳ0～40
” 2	Ⅱ	枢 府 手	15.3 7.9 5.6	白 色 堅 緻	高台外面まで施釉 畳付から外底部に かけて露胎とする。	淡青 白色	”	内体部に蓮弁文を2 段廻らし、さらにそ の上から菊花文のスタ ンプ(浮文)を施す。 3区Ⅱ10～60
” 3	Ⅲ	ピ ロ ー ス ク タ イ プ	15.2 — —	灰 白 色 堅く粗い	—	灰 白色	”	4区Ⅰ
” 4	”	”	16.4 — —	”	—	”	”	3区Ⅱ25～30、55～ 60 3区pit内
” 5	Ⅳ	”	17.6 6.4 5.5	淡灰白色 堅 緻	外面腰部から下を 露胎とする。	淡緑 白色	釉全体に貫入 を伴う。	内底に大きく蓮花文 のスタンプを施す。 3区Ⅱ10～60、5区Ⅲ
” 6	”	”	17.1 6.4 5.5	灰 白 色 堅くやや粗い	”	灰 白色	なし	” 5区Ⅱ、Ⅴ0～5 4区Ⅰ、Ⅱ0～5
” 7	”	”	17.0 6.3 5.7	”	”	淡 緑 白 色	”	” 2区2号土壙、Ⅱ0～10 3区Ⅰ、Ⅱ45～50 4区Ⅰ
第21図1 PL. 31 の8	”	”	17.2 6.5 5.3	”	”	灰 白色	内外面とも若 干伴う。	内底に印花を認める が、釉が失透し不明 瞭。5区Ⅳ0～5、Ⅴ
” 2 ” 9	”	”	18.0 6.6 5.7	灰 白 色 堅 緻	”	”	”	Ⅰ区Ⅱ15～20 3区Ⅰ、Ⅱ20～25 5区Ⅱ～Ⅲ
” 3 PL. 32 の1	Ⅴ	”	17.4 6.5 8.0	”	内底は釉を輪状に かき取る。 外器面は腰部まで 施釉	淡 緑 白 色	”	高台脇に櫛目状のカ ンナ成形痕が廻る。 内底に重ね焼の目跡 が残る。5区Ⅲ～Ⅶ

挿図番号 図版番号	類	名称又は 仮称	口径 器高 高台 直径	素 地	施 釉	釉 色	貫 入	備 考
第21図4 PL. 32 の2	VI		17.4 8.2 6.4	淡黄白色 軟質の半磁胎, 緻密	内面は釉を輪状に かき取る。 外器面は高台脇ま で施釉	黄 白 色	釉全体に細か な貫入を伴う。	外体腰部に三条の浅 い圈線が廻る。 3区AⅡ20～25 5区Ⅳ0～5
" 5 " 3	VII		13.1 4.8 5.6	白 色 堅 緻	内外面とも体部中 位から下を露胎と する。	灰 白 色	口縁部に若干 伴う。	外体面は櫛目状のカ ナナ整形痕をそのま ま残す。内底に重ね 焼の目跡を認める。
" 6 " 4	VIII		15.1 4.5 7.6	淡黄白色 堅くやや粗い	内体部下位から内底 にかけて釉をかき 取る。外面は高台 脇まで施釉	淡 黄 白 色	な し	高台脇に櫛目状のカ ナナ整形痕が廻る。 3区Ⅱ20～25、2区 30～40、4区Ⅰ
" 7 " 5	IX		13.3 4.5 5.8	淡灰白色 堅 緻	内底とその周囲を 露胎とする。 外面は腰部まで施 釉	灰 色	外器面に微細 な貫入を多く 伴う。	内底にスタンプによ り「卍」の字を施す。 内底に重ね焼の目跡が あり、外面は腰部に 砂粒が附着する。露 胎面は部分的に橙褐 色を呈す。2・3区Ⅰ
" 8 " 6	"		13.1 4.5 5.9	淡黄白色 軟質でやや粗 い	"	濁 黄 緑 色	釉全体に細か な貫入を伴う	内底にスタンプによ り「端」の字を施す。 3区Ⅰ、Ⅱ25～30

(Ⅲ)

第22図2 PL. 33	I	口	10.1 1.7 (6.2)	白 色 堅 緻	口縁端部を除き全 面に施釉。 外底面は不均等に かかり、刷目痕を 認める。	淡 青 白 色	な し	内底と内体部の境い に一条の圈線が廻る。 4区Ⅱ25～30、pit内 5区Ⅳ30～35
" 3	"	Ⅲ	10.1 1.9 (6.7)	"	"	濁 灰 白 色	"	" 5区Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ0～5
" 4	"		9.4 1.9 (5.6)	淡灰白色 堅 緻	"	灰 白 色	"	" 4区pit内

挿図番号 図版番号	類	名称又は 仮称	口径 器高 高台 台径	素 地	施 釉	釉 色	貫 入	備 考
第22 図5 PL. 34 の1	Ⅱ	口 禿	10.8 3.2 (5.0)	淡灰白色 堅 緻	口縁端部を除き全 面に施釉。 外底面は不均等に 施釉され凹凸を呈 す。	灰 白 色	な し	内底と内体部の境い に一条の圈線が廻る。 5区Ⅲ、Ⅳ5~10
" 6 " 2	"	皿	11.0 3.2 (5.7)	"	"	"	"	" 4区Ⅰ、pit内
" 7 " 3	"		10.9 3.4 (5.7)	"	"	"	"	" 3区Ⅱ 25~30 4区Ⅰ、Ⅱ0~5、pit内
" 1 PL. 33	Ⅲ		9.2 2.2 (4.8)	白 色 堅 緻	外底部を除く総釉	淡 青 白 色	"	内体中位に一条の圈 線が廻る。3区Ⅱ 0~ 50、4区Ⅱ20~25、5区Ⅴ
" 8 PL. 34 の4	Ⅳ		12.8 3.0 5.8	灰 白 色 堅 緻	内底は輪状に釉を かき取る。 外面は腰部まで施 釉	淡 緑 白 色	"	外底露胎部分は一部 赤褐色に焦げる。 3区Ⅱ 0~10、45~50 5区Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ 35~40
" 9 PL. 35 の1	Ⅴ		11.6 3.1 4.6	淡黄白色 やや軟質で若 干粗い	外面腰部から下を 露胎とする。	淡 黄 白 色	釉全体に細か な貫入を伴う	4区Ⅱ 20~25
" 10 " 2	"		11.8 2.9 4.0	"	外面中位から下を 露胎とする。	濁 灰 白 色	"	4区Ⅰ、Ⅱ 10~15 5区Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ 5~10
" 11 " 3	Ⅵ	袂 入 高 台 皿	9.2 2.9 4.1	"	外面腰部から下を 露胎とする。	濁 黄 白 色	"	畳付に釉が附着。重 ね焼最上部のもので 内底には目跡がない。
" 12 " 4	"		8.7 2.0 4.3	"	全面にうすく施釉	"	釉全体に微細 な貫入伴う。	内底に重ね焼の目跡 が残る。 5区Ⅱ
" 13 " 5	"		8.4 2.1 3.7	"	"	"	"	" 5区Ⅲ

挿図番号 図版番号	類	名称又は 仮称	口径 器高 高台 高径	素 地	施 釉	釉 色	貫 入	備 考
第23図1 PL. 36	VII	燈 明	8.5 2.3 4.0	淡黄白色 やや軟質で若 干粗い	内器面のみうすく 施釉、口唇から外 底にかけて露胎と する。	濁 黄 白 色	釉全体に微細 な貫入伴う	口唇部にチャコール が附着 2区I 5区II~III
" 2	"	皿	7.6 1.8 3.6	灰 白 色 堅 緻	"	灰 白 色	若干伴う	" 2区II 0~10 5区II
" 3	VIII		8.6 2.2 4.5	白 色 堅緻で磁質に 富む。	畳付とその周辺を 除き全面に施釉	淡 灰 白 色	な し	3区II 20~25
" 4	"		10.7 2.5 5.9	"	"	"	"	2区II 0~20
" 5	"		10.7 3.1 5.6	"	"	"	"	1区II 20~25
" 6	"		11.0 3.0 6.3	"	"	"	"	4区II 0~5 5区I、III
" 7	"		13.7 3.6 7.2	"	"	"	"	畳付に砂粒が附着 1区II 0~5 3・4区I
" 8	"		14.7 3.8 8.2	"	"	"	"	3区II 10~15、25~30 5区II~III
" 9	IX	菊 花 皿	11.4 2.1 2.9	"	内底は輪状に釉を かき取る。 外器面は高台外面 まで施釉	白 色	"	高台脇に砂粒が附着 3区II 25~30

(杯)

第24図1 PL. 37	I	腰 折 杯	8.8 3.0 3.5	淡灰白色 堅 緻	高台脇まで施釉、 一部畳付まで流れ る。	灰 白 色	な し	4区I、II 0~5 5区II、III、IV 10~15、 30~35
-----------------	---	-------------	-------------------	-------------	----------------------------	-------------	-----	---

挿図番号 図版番号	類	名称 又は 仮称	口径 器高 高台 高径	素地	施釉	釉 色	貫入	備考
第24図2 PL. 37	I	腰折杯	8.8 3.2 3.6	黄色 やや軟質で若 干粗い	外面腰部まで施釉	黄白色	釉全体に細かな貫入を伴う。	2区II35~40
” 3	II	八角杯	8.0 3.5 3.2	淡灰白色 堅緻	外面腰部まで施釉 一部畳付まで流れる。	”	外面に細かな貫入を多く伴う。	3区II45~50 4区I、II15~20 5区IV0~5
” 4	”		7.5 3.4 3.3	”	高台脇まで施釉、 一部畳付まで流れる。	淡灰白色	なし	3区II15~30 3区AII5~10 5区III
” 5	III		7.5 3.2 3.0	”	高台脇まで施釉	”	”	3区II30~35、45~50
” 6	”	”	8.3 3.3 3.3	”	”	”	”	I区II5~10 2区I 3区AII10~15
” 7	”	”	8.2 3.5 3.9	黄白色 やや軟質で若 干粗い	高台脇まで施釉、 一部畳付まで流れる。	黄白色	釉全体に微細な貫入を伴う。	4区II0~10
” 8	”	”	8.3 3.4 3.2	”	高台脇まで施釉	”	釉全体に細かな貫入を伴う。	3区II10~20 5区IV20~25
” 9	IV	”	7.4 3.0 4.0	”	高台脇まで施釉、 一部外底に流れ込む。	”	”	3区II55~60、pit内 5区II

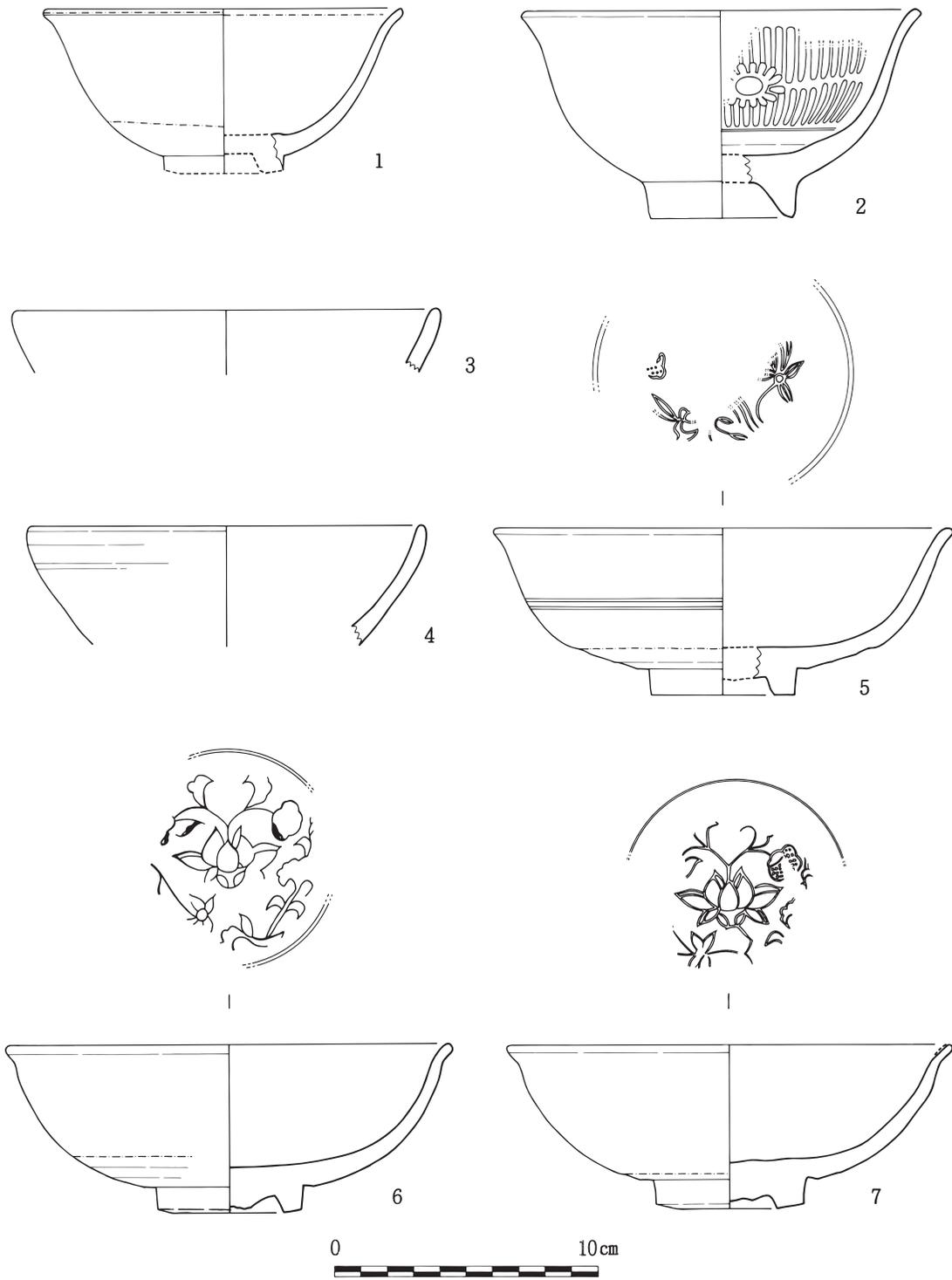
※ 法量はcm、()は底径

注1) 「掘り出された沖縄の歴史」沖縄県教育委員会 1982

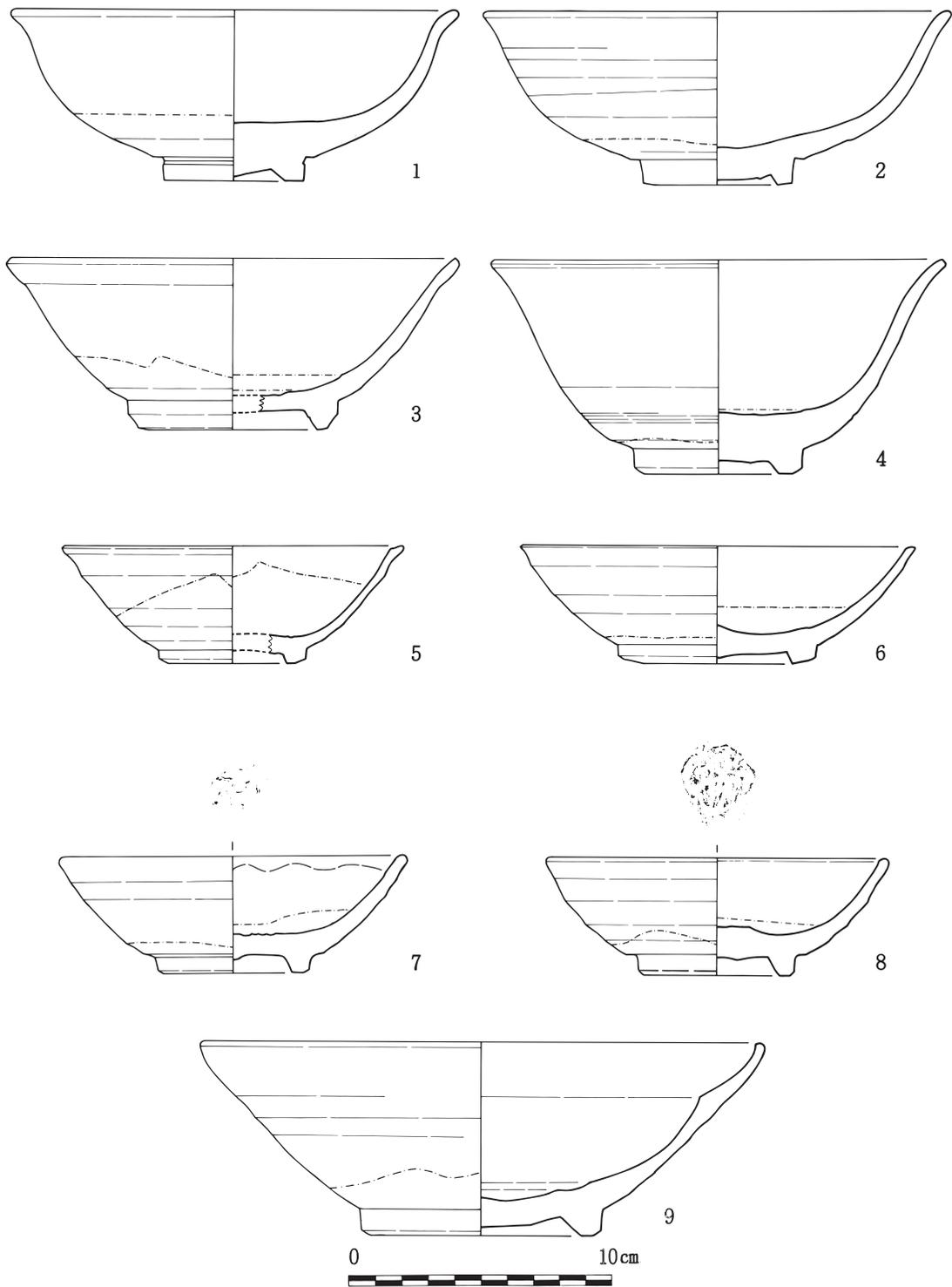
(2) 「勝連城跡の発掘調査概要」勝連町教育委員会 1982

(宮里)

I

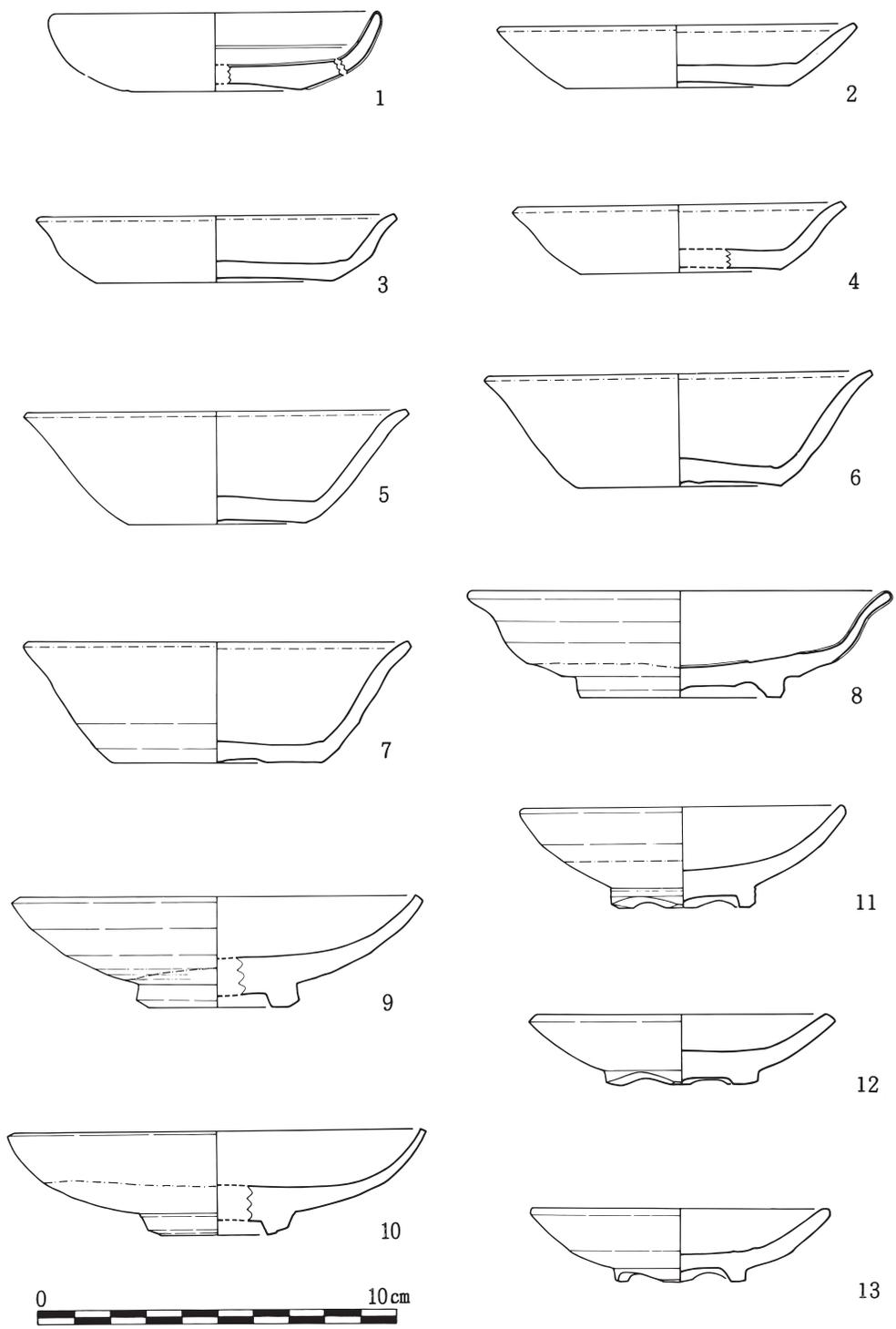


第20图 (PL.31) 白磁碗 (I-1、II-2、III-3•4、IV-5~7)

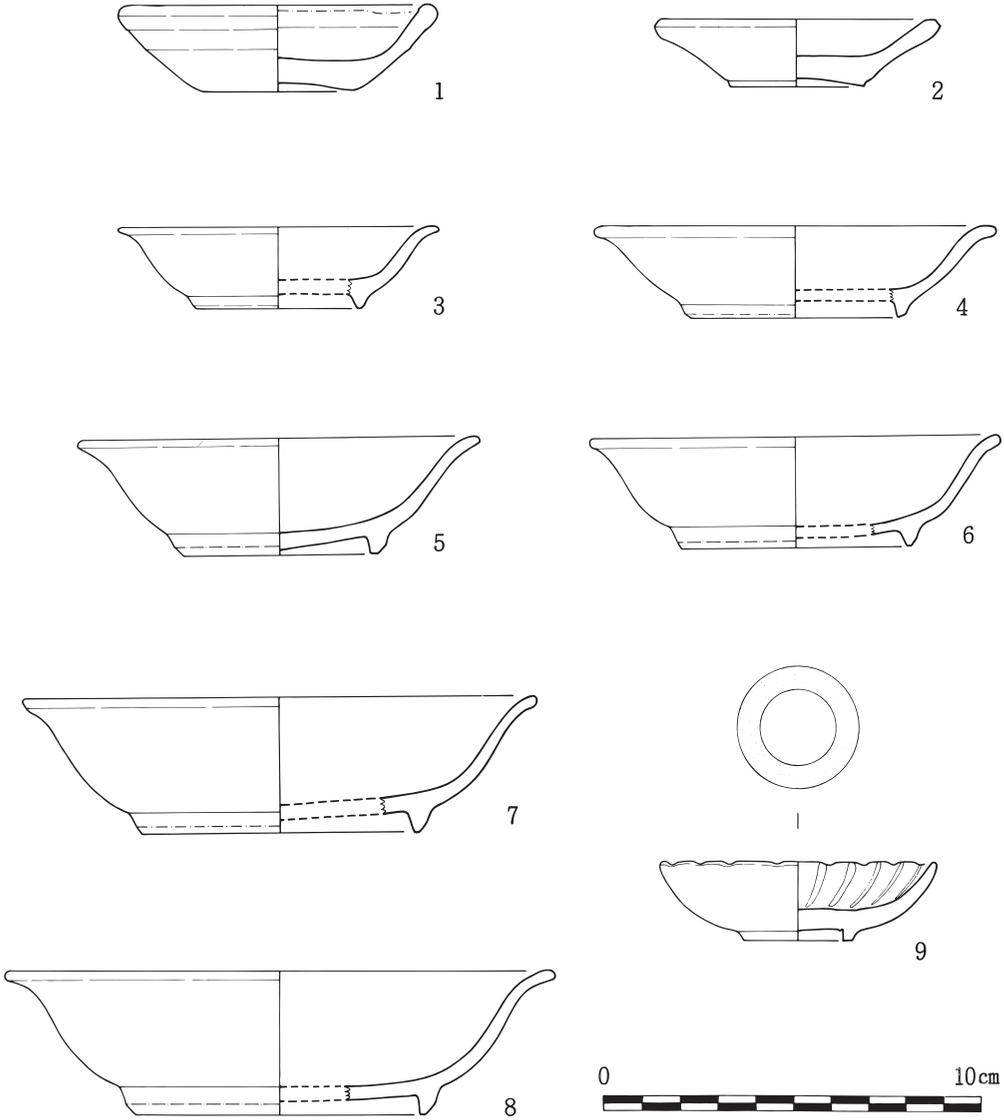


第21図 (PL.32) 白磁碗 (IV-1・2、V-3、VI-4、VII-5、VIII-6、IX-7・8)、
白磁鉢-9

I

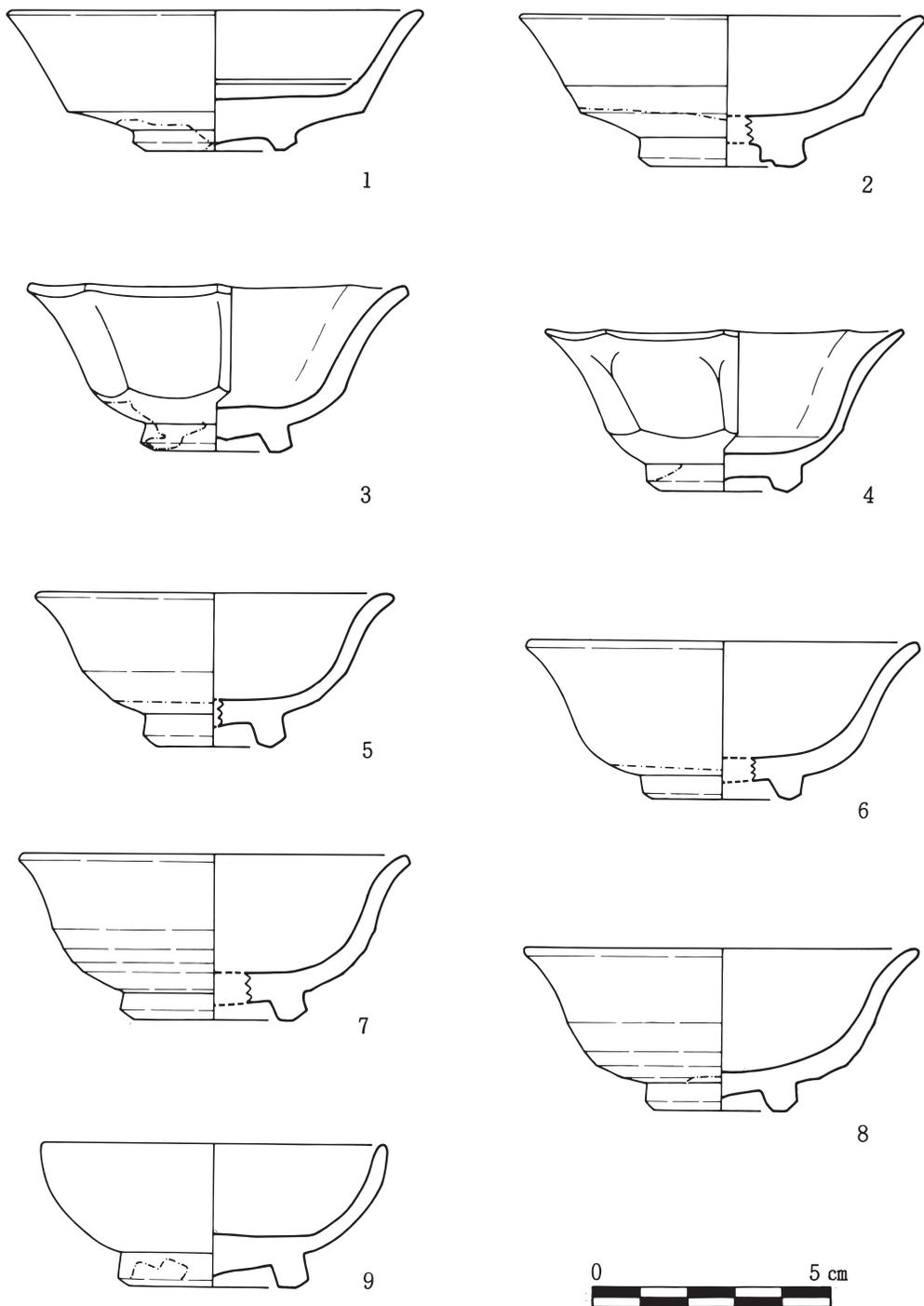


第22図 (PL.33~35) 白磁皿 (I-2~4、II-5~7、III-1、IV-8、V-9・10、VI-11~13)



第23図 (PL.36) 白磁皿 (Ⅶ-1・2、Ⅷ-3~8、Ⅸ-9)

I



第24图 (PL.37) 白磁杯 (I-1・2、II-3・4、III-5~8、IV-9)

3 元様式青花

検出された元様式青花は53片である。ほとんど小破片であり、ある程度文様や器形が窺えるものを第25図に示した。素地はすべて白色微粒子で、釉は青味のある白色釉がほとんどである。文様は濃青色のコバルト顔料で描かれているのが多い。器形は小壺、大壺、瓶、袋物、盤、片口などが検出されている。

(1) 小 壺 (第25図1)

口径3.7cm、器高5.2cm、底径3.5cmの菊唐草文小壺である。肩のやや下で胴継ぎされている。釉は青味のある白色釉を口縁部から底部際まで施釉し、口唇部から頸部内面にかけては釉を掻き取って露胎にしている。外底は露胎で、砂が附着していることから砂床で焼いた大量生産品と考えられる。文様は甗際直下に2本の界線を廻らし、その下の肩部・胴部に菊唐草文が描かれている。菊唐草の葉は先端が尖って、全体的に筆のタッチが鮮やかである。菊唐草文の下には2本の界線を廻らし、その中にくずれた蔓唐草文が描かれている。呉須は濃青色で元青花の発色を呈している。第6区からも検出されていることから、本丸から投げ捨てたものと考えられる。(4区Ⅱ、5区Ⅳ、6区Ⅱ)。

(2) 壺 (第25図2～11)

壺はすべて内外面とも青味のある白色釉で施釉されている。

2は荷葉文蓋の破片である。蓋甲は青味のある白色釉が施釉され、裏面は露胎である。文様は濃青色の呉須で、蓮の葉脈が描かれている。(3区Ⅱ50～55)。3は壺の口縁部と考えられる。口唇は平坦で、口縁はT字状に肥厚している。口は広く頸部で狭くなる。いわゆる盤口である。口縁外体面には濃青色のコバルトで亀甲繫文が廻っている。(4区造成土)。4は頸部破片で、牡丹唐草文の葉が見える。葉は葉先が尖り、輪郭が明瞭に描かれている。(5区Ⅱ5～10)。5は牡丹唐草文壺の胴部破片である。花や葉の輪郭を描いて中をダミ塗りしている。(2区Ⅱ25～30)。6は濃青色のコバルトで龍文を描いた龍文壺の胴部破片である。龍のうろこが丁寧に描かれている。(3区Ⅱ15～20)。7は大壺の破片で、文様は裾のラマ式蓮弁直上によく見られる蔓唐草文である。蔓唐草文は上下2本の界線の中に描かれている。(5区Ⅱ)。8は大壺の裾の破片である。濃青色のコバルトで火焰宝珠文や珠取獅子の爪などが見られるところから、珠取獅子文獸耳壺の破片ではなからうか。9は大壺の裾の部分である。薄青色のコバルトでラマ式蓮弁が描かれ、その中に如意頭文が描かれている。文様は輪郭線が明瞭に描かれてなく、全体的にぼやけている(3区Ⅱ20～25)。10は大壺の裾から底部にかけての破片である。濃青色のコバルトでラマ式蓮弁文が描かれ、その中

に宝相華文の一部が見られる。ラマ式蓮弁文の上下には2本線による界線が廻っている。(I区15~20)。11は大壺の裾の部分である。濃青色のコバルトでラマ式蓮弁文が描かれ、その中に宝相華文が見られる。(3区II 0~10)。

(3) 瓶 (第25図12・13)

12は玉壺春瓶の肩部である。外体面は青味のある白色釉が施釉されている。内体面は露胎で、胴継ぎが確認できる。頸部直下には暗青色のコバルトで逆方向のラマ式蓮弁文が描かれ、その下には2本線による界線に挟まれて蔓唐草文が描かれている。主題が描かれる胴部には柳葉が見られるところから、主題は人物か動物の描かれる玉壺春瓶と考えられる。高さは30cm前後であろう。出光美術館蔵の人物図瓶(注1)に類似の瓶と考えられる。(3区II 50~55、pit)。13は縦筋入りの玉壺春瓶の胴部破片である。1本の縦筋(凹み)を挟んで両方に青色のコバルトで丸文が描かれている。丸文の上には2本の界線が見られる。内外面とも青味のある白色釉が施釉されている。(3区II 30~35)。

(4) 袋物 (第25図14)

龍文袋物の破片と考えられる。釉は青みのある白色釉を内外面に施釉されている。濃青色のコバルトで描かれた2本の曲線文は龍文の一部と考えられる。(3区II 20~25)。

(5) 盤 (第25図15・16)

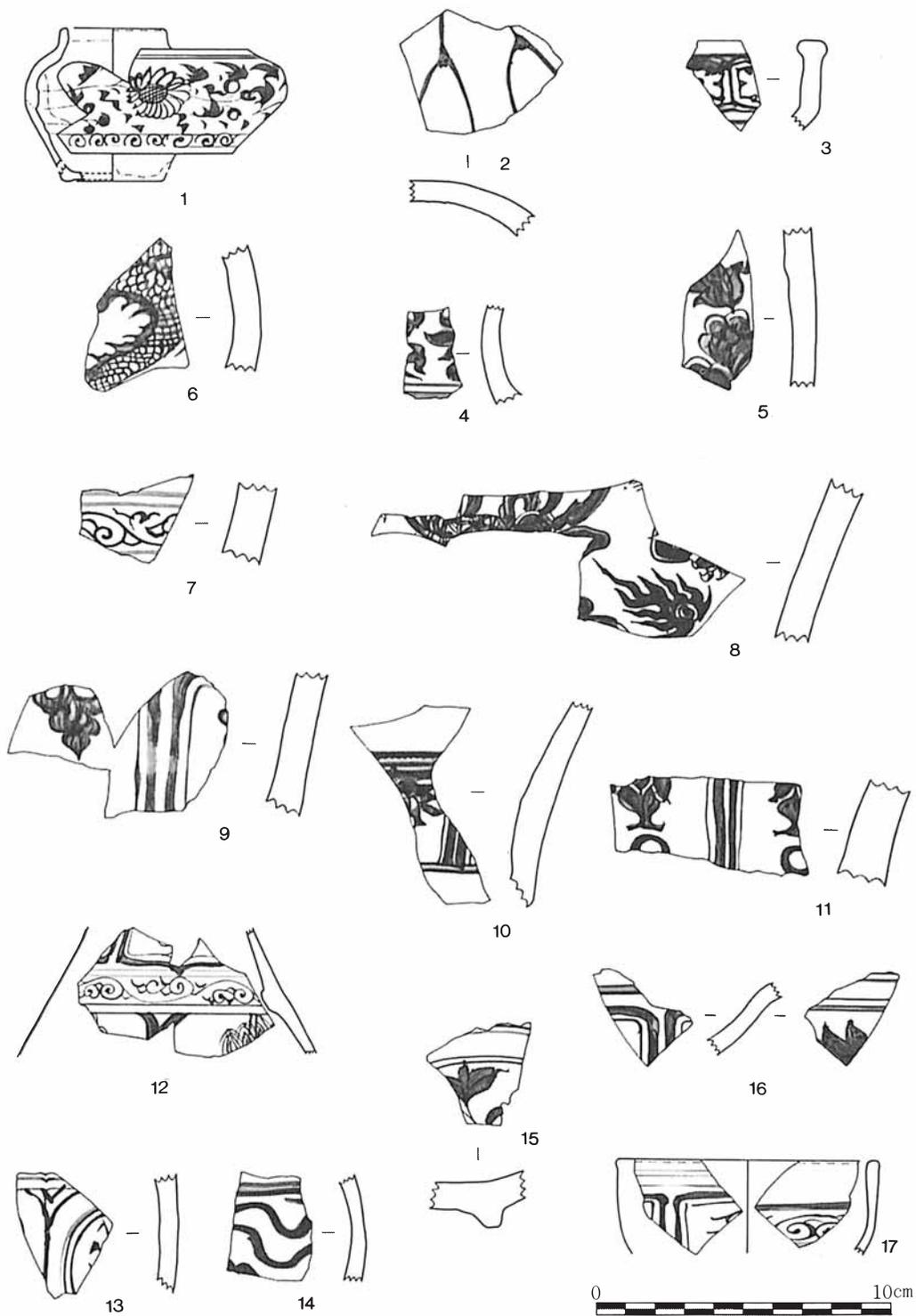
15は牡丹唐草文盤の底部破片である。畳付は水平に切られ、畳付外端はわずかに面取りされ、竹の節状を呈する。外底も平坦で、底部づくりが丁寧である。内底際とその直上には2本線による界線が廻り、内底には牡丹唐草文が描かれている。青味ある白色釉を高台外面まで施釉され、畳付から外底までは露胎である。露胎部分は鉄分がにじんで淡紅色を呈している。この底部は16のような鏝縁盤の底部と考えられる。口径30cm以上の大盤であろう。(5区IV 35~40)。16は牡丹唐草文盤の破片である。口縁部は欠損しているが、頸部の曲線から推して鏝縁盤と考えられる。外体面頸部直下に2本界線、その下の胴部にラマ式蓮弁文が濃青色のコバルトで描かれている。頸部内体面には2本界線、胴部内体面には2本界線と牡丹唐草文が描かれている。(3区II 30~35)。

(6) 片口 (第25図17)

口径約9cmの片口の破片である。内外面とも黄青色釉が施釉され、口唇部釉は搔き取られて露胎である。暗青色のコバルトで外体面にはくずれたラマ式蓮弁文が描かれ、その直上には1本の界線が見られる。胴部内体面には2本の界線に挟まれて蔓唐草文が描かれている。この種の片口としては、「陶磁大系41元の染付」に靈芝文片口として掲載されている。(注2)(3区II 45~50)。

注 (1) 矢部良明「元の染付」陶磁大系41 平凡社1974
(2) 同 上

(金武)



第25図 (PL.38) 元様式青花 (1.小壺 2~11.壺 12・13.瓶 14.袋物 15・16.盤 17.片口)

4 明 染 付

本項では、第3項で述べた元様式青花を除くもので、永楽又は宣徳以降の年代に属すると考えられる染付をまとめた。

総数 1,600 片余りの出土である。器種は、碗、皿、杯、盤、瓶、壺、馬上杯の7種が認められる。底部片から個体数を推定すると、碗が66点と最も多く、ついで皿39、杯9、盤4、袋物（壺・瓶）3、馬上杯1点と続いている。総計すると概ね120個体前後の染付が推量される。

以下、碗から順に皿、杯……と述べるが、分類を試みた碗、皿、杯については、分類基準を中心に概述し、個々の遺物の詳細は観察表に述べた。

分類は、器形により碗を6、皿を3、杯を2タイプに大きく分けた。

(1) 碗

I 類 (第26図1、2)

腰部が豊かに張り、体部上位でゆるやかに外反を示す碗である。高台は高く、削出しが高台外面より内面に深い特徴も持つ。

文様構成は外面胴部に宝相華唐草文を描くものが多く、内底は、「福」字、十字花文等を施すものが認められる。

II 類 (第26図3～5)

ゆるく内湾する体部から口縁を鐮状に屈曲させる碗で、高台が外開きになる特異な器形を示すタイプである。

文様構成は3・4のように外面胴部に馬士文を描き、内底に観月図を配す例が殆んどである。

III 類 (第26図6・7、第27図1～5)

いわゆる「蓮子型」と呼称されるタイプである。体部は内湾しながら大きく開き、そのまま口縁部に斜行する。高台は低く小さいものが多く、内底は高台内に凹む。口径に対し器高の低い浅目のものと(第27図3・4)、深目のものがある。

文様構成は浅目の例の場合、丸を結合した三葉状の文様、又はそれが便化したとみられる豹文状の文様を外表面と内底に描くものが多く、深目の例の場合、第26図6・7のように波濤文帯と芭蕉文を外表面に配し、内底に蓮花文を描く例と、第27図1のように波濤文帯とアラベスクを外表面に配し、内底に蓮花文を描く両タイプが多く認められる。

IV 類 (第27図6、第28図1)

腰折れの器形を示す碗である。胴は腰折部から少し開きながら直線的に延び、直口する口縁にいたる。高台は大きく高く、内底は広く平坦につくられる。

第10表 明染付出土一覽

地区	器種 名称及位 稱 (cm)	碗				皿				杯			瓶・壺	馬上杯	計			
		I	II	III	連子型	罈頭心型	VI	分類不能 破	I	II	III	IV				V	I	II
一 区	I			3	1	1	15	1	1	1	1	1	1				25	
	II		2	6	5	1	29	2	2	1	4						57	
二 区	I		6	18	6	3	50	7	3	4				1	1	2	103	
	II 10~20	3	6	25	14	2	78	18	2					1	2	2	159	
	〃 20~40	1		8	6	3	16	10								2	48	
	〃 40~60		2	3	1											1	7	
区	pit		4		2		3							1	1	1	12	
	I号土瓶			1	1	1	2										4	
三 区	II号土瓶			1													1	
	I		1				3	2						1			8	
区	II 0~15		6	3	9	1	24	3	4	2				1			54	
	〃 15~30			2					1								3	
A	pit	1			1	1									1		4	
	I	1	5	10	7	1	37	2	4	9				1	1	1	79	
三 区	II 0~20	2	6	10	15	3	69	14	2	3				1	1	3	132	
	〃 20~40		1	3	3		17	4						1	2	2	33	
B	〃 40~60				1												2	
	pit																	
四 区	I	2	13	14	11	3	74	7	2	4	3			3	2	1	140	
	II 0~15	3	3	1	6	4	21	3			1			1	2		46	
区	II 15~30	2				1											3	
	pit							2						1			3	
五 区	I		8	3	3		24	9	3	2				2			56	
	II	6	39	40	30	5	207	25	21	6	8			4	9		468	
	III	2	13	21	15	3	75	10	8		3			1	4	2	168	
	IV 0~15	4	5	6	3	4	24	1						1	1		49	
区	〃 15~30				1		5	2									9	
	〃 30~45																	
区	V																	
	VI																	
	VII																	
	pit																	
計	破片数	27	120	176	142	31	773	123	51	34	19	42	3	13	26	25	1,623	
	個体数	4	13	16	16	5	11	19	10	6	4	6	1	2	4	3	1	123

文様構成は外面胴部にアラベスク、口縁部に波濤文帯を廻らす例が多く、内底には十字花文や蓮花文を描く例が多く認められる。

V 類 (第28図2～4)

内底部に盛り上がりをもよおす所謂「饅頭心型」に属するものである。

少量の出土で、かつ復元資料に欠しい為、文様構成上の把握ができないが、描技法は文様の輪郭内をぬりつぶす所謂「ダミ」の技法を用いている。

VI 類 (第28図5)

高台づくり、及び内底が高台内に凹む点等、第Ⅲ類の蓮子型に以るが、口縁が外反するタイプである。外反のしかたに特徴がある。すなわち口縁内側に凹みを持たせながら外反を示している。口唇部が尖る点も他類には見られない特徴である。

本類も少量の出土で文様構成上の把握はできない。描技法はV類と同様「ダミ」が用いられている。

(2) 皿

I 類 (第29図1～6)

断面逆三角形の高台を持つ、口縁端反の皿である。体部は内湾する。法量は口径9cmから16cm前後までと幅がある。

文様は外面に宝相華唐草文、密な唐草文等、内底に玉取獅子、十字花文等を描くものが多く認められる。

II 類 (第30図1～6)

いわゆる「碁筭底」の皿である。体部は若干丸味を持ち、そのまま直線的に開く器形である。口径は9cm前後と一貫している。

文様構成は外面胴部に芭蕉文、口縁部に波濤文帯を廻らし、内底に草花文を描く例が多い。

III 類 (第30図7)

低い高台をもつ皿で、体部が内湾、口縁が直口する皿である。

少量の出土で、かつ復元資料に欠しく文様構成上の特徴の把握はできない。描技法は碗V・VI類と同様「ダミ」を用いている。

(3) 杯

I 類 (第31図1～4)

短筒型を呈す腰折れの杯で、外体部中位に一条の隆圈線が廻るものである。

文様は外面中位の隆圈線の上方に花鳥折枝文、下方に如意頭文を廻らす例が多く、内底には十字花文を持つものが多い。描技法はダミのもの、そうでないものがある。

Ⅱ 類 (第31図5)

腰部は丸みを持ち、体部は直線的に若干開き、直口する口縁にいたるものである。1点のみ出土。

(4) 袋物 (第31図6・7)

6は小壺と考えられるもので、二条の圈線を腰部に巡らし、その下方に如意頭文、上方に唐草文の一部と思われる文様が認められる。呉須の発色は良く、鮮明な藍色を呈している。釉は白色を呈し、内面にも施釉する。類例は江西省朱盤斌墓出土にあり、「陶磁大系42明の染付」に掲載されている。^(注1)

7は外面に唐子文を持つ胴部片である。呉須はやや鮮明な藍色を呈す。釉は乳白色を呈し、内外面に施釉されている。器形は瓶又は水注になるかと思われる。第3区Ⅱ15~20cmの出土。

(5) 盤 (第31図8)

復元口径が23cmを測る中形の直口盤で、内外面に宝相華唐草文が描かれている。呉須の発色は比較的良く濃藍色を呈すが、部分的に黒ずんでいるところが認められる。釉は若干青味を帯びた白色を呈す。第5区Ⅲ、第3区BⅡ15~20cmの出土の接合資料である。

第9表 明染付観察表 (碗)

挿図番号 図版番号	分類	口径 器高 高台 口径	呉須(藍色)の発色	釉調	施釉	文様構成						備考	
						外面			内面				
						口縁部	胴部	腰部	外底部	口縁部	胴部		内底部
第26図1 PL.39	I	14.7 6.6 6.6	やや鈍い部分的に黒ずむ	淡青白色	畳付から外底部にかけて露胎とする。	界線	宝相華唐草文	界線	なし	雷文帯くずれ	なし	十字花文	露胎部は橙褐色に焦げる。畳付に砂粒が附着。3・4区Ⅰ5区Ⅱ~Ⅲ
" 2 "	"	15.2 — —	鮮明一部に呉須が釉上に浮遊	白色	—	"	"	—	—	四方禪文	花卉	—	4区Ⅱ 5区Ⅳ0~5
" 3 "	Ⅱ	15.4 6.7 5.8	鈍い部分的に黒ずむ	淡灰白色	畳付を除く総釉。高台内は雑で部分的に露胎を見る。	"	樹如意の雲小文様	界線	なし	界線	なし	観月図	外面胴部の主文様は欠失し不明2区Ⅱ10~203区土留内
" 4 "	"	14.8 6.2 5.8	鮮明一部に呉須が釉上	淡青白色	"	"	樹馬士の小如	"	"	"	"	"	4区Ⅰ 5区Ⅱ~Ⅲ

挿図番号 図版番号	分 類	口径 器高 高台 径	呉須（藍 色）の発 色	釉 調	施 釉	文 様 構 成						備 考	
						外 面			内 面				
						口 縁 部	胴 部	腰 部	外 底 部	口 縁 部	胴 部		内 底 部
			に浮遊				文意 様雲					5区Ⅴ5~10	
第26図5 PL. 40 の1	Ⅱ	14.9 6.5 6.7	淡 い 一部に呉 須が釉上 に浮遊	白 色 全体に大 きな貫入 を伴う。	畳付を除く総 釉。高台内は雑 で部分的に露 胎を見る。	界 線	樹 上人物図	界 線	な し	四 方襟文	な し	大 半欠失	4区Ⅱ5~10 5区Ⅱ
“ 6 “ 2	Ⅲ	12.7 — —	やや鮮明	淡青白色	—	波 濤文帯	芭 蕉文	—	—	界 線	“	—	2区Ⅱ0~20
“ 7 “ 3	“	— — 4.3	鈍 い 一部分的 に黒ずむ	“	畳付を除く総 釉。高台内は雑 で部分的に露 胎を見る。	—	“	界 線	な し	—	—	蓮 花文	2区pit内
第27図1 “ 4	“	14.2 6.2 5.3	やや鮮明	青 白 色	畳付を除く総 釉	波 濤文帯	ア ラベスク	“	“	界 線	な し	“	2区Ⅰ、Ⅱ0~25 3区Ⅰ
“ 2 “ 5	“	12.7 5.7 5.0	淡 い	淡青白色	“	界 線	牡 丹唐草文	“	“	“	“	大 半欠失	5区Ⅱ~Ⅲ
“ 3 PL. 41 の1	“	14.0 5.6 5.4	“	青 白 色	“	“	三 葉状の 小文様	“	“	“	“	三 葉状の 小文様	2区Ⅰ、Ⅱ0~10 3区Ⅰ、Ⅱ0~35 4区Ⅱ5~10
“ 4 “ 2	“	16.2 5.4 6.9	鈍 い 一部分的 に黒ずむ	淡青白色	“	“	の十 字と 豹皮 状	“	“	“	“	豹 皮状の 文様	露胎部は赤褐色 に焦げる。 1区Ⅰ 2区Ⅱ0~20 3区Ⅰ
“ 5 “ 3	“	13.6 5.6 4.8	鈍 い いく分黒 色味を帯 びる	淡緑白色 内面全体 に大きな 貫入を伴 う。	高台外面の中 位から外底部 にかけて露胎 とする。	“	如飛 意馬 雲	“	な し	“	“	法 螺貝文	“ 全体的に粗製

挿図番号 図版番号	分 類	口径 器高 高台 直径	呉須（藍 色）の発 色	釉 調	施 釉	文 様 構 成						備 考	
						外 面			内 面				
						口 縁部	胴 部	腰 部	外 底部	口 縁部	胴 部		内 底部
第27図6 PL. 41 の4	IV	12.1 7.3 5.9	鮮 明 一部に呉 須が釉上 に浮遊	淡青白色	畳付を除き全 面丁寧に施釉	波濤文帯	アラベスク	界 線	字 款 (?)	界 線	な し	十 字 花 文	2区II 0~10 5区II~III
第28図1 PL. 42	"	10.1 6.4 5.9	鈍 い 黒づくむ 分が多い	淡緑灰色 鉄分が多 く部分的 に褐釉色 を呈す。	畳付を除く総 釉。高台内は雑 で一部に露胎 を見る。	"	"	"	な し	"	"	蓮 花 文	全体的に粗製 2区I、II 0~40 3区II 5~20 5区III
" 2	V	— — 4.8	鮮 明	淡青白色	畳付を除き全 面丁寧に施釉	—	唐 草 文	"	字 款 (?)	—	—	菊 花 文	3区II 10~15 2区I ダミ技法
" 3	"	— — 6.2	"	"	"	—	—	"	大 (?) 年(?)	—	—	如 意 雲	2区II 35~40 "
" 4	"	11.9 4.2 4.6	やや鮮明	白 色	"	界 線	雲 状 の 小 文 様	"	な し	四 方 禰 文	な し	大 半 欠 失	2区II 10~20 3区I "
" 5	VI	13.6 6.2 5.0	鮮 明	黄 濁 色	"	"	蓮 池	"	萬 福 攸 同	"	"	花 卉	二次的酸化を受 け全体的に黄変 している。 2区II 10~35

(皿)

第29図1 PL. 43	I	14.5 3.4 8.5	鮮 明	白 色	畳付を除く総 釉	界 線	細 密 な 唐 草 文	界 線	な し	界 線	如 意 頭 文	十 字 花 文	2区II 0~20 3区AII 5~10 3区II 5~20 4区pit内 5区III
" 2	"	15.6 3.3 9.2	鈍 い 部分的に 黒づくむ	淡青白色	"	"	草 宝 文 相 華 唐	"	"	"	な し	玉 取 獅 子	畳付に砂粒が附 着する。 2区I、II 0~30 3号土壌、3区I

挿図番号 図版番号	分 類	口径 器高 高台 高径	呉須（藍 色）の発 色	釉 調	施 釉	文 様 構 成						備 考	
						外 面			内 面				
						口 縁 部	胴 部	腰 部	外 底 部	口 縁 部	胴 部		内 底 部
第29図3 PL. 43	I	11.6 2.7 6.7	淡 い いく分黒 色味を帯 びる	淡青白色	畳付を除く総 釉	界 線	宝 相 華 唐 草 文	界 線	欠 失	界 線	な し	玉 取 獅 子	5区Ⅰ～Ⅲ
" 4 PL. 44 の1	"	8.9 2.3 5.0	やや鮮明	"	高台内面と外 底部を露胎と する。	"	"	"	"	"	"	欠 失	5区Ⅰ～Ⅲ
" 5 " 2	"	10.2 2.4 4.5	鈍 い	淡青白色 気泡多く、 若干貫入 を伴う。	高台外面の中 位から外底部 にかけて露胎 とする。	"	"	な し	な し	"	"	十 字 花 文	露胎部分は橙褐 色に焦げる。 2区Ⅱ20～30 3区Ⅰ
" 6 " 3	"	14.3 3.4 8.0	鈍 い 部分的に 黒ずむ	淡青白色	畳付を除き全 面に施釉	界 線	唐 草 文	界 線	"	"	"	園 亭 図	2区Ⅰ 3区Ⅱ10～35 5区Ⅰ～Ⅲ
第30図1 PL. 45	Ⅱ	9.6 2.4 (2.6)	"	"	畳付とその周 囲を露胎とす る。	波 濤 文 帯	芭 蕉 文	"	"	"	?	菊 花 文	3区Ⅱ25～30 5区Ⅱ～Ⅲ
" 2	"	10.5 2.8 (2.6)	"	"	"	"	"	"	"	"	?	ね じ 花	5区Ⅱ～Ⅲ
" 3	"	10.3 2.6 (2.6)	鈍 い 黒ずむ部 分が多い	淡青白色 気泡多く 全体的に 濁る。	"	"	"	"	"	"	な し	草 花 文	3区Ⅱ0～10 5区Ⅲ
" 4	"	9.8 2.7 (3.1)	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	5区Ⅱ～Ⅲ
" 5 PL. 46 の1	"	10.2 2.6 (2.7)	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	露胎部は赤褐色 に焦げる。 1区Ⅱ0～5、2区Ⅰ
" 6 " 2	"	9.6 2.2 (2.3)	やや鮮明	青 白 色	"	界 線	梵 字 文	"	欠 失	"	"	梵 字 文	5区Ⅱ～Ⅲ

挿図番号 図版番号	分 類	口径 器高 高台 高径	呉須（藍 色）の発 色	釉 調	施 釉	文 様 構 成							備 考
						外 面				内 面			
						口 縁部	胴 部	腰 部	外 底部	口 縁部	胴 部	内 底部	
第30図7 PL. 46 の3	Ⅲ	11.8 2.4 6.4	鮮 明	白 色	畳付を除く総 釉	界 線	な し	界 線	な し	四 方 禪 文	な し	花 卉	3区Ⅰ ダミ技法

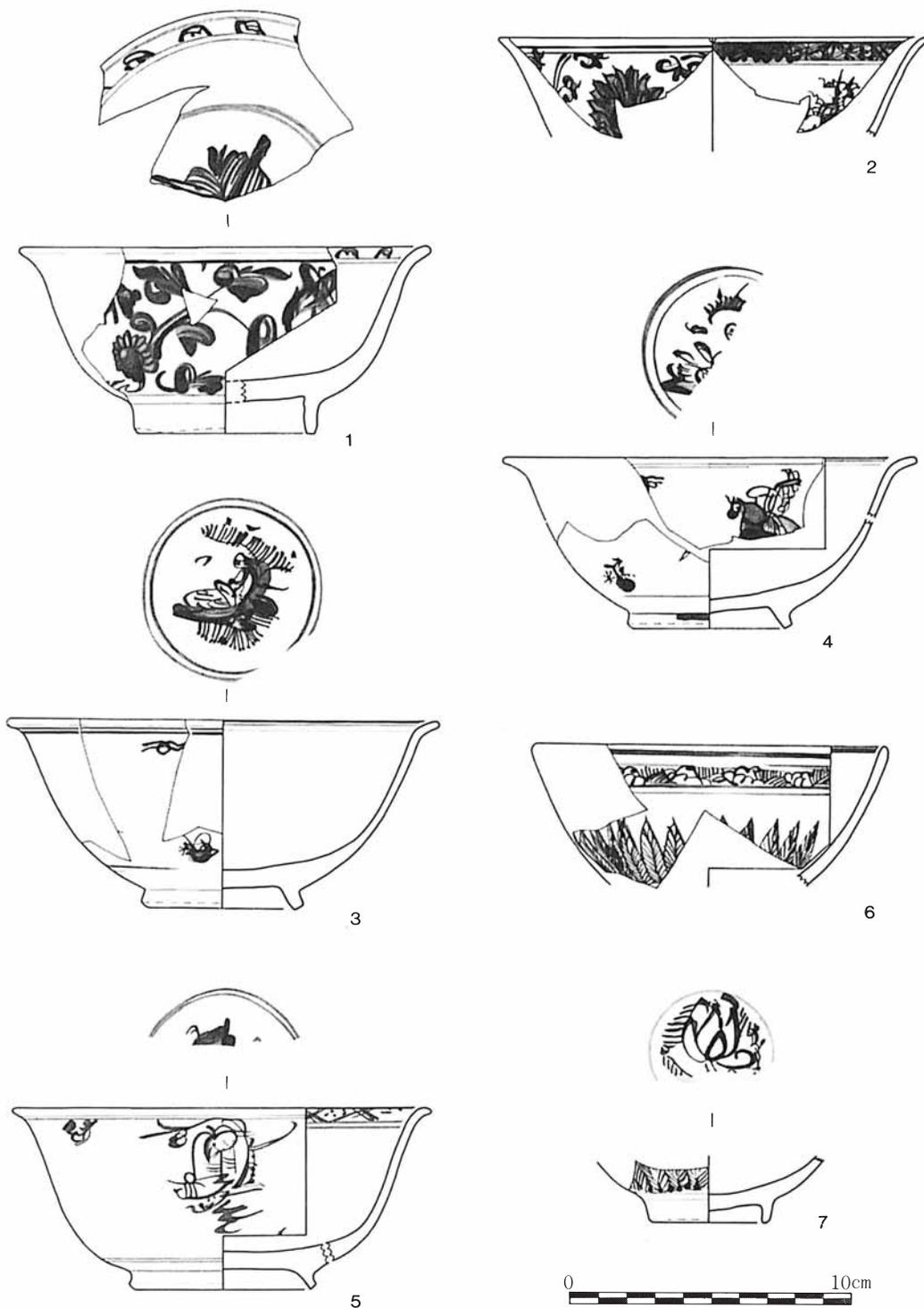
(杯)

第31図1 PL. 47	Ⅰ	9.4 — —	やや鈍い	淡灰白色	—	界 線	宝 相 線 上 唐 に 草 文	如 意 頭 文	欠 失	界 線	な し	欠 失	1区Ⅰ 2区Ⅱ0～10 3区AⅡ5～10 3区Ⅰ 5区Ⅱ、ダミ技法
” 2	”	9.2 — —	やや鮮明	淡灰白色	—	”	花 界 鳥 線 折 上 枝 に	”	—	”	”	—	2区Ⅱ10～15 4区pit内 5区Ⅱ～Ⅲ、”
” 3	”	— — 5.8	”	淡青白色	畳付を除く総 釉	—	—	—	な し	—	—	十 字 花 文	1区法面Ⅱ 15～20
” 4	”	6.9 4.1 4.1	”	”	”	界 線	花 卉	界 線	欠 失	界 線	な し	十 字 花 文	5区Ⅲ
” 5	Ⅱ	9.7 4.7 4.5	鈍い 部分的に 黒ずむ	”	高台外面の中 位から高台内 面にかけて露 胎とする。	”	花 界 鳥 線 折 上 枝 に	如 意 頭 文	”	”	”	如 意 頭 文	2区Ⅰ

※ 法量はcm、()は底径

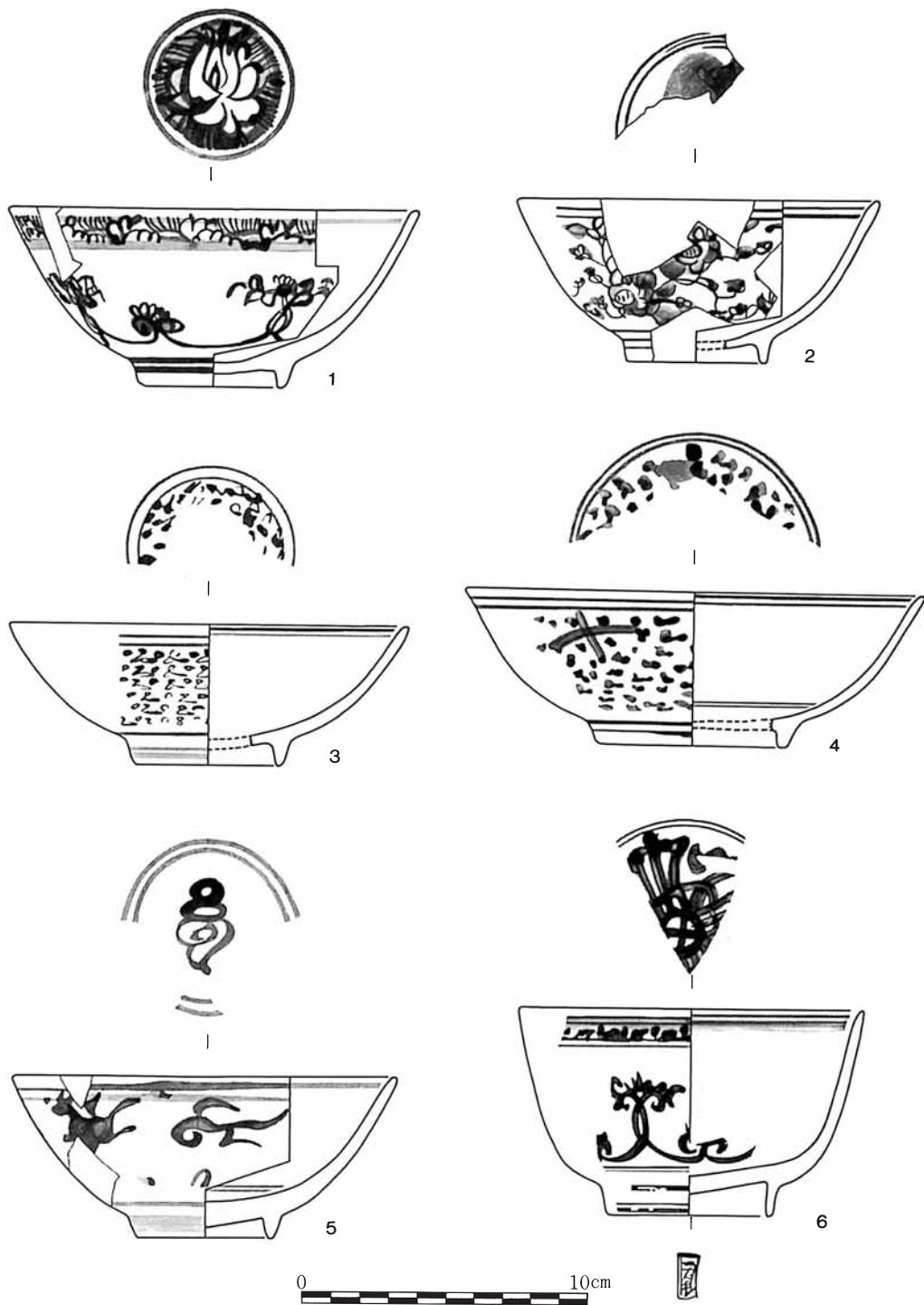
注1) 藤岡了一「明の染付」陶磁大系 42 平凡社

(宮里)



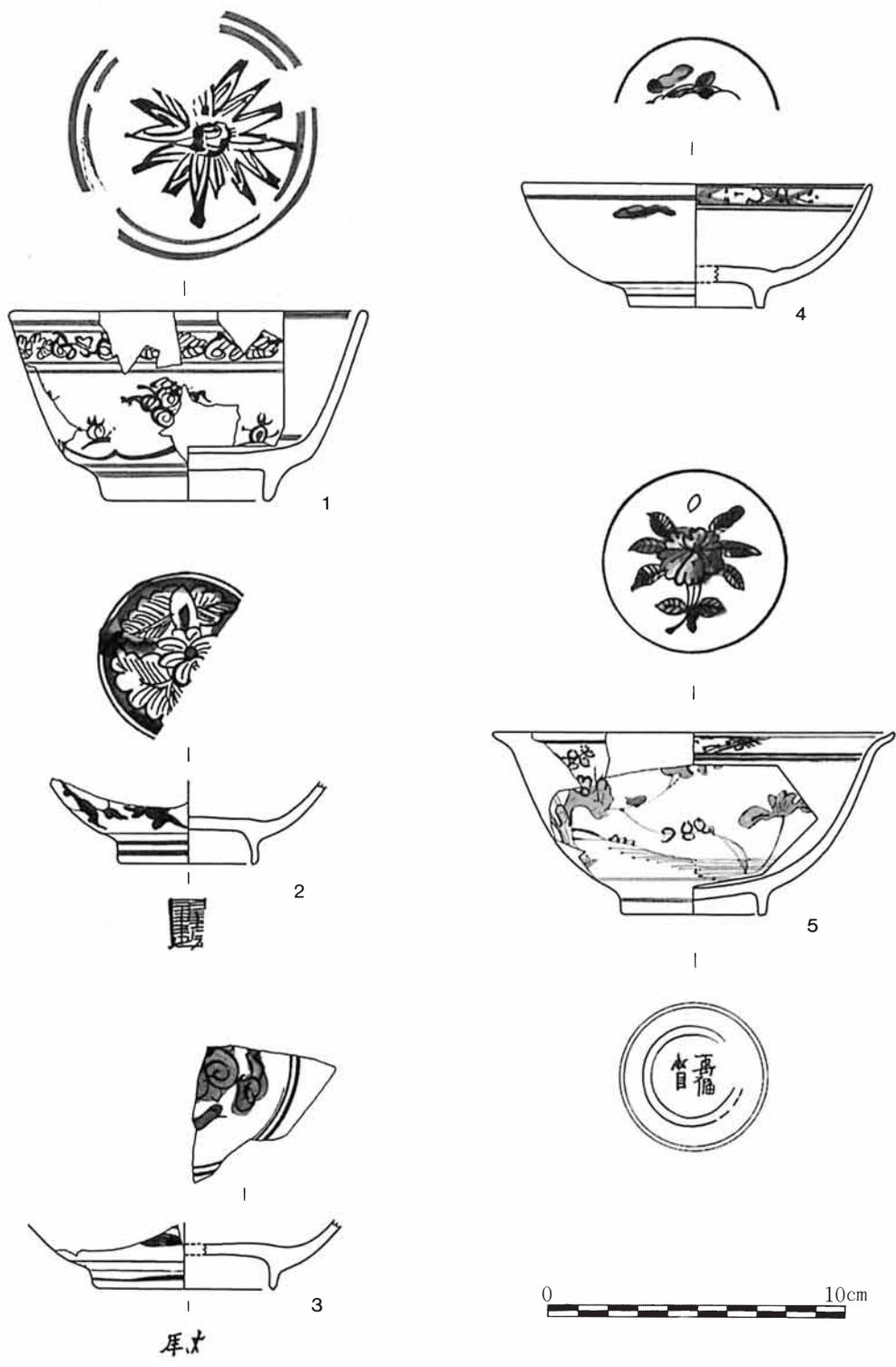
第26図 (PL. 39、PL. 40の1~3)

明染付碗 (I-1・2、II-3~5、III-6・7)

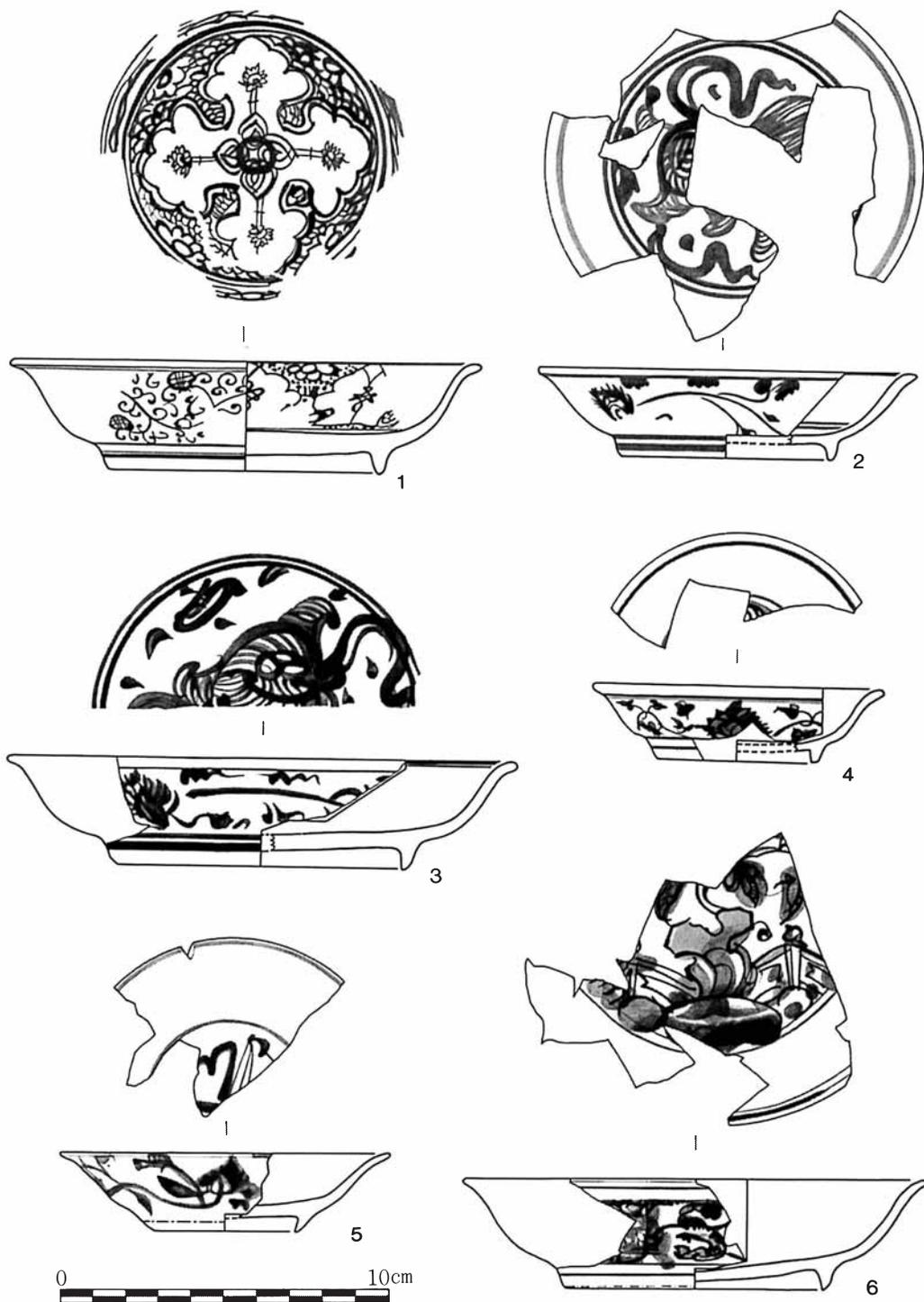


第27図 (PL.40の4・5、PL.41)

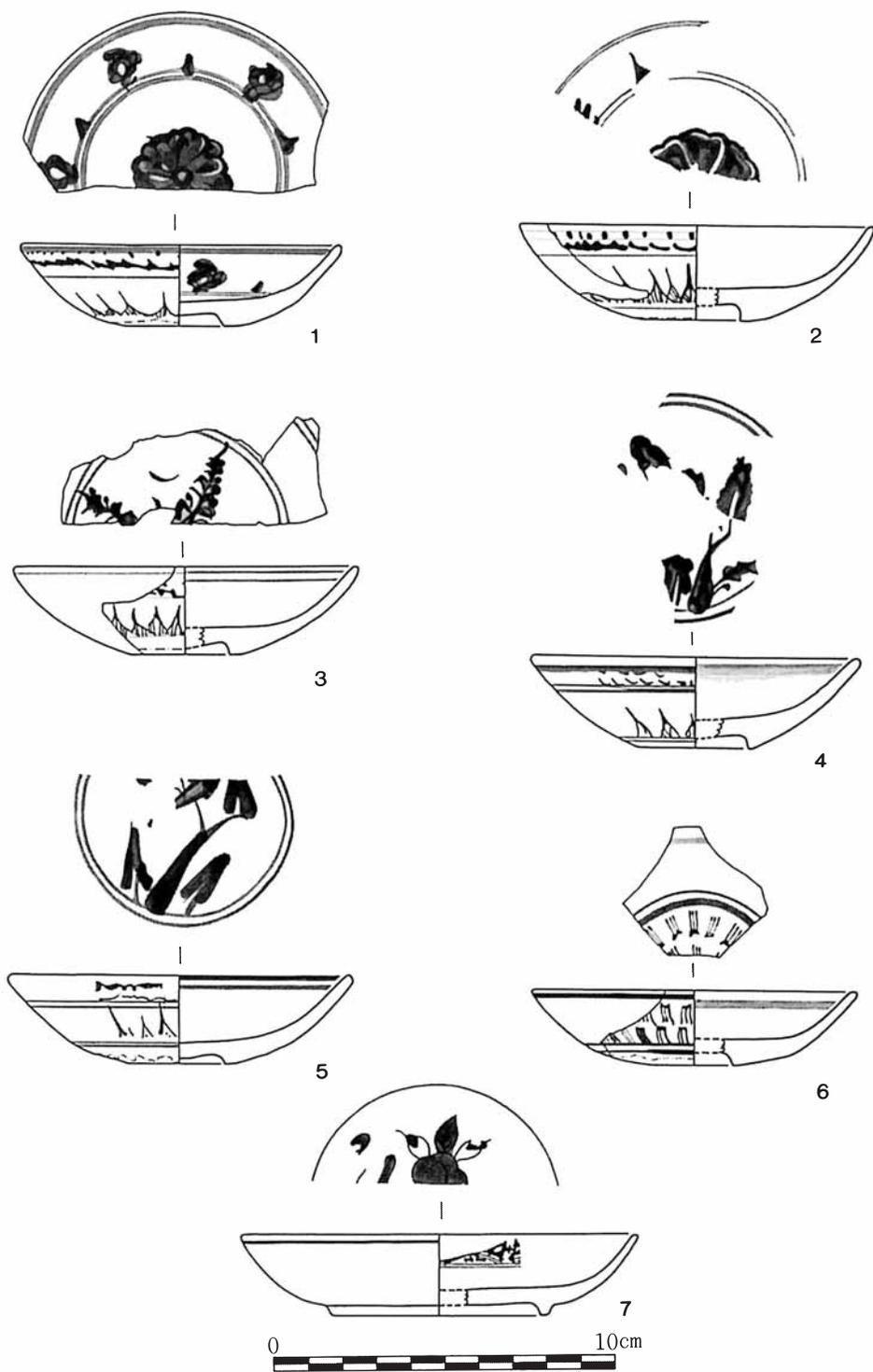
明染付碗 (Ⅲ-1 ~ 5、Ⅳ-6)



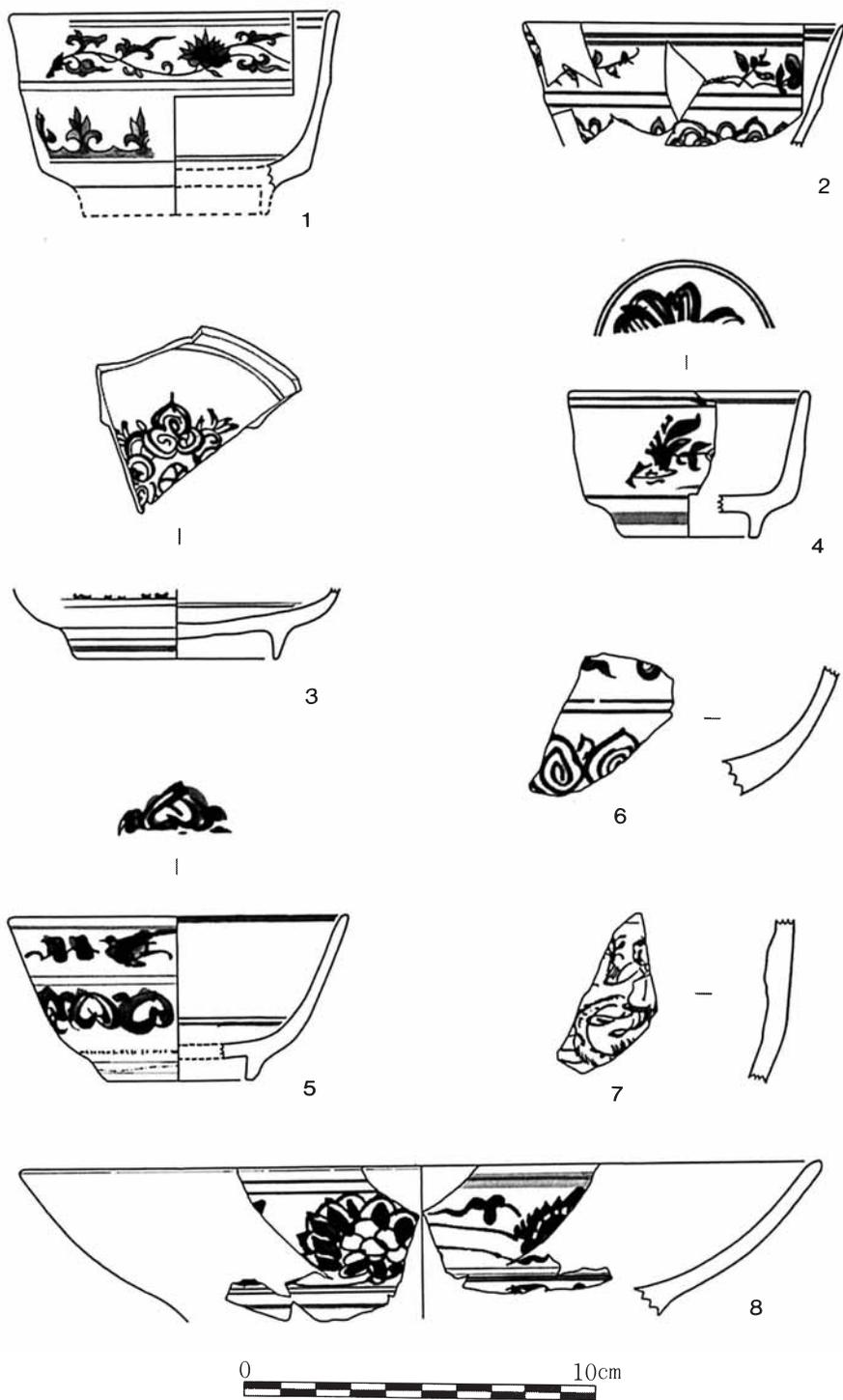
第28図 (PL. 42) 明染付碗 (IV-1、V-2~4、VI-5)



第29図 (PL. 43・44) 明染付皿 (I-1~6)



第30図 (PL. 45・46) 明染付皿 (Ⅱ-1~6、Ⅲ-7)



第31図 (PL.47) 明染付杯 (I-1~4、II-5)、“袋物”(6・7) “盤”(8)

5 黒 釉 陶 磁

黒い釉薬のかかった焼物を黒釉陶磁としてまとめた。黒釉の最も代表的なのは天目茶碗である。ここでは黒釉壺、黒釉茶入れ、黒釉碗、黒釉天目茶碗に分類して述べる。

(1) 黒 釉 壺 (第32図1・2、PL. 48)

1は口径9 cm、器高8.9 cm、底径7.2 cmの薄手壺である。口縁は玉縁で頸部が若干長い。器形は茄子茶入れに類似する。素地は茶入れと同じで、赤紫色の非常に微粒子でねばりがある。頸部内体面から底部脇まで黒褐色の薄い釉がかけられている。底部脇から底部際までは青灰色の釉が薄く塗られている。底は平底で糸切り痕はない。この壺と同タイプの壺がピロースク遺跡で検出されて(注1)いる。2は口径8.1 cmで、頸が非常に短い薄手壺である。素地は黄白色でやや粗粒子である。薄い黒釉を内外面に施釉した後で口唇部釉を掻き取って露胎にしてある。(3区Ⅱ15~20)。

(2) 黒 釉 茶 入 れ (第32図3・4、PL. 48)

3・4は同一個体ではないが、器形、素地、釉調などから同一タイプの茄子茶入れと考えられる。3は口径5.2 cmの茶入れである。口縁は若干玉縁状で、頸部が少し長い。素地は赤紫色で非常に微粒子でねばりがある。黒褐色の薄い釉が頸部内体面から底部脇まで施釉されているものと考えられる。(3区Ⅱ20~25)。4は茶入れの底部で明瞭な糸切り痕が残っている。素地は赤紫色で非常に微粒子でねばりがある。底部脇の露胎部分に厚い釉垂れが見られる。この茶入れ底部と同タイプの底部がピロースク遺跡で検出されている。(注2)(3区Ⅱ15~20)。

(3) 黒 釉 碗 (第32図5、PL. 48)

器形の半分以上が接合できた。口径13.6 cm、器高6.1 cm、高台径5.3 cmの内湾タイプの碗である。口縁は内側にやや玉縁状に肥厚し、高台は内割りが深い。素地は灰白色でやや粗粒子で、釉は黒褐色を呈する。やや薄い釉が腰部まで施釉され、高台脇から外底までは露胎である。釉色は天目茶碗に類似するが、器形にかなり差異があるので碗とした。(3区Ⅱ15~20)。

(4) 黒 釉 天 目 茶 碗 (第32図6~10、PL. 48)

いわゆる天目茶碗で、底部破片で見た推定個体数は全部で17個である。口縁のひねり返しの明瞭なものと、ひねり返しの痕跡はあるが施釉で直口になっているものもあるが、ほとんどいわゆるベッ甲口口縁のタイプにはいる。高台は底く、内割りが非常に浅い。高台の削り出しで、高台脇に明瞭な鑄が見られるのがほとんどで、鑄のないのは1点だけである。素地は灰黒色の粗粒子が多いが、

灰白色、灰黄色粗粒子のものも見られる。釉は最初に薄い渋色釉をかけ、つぎに厚い黒釉をかけている。すべて高台脇から外底までは露胎である。

6は口径12cm、器高約6.2cm、高台径約4.1cmの褐釉色の天目茶碗である。素地は灰黄色である。釉は黒色で褐錆斑が全面に見られる。べっ甲口がかなり明瞭である。(3区Ⅱ10~20)。7は口径12.2cm、器高7cm、高台径4.3cmの黒釉天目茶碗である。素地は灰黒色粗粒子で、釉は黒色で褐錆斑が見られない。口縁はわずかにべっ甲口を示している。(4区Ⅱ15~20)。8は口径12.6cmの褐釉色の天目茶碗である。素地は灰黒色粗粒子で釉は褐色で部分的に褐錆斑が見られる。(3区Ⅱ10~15)。9は口径約11.8cm、器高約6.5cm、高台径4.4cmの黒釉天目茶碗である。素地は灰黒色で釉は黒色である。褐錆斑が見られない。(5区Ⅳ20~25)。10は高台径3.7cmの黒釉天目茶碗の底部である。素地は黒灰色で釉は黒色である。褐錆斑は見られない。高台から胴部への立ち上がりはかなり緩いのと、高台脇に鑄のない点で上記の類とは別の類に属すると考えられるが、1点だけであり、また、図上復元もできなかったので分類しないで示したが、今後の資料を俟ちたい。

(金武)

注 (1) 「ビロースク遺跡発掘調査ニュース」石垣市教育委員会1981

(2) 同 上

6 褐 釉 陶 器

褐釉陶器の破片は多く検出されているが、復元できたのは壺1点だけである。器種は壺がほとんどで、壺以外では鉢が1点検出されただけである。壺は2つに大別される。壺Ⅰ群は5区Ⅳ30~45V、Ⅵ層など深い層でもかなり検出されているが、壺Ⅱ群は5区Ⅳ30cm以下の深い層ではほとんど検出されていない。

(1) 壺Ⅰ群 (第33図1~8、PL. 49)

口縁が玉縁状を呈し、内体面露胎の耳付壺である。素地に黒色砂粒と白色砂粒の混入するのがある。

1は口径11.7cm、器高39.5cm、底径13.7cmの四耳壺である。底は若干上げ底である。素地は灰白色粗粒子で、黒色砂粒が混入している。黒褐釉の薄い釉が口唇部から底部脇まで施釉され、底部脇から外底までと内体面は露胎である。耳の横には2字の銘が印刻されている。(多くは5区Ⅳ)。2~5は暗褐色を呈する耳付壺の破片であるが、小破片のため大きさについては不明である。(4は5区Ⅳ35~40)。6は底部破片で、底部脇には暗褐色釉の釉垂れが多く見られる。(第5区Ⅳ40~45)。7は肩部径が約17.5cmの小型の壺である。素地は赤褐色で、白色砂粒が多く混入している。

(2区Ⅱ0～10)。8は図上復元した。口径9.2cm、器高約17cm、底径9.3cmの小型の壺である。素地は灰色のやや粗粒子で、黒色砂粒が多く混入している。施釉に特徴があり、暗褐色の薄い釉を頸部内体面から耳の上半分の線まで施釉し、耳の下半分の線から外底までと内体面、内底は露胎である。この1点だけは耳も縦耳であり、今後の資料では独立して分類できる。(5区Ⅵ)

(2) 壺Ⅱ群 (第34図、第35図、PL. 50)

口縁断面が四角状を呈し、外底だけ露胎の無耳壺である。ほとんど薄手の大型壺である。素地は粗粒子で、白色砂粒が混入している。釉は薄い黒褐色釉である。第34図1・2は口径約21cm、肩部で約45cm前後のかなり肩の張る大型壺である。肩上部には重ね焼きのための目跡がいくつも見られる。第35図1は肩の張りが弱い壺である。底部は上げ底で、底部脇から腰部にかけて轆轤痕が顕著に見られる。

(3) 鉢 (第33図9、PL. 49)

口径24.6cm、器高約15.5cm、底径12.5cmの搗鉢形の鐳縁鉢である。素地は赤褐色のやや粗粒子で、白色砂粒が混入している。暗褐色の薄い釉が内外面に施釉され、底部脇から外底までは露胎である。鐳は水平ではなく外側に傾斜している。内底には同心円の刷毛目痕が見られるが、溝が浅いと釉がかかっていることで搗鉢の機能はないと考えられる。類例資料がないので現段階では調整痕と考えておきたい。

(金武)

7 緑 釉

総数10片、個体数にして2点の出土をみた。第36図1・2に示したもので、器形は2点とも瓶である。1は淡灰色を呈する若干粗目の磁胎で、焼成は比較的良く堅くしめられている。外器面は界線により、頸部、胴部、腰部に三分割され、頸部と胴部には唐草文、腰部にはラマ式蓮弁帯が線刻されている。内器面は露胎、外器面は白化粧を施しその上に緑釉を高台外面まで施す。成形は、胴部下半、胴部上半、頸部から上をそれぞれ独立してつくり、継ぎ合す技法がとられている。第5区Ⅱ層出土。2も唐草文が線刻されたもので、1と同様に胴継ぎによる成形技法である。素地は白色微粒の磁胎で外器面は釉下にうすく白化粧が施こされている。緑釉は風化が著しく殆んど剥落している。第2区Ⅱ層10～20cmの出土。

(宮里)

8 三 彩

総数9片、個体数にして2点検出された。第36図4は魚を形どった尾部の破片である。

尾びれ部分が黄色釉、鱗の部分には緑釉がかかっている。素地は黄白濁色を呈し、やや粗粒子の半磁胎である。小破片の為、全形は窺えないが、器内部が空洞になっていることからすると、「魚形水滴」が推察される。第1区Ⅱ層0～5cmの出土。

第36図3は瓶の胴部片で、外面に線刻牡丹文を持つ。文様の部分は主に黄色釉が施され無文の部分は緑釉がかかっている。同図4の標品と同様の素地、釉調を呈す。第5区Ⅱ～Ⅲ層の出土。

(宮里)

9 翡翠釉

破片数42片、個体数にして約8点の出土をみた。器形は皿、壺、瓶が認められる。

(1) 皿 (第36図7～10)

皿は6点と最も多く検出された。その内4点が実測可能なもので、第36図7～10に示した。素地をみると二つのタイプに分けられる。すなわち白色微粒で堅い磁胎のものと、赤褐色で吸水性に富む陶胎のものである。7と8が磁胎のもので、二点とも器肉がうす手の皿である。9・10は陶胎のもので、磁胎のものに較べて厚く成形されている。4点とも全面に白化粧が施こされ、その上に青色の翡翠釉がかかっているが、風化が著しくいずれも剥落が目立つ。

(2) 壺 (第36図5)

いわゆる「甌口」を持つ壺の口縁部片で、外器面釉下には鉄絵が描かれている。素地はベージュ色を呈す比較的粗粒の半磁胎で、両面とも白化粧が施されている。第3区BⅡ層10～15cm出土。

(3) 瓶 (第36図6)

肩部片で、外器面には線刻の牡丹文が描かれている。素地は淡い灰白色を呈す比較的微粒子の磁胎で堅くしまっている。外器面は釉下に白化粧が施こされる。第3区BⅠ層出土。(宮里)

10 瑠璃釉

総数14片、個体数にして5個体が検出された。器種は瓶又は壺とみられる袋物と皿がある。

(1) 袋物 (第37図6・8・9)

4個体認められ、うち3点が図化可能なものである。6は瓶の口縁部片と考えられるもので、復元口径が6.2cmを測る。素地は白色微粒子で堅く磁質に富む。外面に瑠璃釉、内面には白磁釉がかけられている。第2区Ⅰ層の出土。8は瓶の底部片と考えられるもので外器面に瑠璃釉が厚目に

かかり、内器面には白磁釉がうすくかけられている。素地は白色微粒子の磁胎であるが、練りが悪く気泡が多く認められる。第5区Ⅱ層の出土。9は壺または瓶とみられる底部片で、高台径の推定が8.2cmを測る。畳付とその周囲を露胎とし、外面に瑠璃釉、内面と高台内には白磁釉が施こされている。素地は白色微粒子の磁胎で堅くしまっている。第2区Ⅱ層25～30cm出土。8、9ともに畳付に珪砂粒の附着がみられる。

(2) Ⅲ (第37図7)

1個体出土している。7は口縁部片である。釉は濃藍色に発色し、内外面にうすく施釉されている。素地は白色微粒子で磁質に富む。第5区Ⅱ層の出土。 (宮里)

11 五 彩

第37図10に示した1点の出土である。口径14.3cm、底径7.9cmを測る口縁端反の皿で、文様は白磁釉の上に絵付されている。呈色済は風化のため全て剥落しており色は不明であるが、文様は内底面と外面に宝相華文を描いた痕がある。外底部には字款(呉須)を持つ。素地は白色を呈し、緻密で磁質に富む。畳付には砂粒が付着しており、砂床焼成がなされたと考えられる。 (宮里)

12 高 麗 青 磁

高麗青磁は碗と盤の器種で、口縁部、胴部、底部資料を含め総破片数39点である。個体数にして4点である。そのうち実測可能なものは碗3点、盤1点である。

第37図-1は口径17.8cmの碗で、腰部はふくらみをもち、口縁端部を外反させ、口唇部を丸くする標品である。素地は灰色を呈し微小の孔がみられる。釉は灰青色を呈し、口縁部から底部にかけて内外全面にかけられる。腰部外面には白濁の釉だれがみられる。内底には花文を配し2本の圏線で囲んでいる。その上にもう1本圏線を廻らし、竹管文を繋いだ雲鶴文を配している。口縁部内面は雷文を描き、上下に2本を1組とする圏線を廻らす。外面は腰部に蓮弁を描き、上下に圏線を廻らし囲んでいる。胴部は花卉状の曲線を描き、その横位に白土で象嵌された円文を二重にして、中で黒土で象嵌される十字状の文様を配している。口縁部下に大小3本の圏線を廻らす。第5区Ⅳ35～40。

同図-2は口径21cmを測り1と比べて大きい碗で同タイプのものである。標品は底部を欠損するもので、腰部を張り出させ口縁部をやや外反にして口唇部を丸くする。素地は灰色を呈し緻密である。釉は灰青色を呈し、器面内外に全面施釉される。内底には白土象嵌による文様が描かれる。文様は腰部内面に1本の圏線を廻らし、直下に竹管文が押される。胴部内面には1と同様の竹管文を繋いだ雲鶴文を配し、口縁部にかけては口縁直下に1本の線と2本を1組とした圏線を廻らす。その中

I
に雷文が描かれる。外面は腰部下に蓮弁文を配し、上下を圏線で囲む。胴部は唐草状に似る曲線を描き、横に白土と黒土で象嵌された花文を配し、三重の窓枠文で閉じられる。口縁部直下には斜位に短線を廻らし、直下に3本の圏線が回される。第2区Ⅱ25～30。

同図-3は底径6.4cmの碗で、器形は1、2と同様のタイプである。内底部分と高台の成形が不良で、畳付にたわみがみられる。素地は灰色でやや赤味を帯び、微小の孔がみられる。釉は灰青色で畳付を含め全体にかけられる。内底に竹管文が押され、腰部に2本1組の圏線を上下にして、白土象嵌の花文を囲んでいる。花文と花文の間を黒土象嵌された太い線で縦位に仕切られる。更に胴部にかけて竹管文が施される。外面は腰部に2本1組の線と1本の線で蓮弁文を囲む。上部に線彫りによる曲線文が描かれる。第3区Ⅱ50～55。

同図-4は盤である。小片のため底径はうかがえない。素地は灰色で緻密である。焼成による赤味がサンドイッチ状に挟まれる。釉は高台を含めて全面にかけられるが発色はにぶい。内外面に白土象嵌の線彫り文様が描かれる。内底面近くに竹管文を配し、2本1組の2重圏線で囲んでいる。胴部にかけて花文が描かれる。外面は蓮弁文を描き、上下2本の圏線で囲んでいる。更に2本の圏線が廻らされる。第3区、44pit。(松田)

13 備前焼播鉢

第38図1～4に示した4点である。1は口縁部がわずかに三角形状に肥厚する。内面には数本の櫛描きが見られるが破片のため何本櫛か明らかでない。素地は粗粒子で、石灰質砂粒、珪酸質砂粒が混入している。還元焼成されており、灰色を呈する。2は口縁部がほぼ直立する盤口状である。口縁外面には幅約5mmの篋描き凹帯文が2本廻っている。素地はやや粗粒子で砂粒が少量混入している。酸化焼成でよく焼きしまっており、暗褐色を呈する。3は胴部破片で内面には7本単位の櫛描きが見られる。素地は粗粒子で荒い砂粒が多く混入している。酸化焼成で赤褐色を呈する。4は口径約29cm、底径約13cm、器高約10.7cmである。口縁部は2と類似の盤口状である。口縁部下部はくの字状に肥厚する。内面には7本単位の櫛描き目が縦位に走っている。素地は粗粒子で荒い砂粒が混入している。酸化焼成でよく焼きしまっており暗褐色を呈する。なお、榑崎彰一氏の御教示によると1は14世紀中葉で、2～4は15世紀末～16世紀の備前焼播鉢である。(金武)

14 タイ陶磁

第38図5(PL.54)に示したのがサワンカローク窯の袋物である。高台径6.4cmで、高台は「ハ」の字状に広がる。高台の内割りは一丁寧である。素地は灰色粗粒子で、黒色砂粒が多く混入している。高台脇から高台外面までは鉄釉が塗られている。高台脇から胴部にかけては、鉄釉で界線や

円文などが描かれている。鉄絵の上には薄い白色釉がかけられており、腰部に釉垂れが見られる。内底にも白色釉がかかっているが、斑状に露胎面が見られる。畳付から外底までは露胎である。

(金武)

15 ベトナム陶磁

第38図6 (PL. 54) に示した染付碗である。口径13cm、器高5.9cm、高台径5.6cmの直口碗である。高台は高く、外底は平坦に仕上げられている。素地は黄白色でやや粗粒子。焼成は弱く半磁胎である。黒青色の呉須で胴部に蓮弁のような文様が描かれている。口縁部には2本の界線の中に青海波文が上下交互に描かれている。高台、高台際、高台脇、内底、腰部内体面、口縁内体面に各々1本ずつの界線が廻っている。釉は黄白色の透明釉を薄く高台内面まで施釉した後で畳付釉を掻き取っている。また、内底釉を蛇の目状に掻き取っている。全面に細かい貫入が見られる。

(金武)

16 瓦質土器

第39図1～7に示したのが瓦質の土器である。1は肩部片で、器形は内面の轆轤痕や傾きからして壺形と考えられる。3本の弦文の上に貝殻文が押文されている。泥質(ニービ質)の素地で微粒の石英と1mm大の赤い粒が混入し、器面は黒色を呈する。(第5区Ⅲ層出土)。2は口縁部が内側に水平に折れるもので1と同様の素地である。(第3A区Ⅱ層出土)。3は口縁部破片と見られる。長さ3cm、幅1cmの把手状のものが貼付されている。外面は黒色を呈する。素地は1と同じであるが、赤い粒があまり見られない。4は火鉢の脚部片と考えられる。素地は泥質で、1mm大の赤い粒が混入している。器表面は黒褐色を呈する。5・6は透しを持つ胴部破片で火鉢の破片と考えられる。6は内面に刷毛目調整痕が見られる。7は火鉢の口縁部で菊花のスタンプが廻っている。

(金武)

17 瓦

第39図8～12に示した5点の出土である。小破片であるが、ほとんど男瓦の破片と考えられる。9を除き裏面に布目痕が見られる。いずれも還元焼成で灰色瓦に属するものである。8～10・12は瓦質土器と同じような泥質の素地で、比較的軟弱な焼成である。11は微粒子で紫褐色を呈する素地で、堅く焼きしめられている。布目痕も非常にこまかい。

(金武)

18 中世須恵器

中世須恵器の出土量は少なく、口縁部や押当文のある胴部破片などを第40図（PL・56）に示した。1は胴径約21.7cmの土瓶である。胴部で2ヶ所の継ぎ目があり、注口の継ぎ目も明瞭である。内体面は継ぎ目部分など調整されてなく凹凸が多く、不規則な押当文が部分的に見られる。外体面は滑らかに調整されて叩き目は見られない。素地は鉄分の多い暗赤色の粗粒子である。内体面は暗赤色で、外体面は灰黒色を呈する。注口の先端が研磨されている。中世須恵器の土瓶は稲福遺跡^(注1)で検出されている。（第3区Ⅱ55～60）。2は口径10.7cmの甕口の壺である。素地は鉄分の多い暗赤色粗粒子で内外面は灰色で、断面はサンドイッチ状を呈する。（5区Ⅲ）。3は内体面に格子目の押当文のある胴部破片である。素地は灰色粗粒子で、白色砂粒が多く混入している。外体面の叩き目は摺り消されている。（第3区Ⅱ20～25）。4・7～9・11・12はいずれも鉄分の多い暗赤色粗粒子である。器肉は暗赤色で内外面は灰黒色で、断面はサンドイッチ状を呈する。内体面には不規則な押当文が見られる。外体面は叩き目がわずかに見られるのもあるが、ほとんど摺り消されている。（第5区Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ、3区Ⅱ20～25）。

5・6・10は上記の中世須恵器とは素地が異なる。素地は黄褐色の砂質（方言でニービ）で、表面はざらざらして手に砂質粒子が着く。内体面には不規則な押当文があり、その上を篋状のもので調整している。外体面に叩き目がわずかに見られるのもあるが、ほとんど摺り消されて滑らかに調整されている。（第5区Ⅱ、第4区Ⅱ）。（金武）

注（1） 1982年、沖縄県教育委員会の発掘調査で検出

19 象嵌陶質土器

第37図5に示した1点である。胴径約11.5cmの壺と考えられる。素地は微粒子で、黒雲母が混入している。器肉は非常に薄く仕上げられている。外面には細い弦文と小さな円文が廻っているが、それは白象嵌である。釉薬はかかってなく素焼きである。このような細かい象嵌は出土例がなく現在のところ産地不明である。薄手で赤褐色を呈する陶質土器という点では、沖縄本島各地の「古島遺跡」で検出される陶質土器に類似する。（金武）

20 土 器

(1) グスク系土器

総数 195 片検出された。内訳は口縁部 5 片、胴部 185 片、底部 5 片である。青磁や陶器等の舶載陶磁類に較べると極めて微量である。いずれも小片の為全形をうかがえる資料はないが、口縁部片を見ると全て壺形に属すると考えられる。

これらの破片は、素地とテンパーにより次のように大きく二つに分類できる。

I 類：千枚岩の破片を多量に混入し、素地は泥質の微粒子で触れると手に粉末が付く。

焼成は弱く軟質のものが多い。全体の95%を占めている。

第41図2～4に示した3点が実測可能な破片である。3は復元底径が10.5 cmを測る。内器面に刷毛目調整痕、外器面は底部との境いに指頭痕を残している。

II 類：石英、角閃石、赤色の鉱物を混入し、素地はI類より密でねん性が強い。焼

成は良好で堅くしまりがある。量的には小数で5%を占めている。

第41図1に示した口縁部片1点の実測可能なものである。復元口径が13.4 cmを測り、器形は壺に属すると考えられる。内外面とも横方向のナデ調整を施している。

(2) その他の土器

第41図5・6に示した2点をその他の土器とした。5は所謂「くびれ平底」の破片で、復元底径が5.7 cmを測る。素地は若干粗いが、焼成は良好で比較的硬質の土器である。フェンサ下層式の範疇に属するものであろうか。

6は蓋状を呈する標品である。径が13cmを測り、中央部には「つまみ」が欠落した痕がある。焼成良好の硬質の土器であり、素地には石英粒と赤色の鉱物を多量に混入している。色調は器面が淡橙色、断面中央部が灰黒色を呈しサンドイッチ状になっている。

なお、この種の標品はこれまでに勝連城跡^(注1)、佐敷グスク^(注2)からの報告例がある。また今帰仁城本丸^(注3)地区からもかなりの量が検出されている。が、どの遺跡においてもそれを受ける下方の器体(身)が確認されていない。このことについては、すでに勝連城^(注4)の報告で指摘されていることである。

蓋として単独に焼かれたものか、それとも別の用途があったものか検討を要するものであろう。

(宮里)

注1 勝連城跡第1次発掘調査報告書 1965年

注2 佐敷グスク調査報告書 1980年

注3 今帰仁城跡第4次発掘調査

注4 勝連城跡調査報告書 1983年

21 玉 類

玉類はガラス製品がほとんどで、1点だけ石製品がある。種類はガラス小玉が最も多く、ほかに勾玉、管玉などがある。

(1) 勾玉 (第41図7~10、P.L.57)

7は翡翠製勾玉の破片で、頭部は欠損している。光沢のある白色地に緑斑が見られる。表面は丁寧に磨かれ滑らかである。8は青色のガラス製勾玉である。小型の勾玉で、このような小さな勾玉は朝鮮では冠、腰佩、訓などの装飾に使用されているが、本遺跡出土の小型勾玉がどのように使用されたか明らかでない。9・10も8と同タイプの小型勾玉であるが、火を受けて軽石状になっている。

(2) 管玉 (第41図11・12、P.L.57)

11は長さ2cm、扁平な薄緑色ガラス製管玉である。扁平になっているので紐孔も円ではなく、楕円形状を呈している。12は縦断面が楕円形状を呈する濃緑色のガラス製管玉である。

(3) ガラス小玉(第41図13~20、P.L.57)

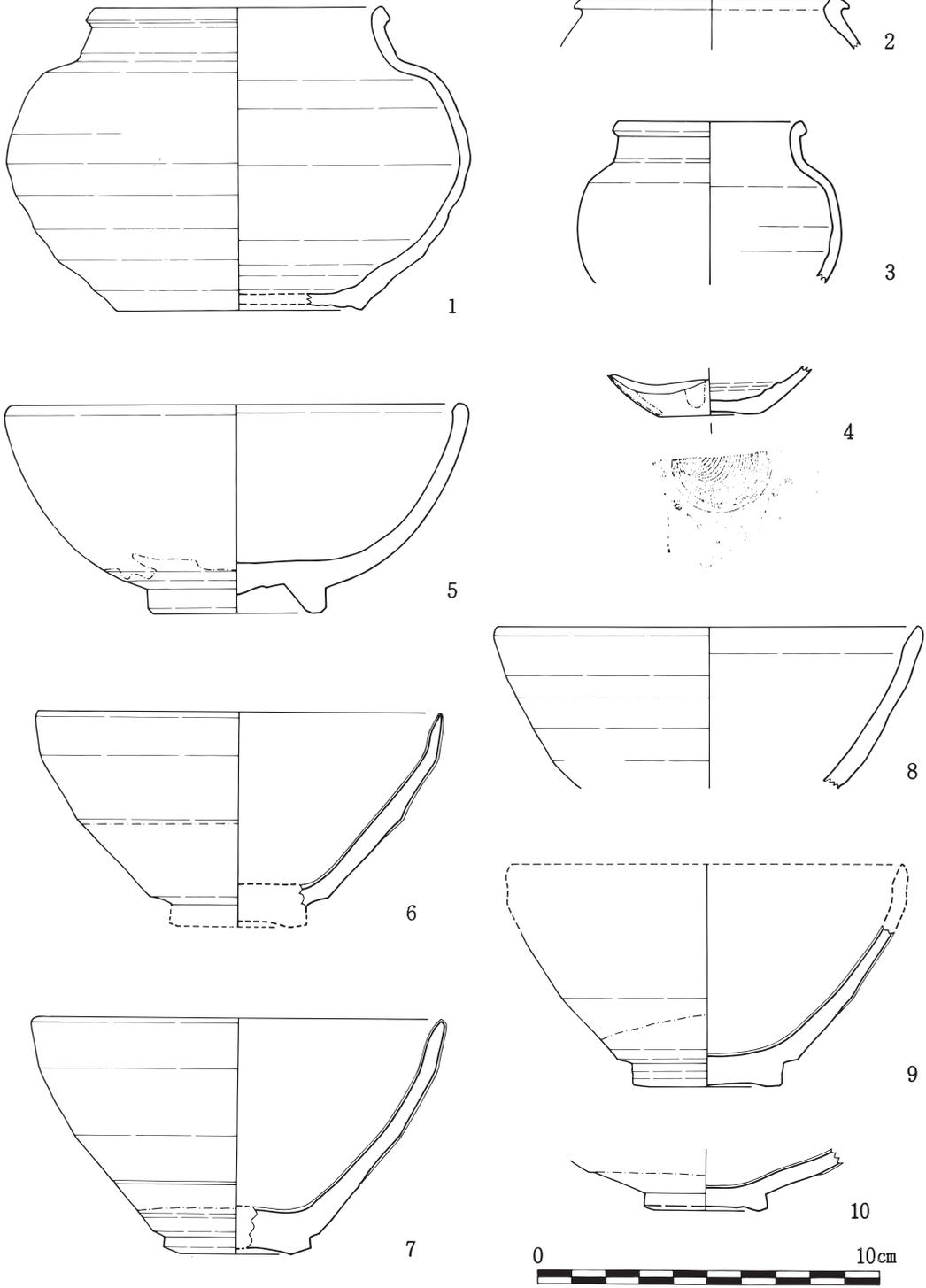
13・14は縦断面がやや楕円形状を呈する白色透明の玉である。水晶のように透明で、内部にはひび割れが無数に走っている。15・16は青色の小玉で、15は表面が黒く焦げている。17は白色の小玉で形が整っている。18は青色の小玉だが表面は風化して白色化している。2つの小玉が繋がってまだ切り離されていない状態である。19は青色、20は緑色を呈する小玉である。 (金武)

22 遊 具

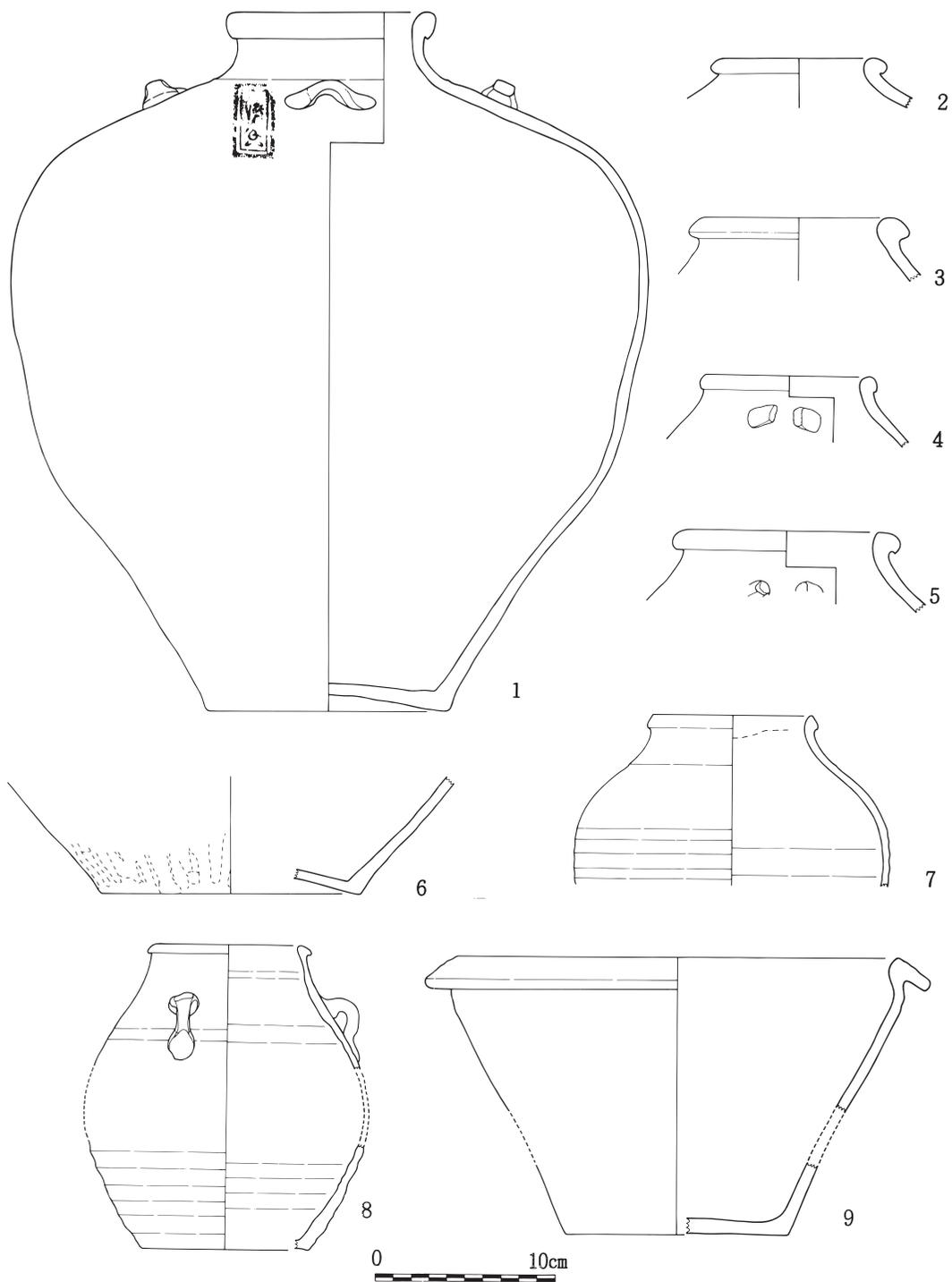
第42図(P.L.58)に示した一群で、ほとんど陶磁器を打ち欠いて円盤状に整えたおはじきである。

1は石製品で全面磨いて滑らかに仕上げられている。表と裏に5つずつ小穴をあけている。これは他のおはじきとは異なった遊具と考えられる。2も石製品であるが、小穴は見られない。3~16は褐釉陶器の破片を打欠して円盤状につくったおはじきで、大きいのと小さいのがある。褐釉陶器の破片でつくったのが最も多く、100個近く検出された。17~19は白磁の破片でつくったおはじきである。20は元様式青花盤の底部破片を打欠して円盤状に仕上げている。文様は水草の一部で、水草文のある大型盤であったと考えられる。21~25は青磁の破片を打欠して円盤状に仕上げたおはじきである。

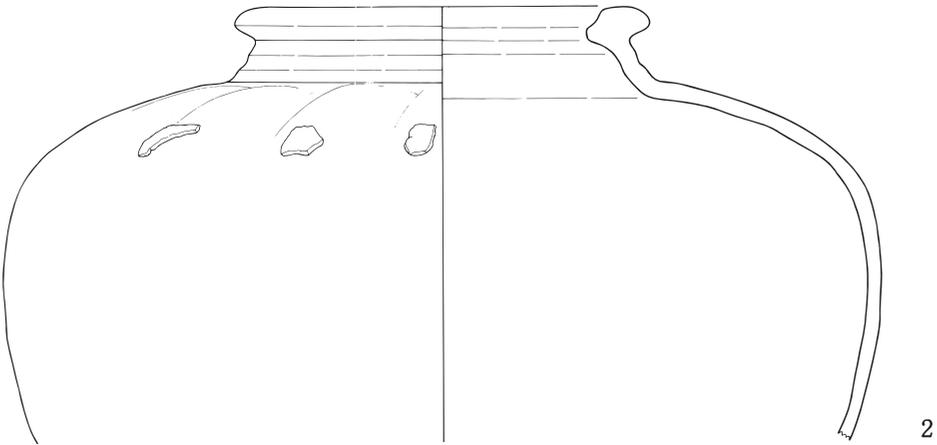
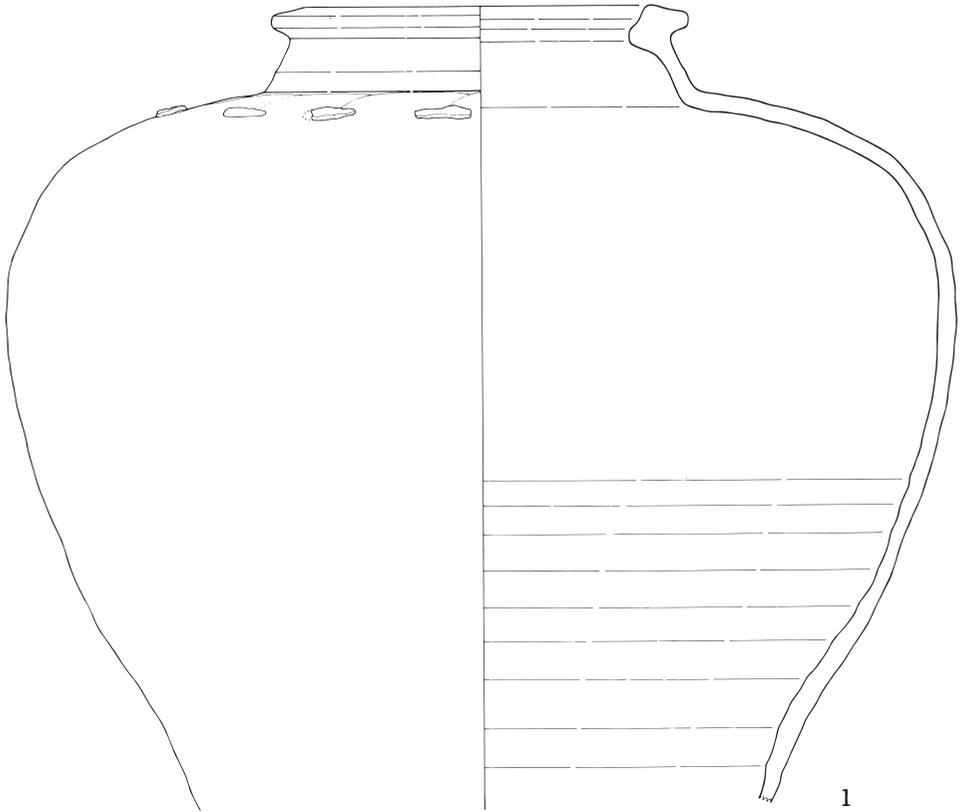
26~30は碗・皿の高台部分を利用した遊具と考えられる。高台脇を打欠して円盤状に仕上げられている。26・27は白磁皿の高台で、26は挟入高台である。28は白磁碗の高台である。29・30は青磁碗の高台である。 (金武)



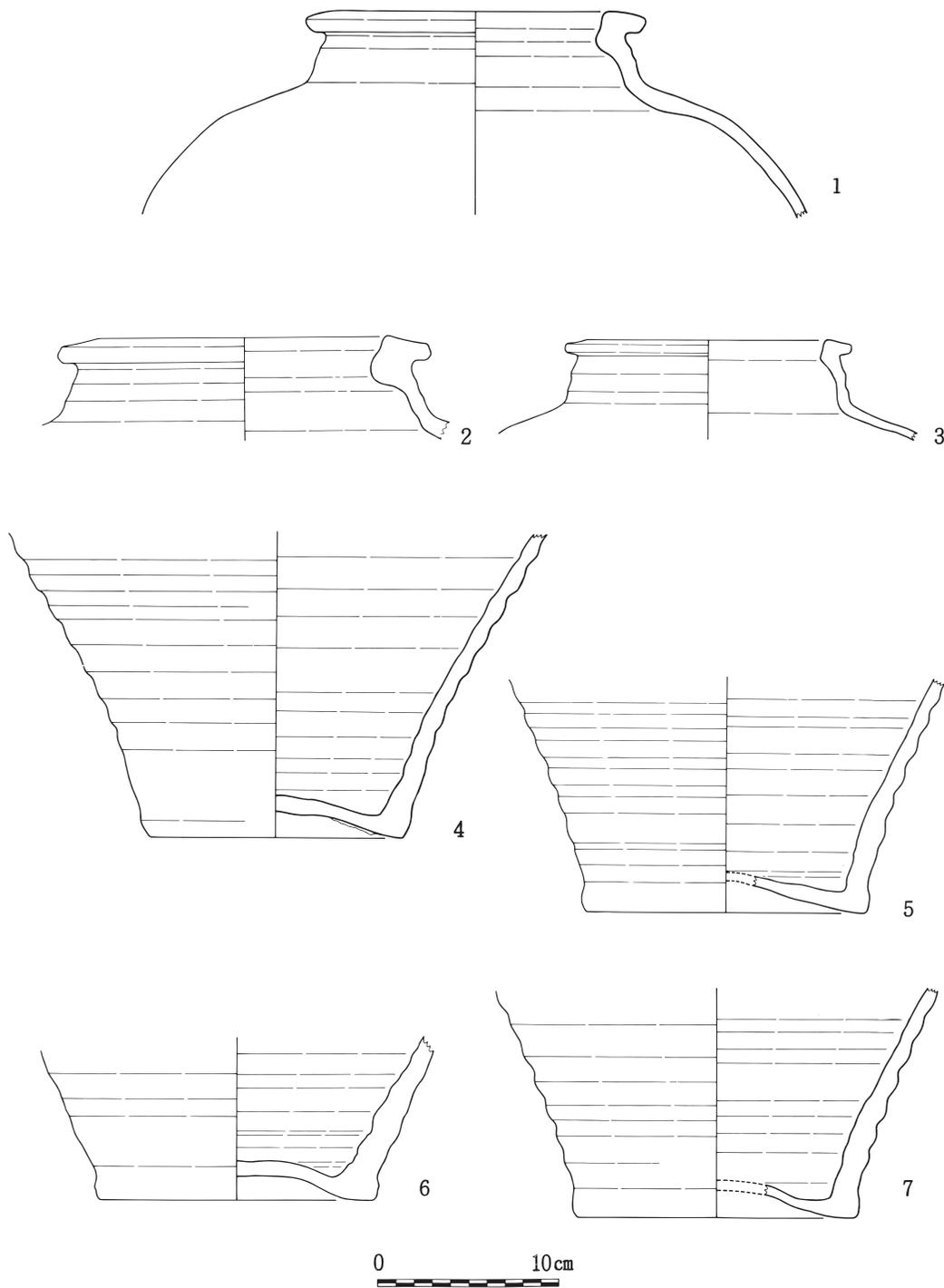
第32図 (PL. 48) 黒釉壺(1・2) 黒釉茶入れ(3・4) 黒釉碗(5) 黒釉天目茶碗(6~10)



第33図 (PL. 49) 埴輪陶器

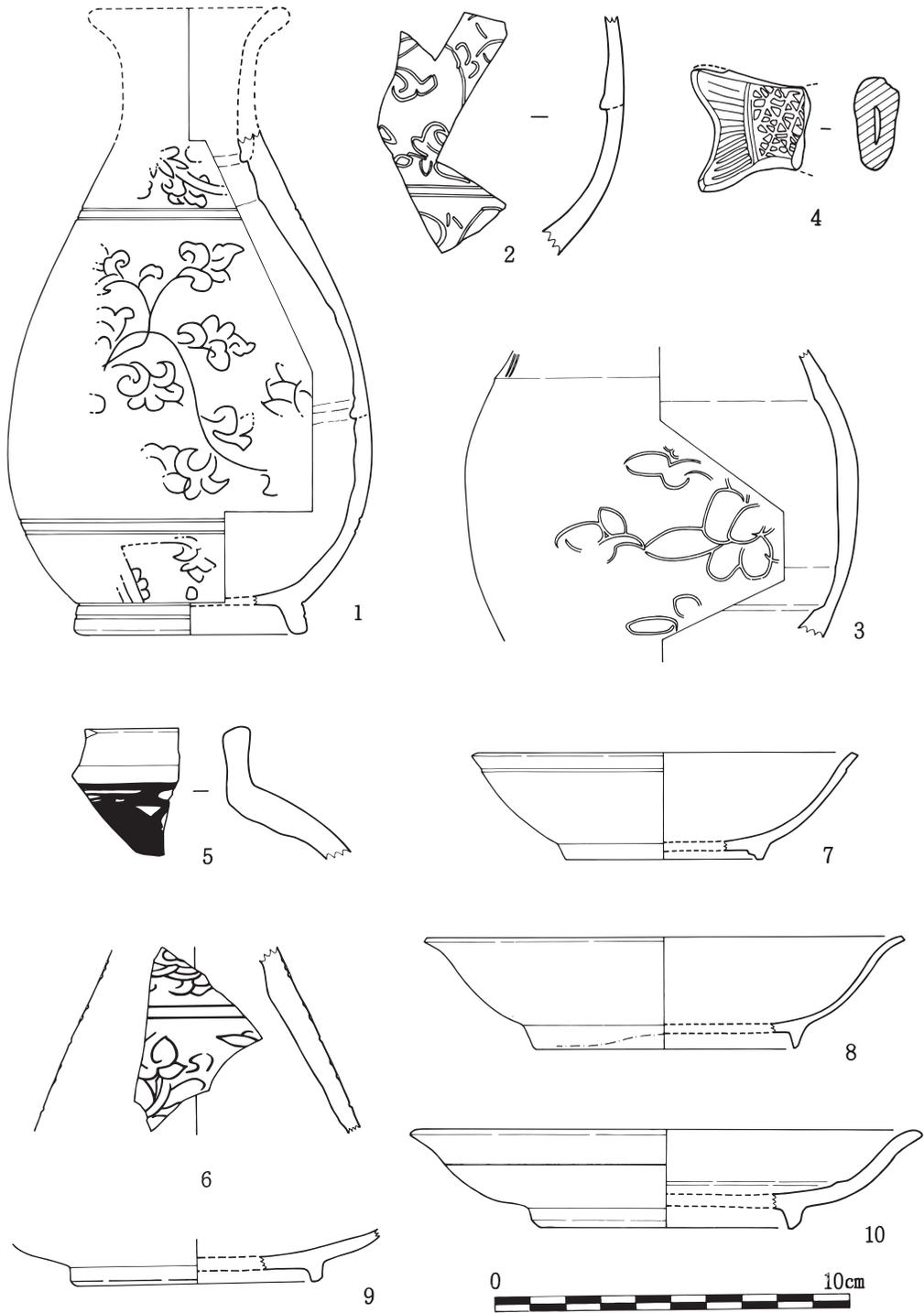


第34図 (PL.50の1・2) 褐釉陶器

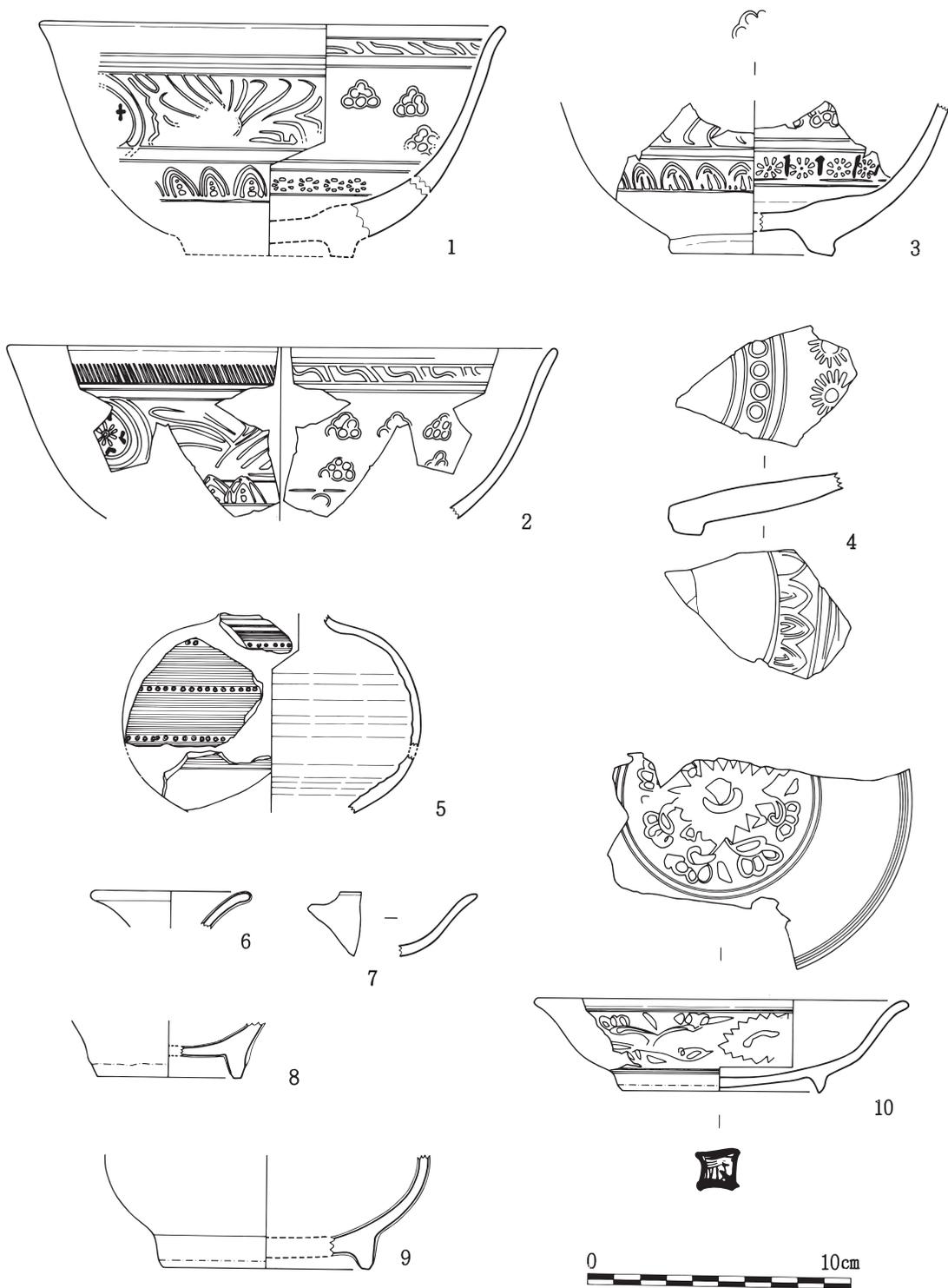


第35図 (PL.50の3~9)

褐釉陶器



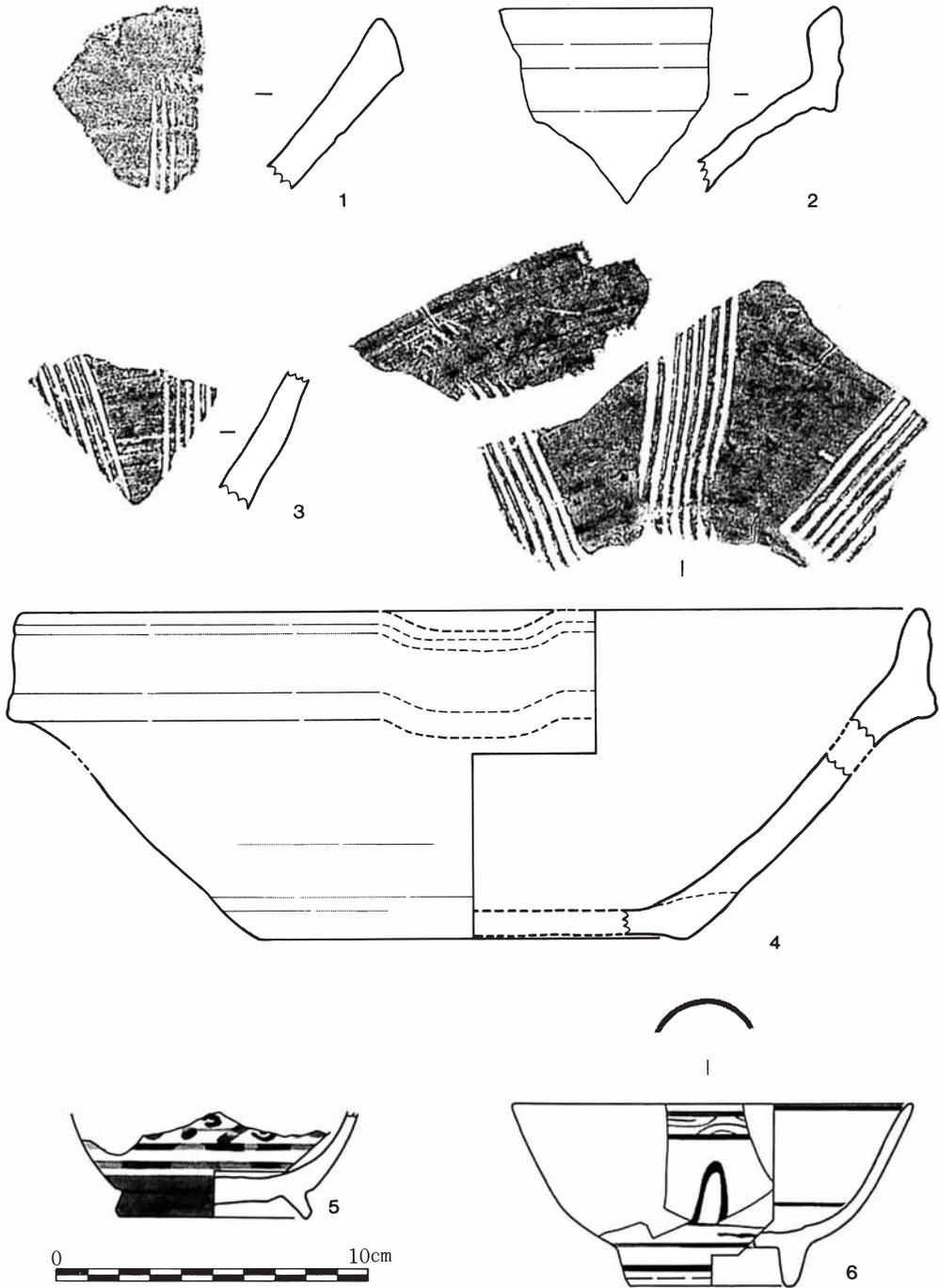
第36図 (PL.51) 緑釉 (1・2)、三彩 (3・4)、翡翠釉 (5～10)



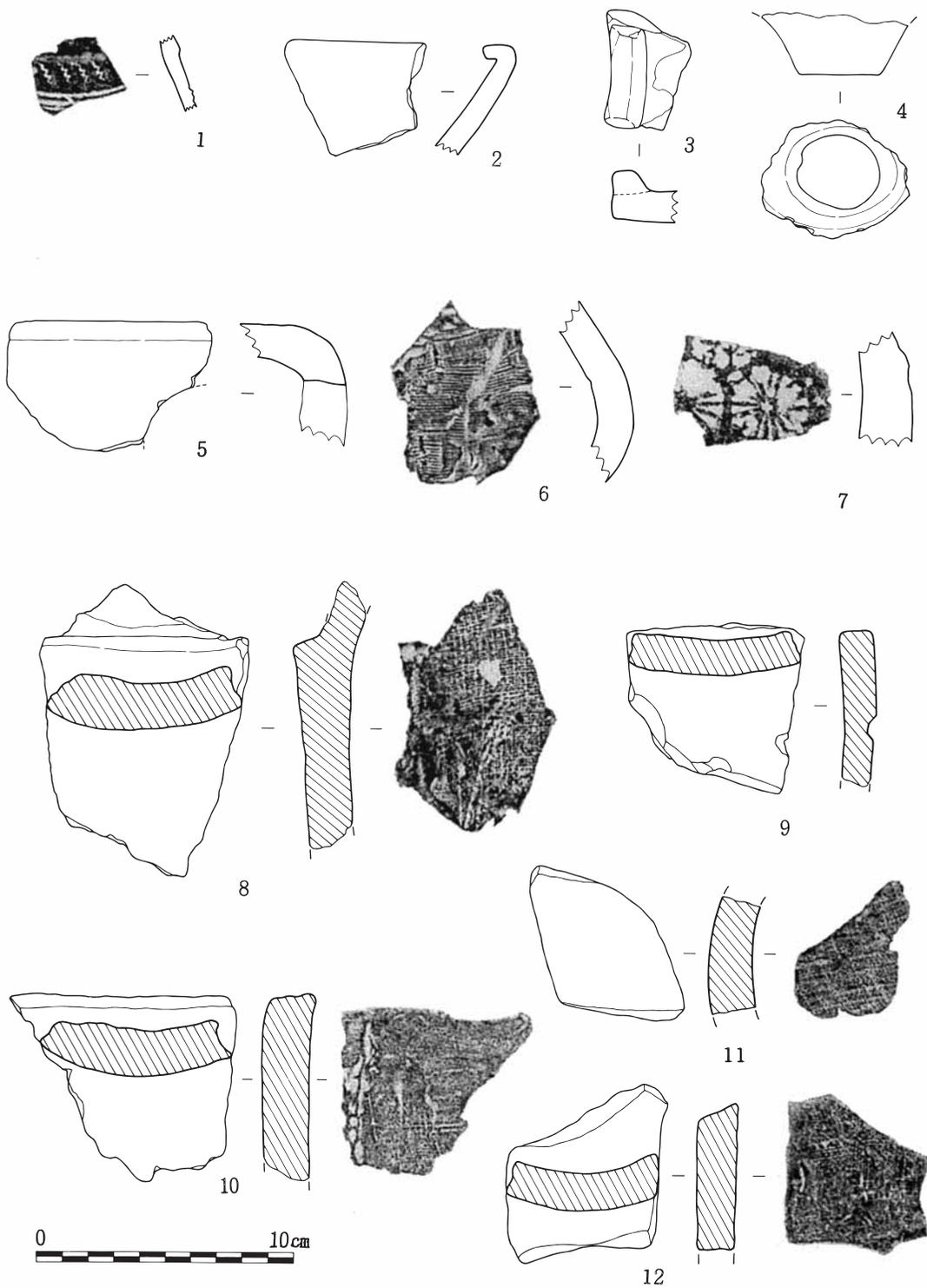
第37図 (PL. 52、1~4、PL. 53)

高麗青磁碗 (1~3) ・盤 (4)
瑠璃釉 (6~9) 五彩 (10)

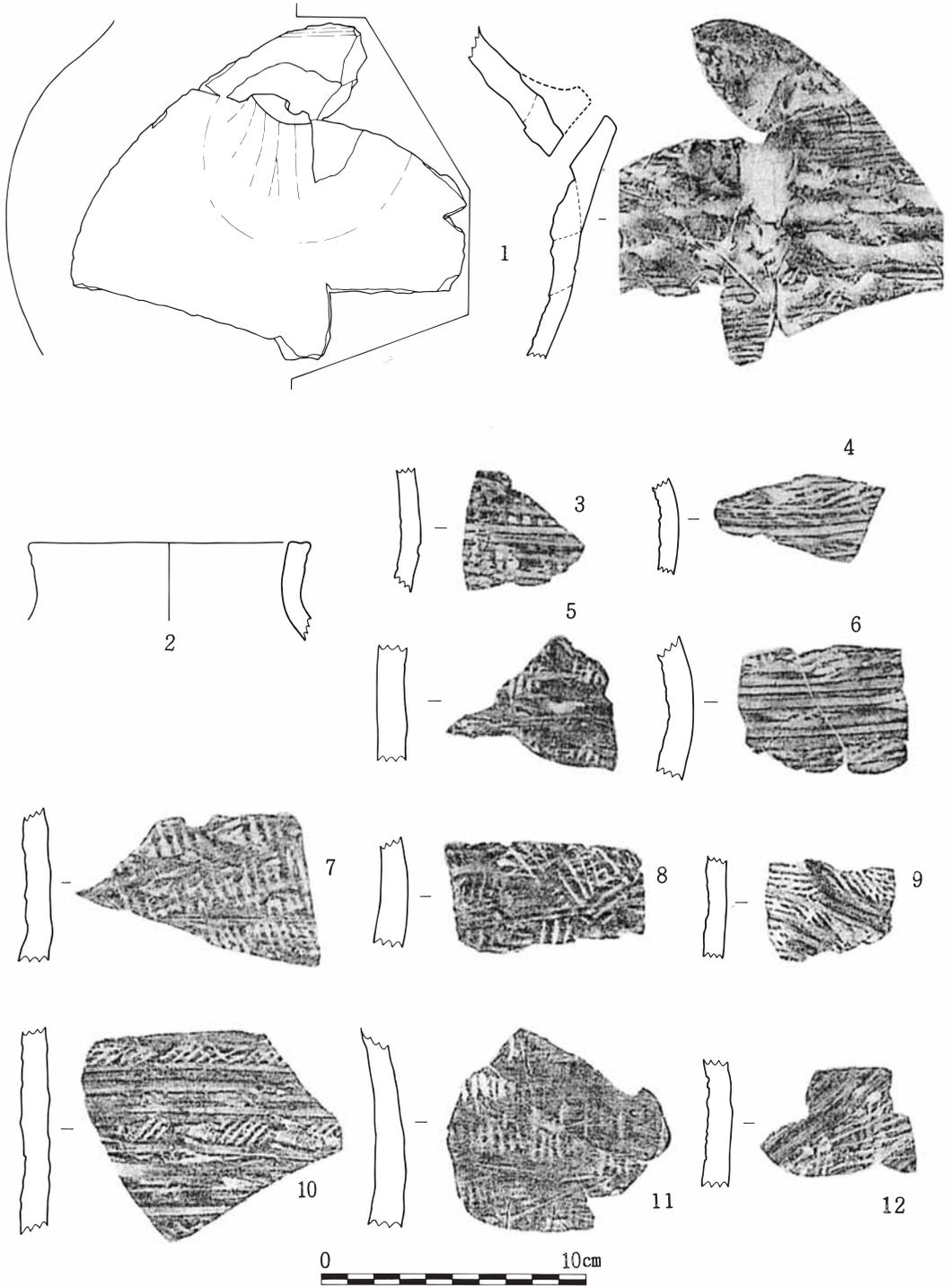
象嵌陶質土器 (5)



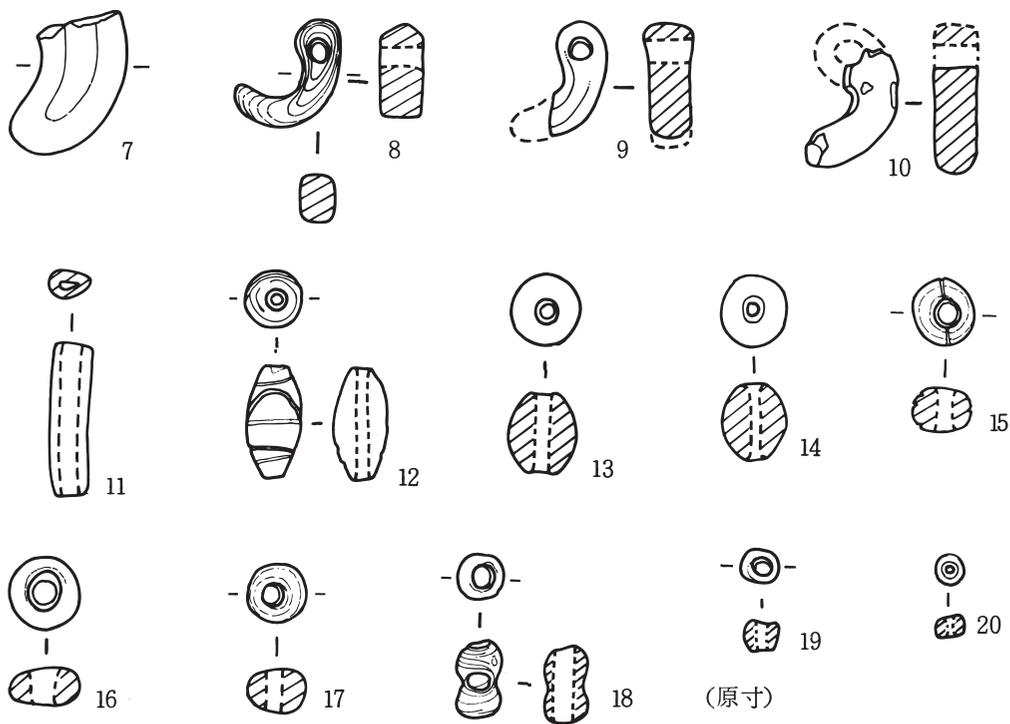
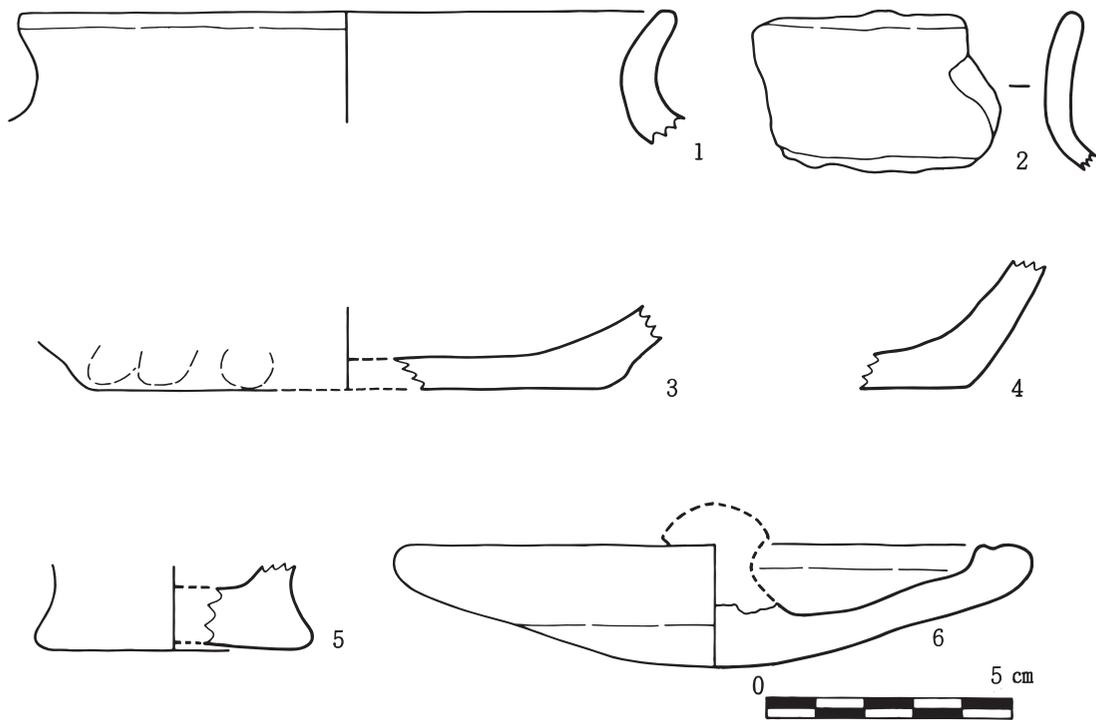
第38図 (PL. 54) 備前播鉢 (1~4) タイのサワンカローク窯袋物(5) ベトナム染付碗(6)



第39図 (PL. 55) 瓦質土器 (1~7) 瓦 (8~12)

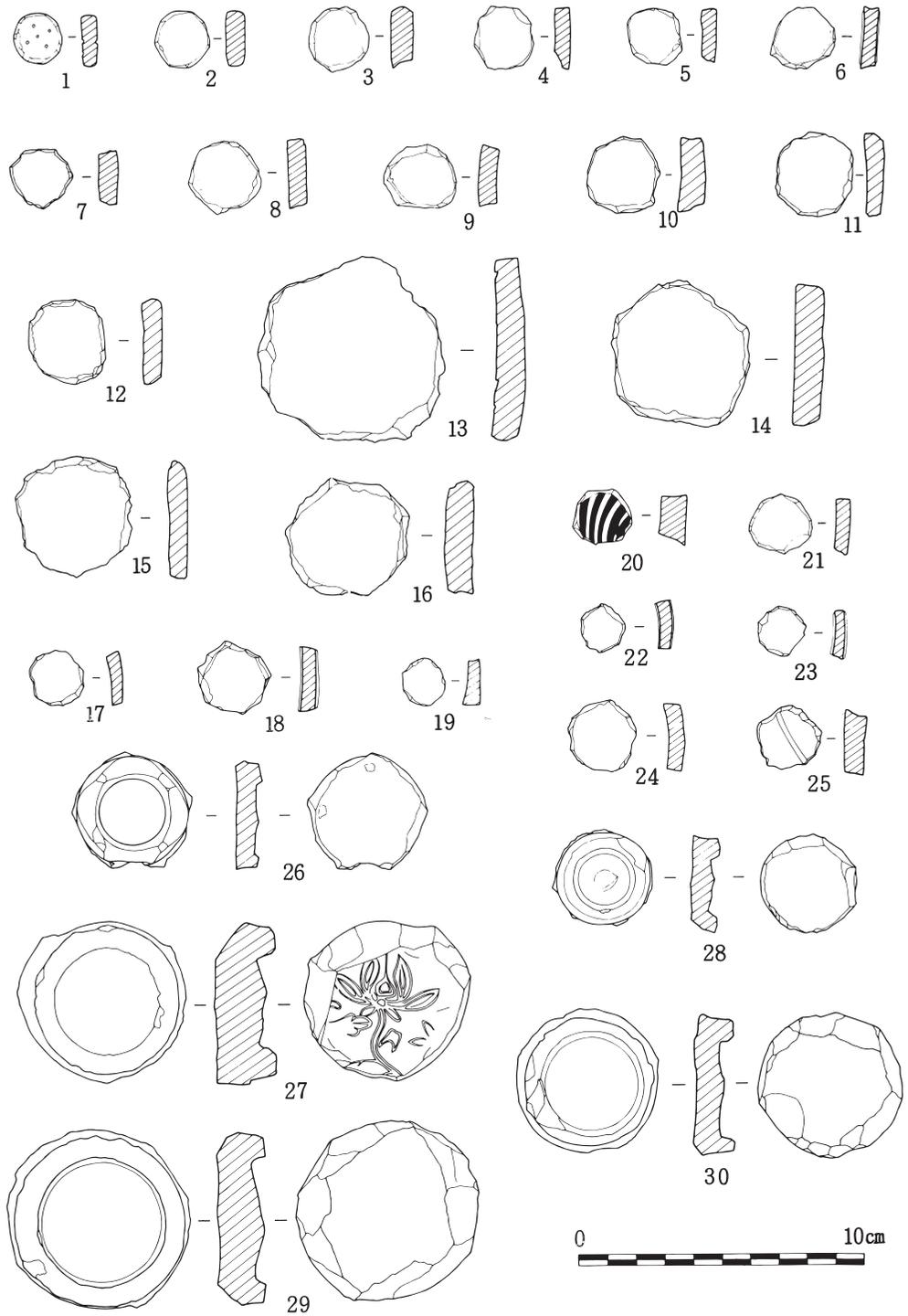


第40図 (PL. 56) 中世須恵器



第41図 (PL. 57) 土器 (1~6)、玉類 (7~20)

(原寸)



第42図 (PL. 58) 遊具 (1・2 石製 3~30 陶磁器片製)

23 貨 錢

貨錢は全部で24種類あり、時代の幅が大きい。判読可能なのが49枚、完形のものではあるが著しい磨耗により文字不祥で判読不明のが5枚、文字の部分々々についての確認はできるが全体的に不明のが15枚である。無文銭は中央孔を方形に穿つもので、4、5枚重ねて出土している。また、同種類の中でも径の大小に変化があったり、洪武通宝のように裏面に一銭、二銭、三銭の銘を有するものもある。以下、それぞれについて観察一覧表を掲げる。なお、判読には八重山博物館長坂名城泰雄氏の協力を得た。

第11表 貨 錢 一 覧 表

挿 番	図 号	貨 錢 名 (枚数)	年 代	初鑄造 (西歴)	直 径 (cm)	文字の 書 体	観 察 事 項
第43図	1	貨 泉 (1)	新	14	2.4	篆	完形品
"	2	五 銖 (1)	前漢～梁	B.C122～ A.D 502	2.3	"	「五」の文字の一部が欠損。 裏面は磨かれる。
"	3	開元通宝 (1)	唐	713	2.3	隸 書	「元」の文字が欠損、表裏面とも磨かれる。 外縁部に幅1mm程のギザギザの刻目がなされる。
"	4	大中通宝 (1)	唐	847	3.3	楷 書	外縁が僅かに欠損する。第5区N30～35
"	5	祥符元宝 (1)	北 宋	1009	2.5	隸 書	外縁の一部を僅かに欠損、歪みをもち表裏面とも磨かれる。
"		天聖元宝 (1)	北 宋	1023	2.5	楷 書	全体の約半分を損い、歪みによる突出面の文字が磨かれる。
"	6	皇宋通宝 (1)	北 宋	1039	2.5	"	表裏面ともに磨かれる。 完形品
"	7	熙寧重宝 (2)	北 宋	1068	2.8	篆 書	1枚は「重宝」の文字が欠損、表裏面とも磨かれる。
"	9	元豊通宝 (1)	北 宋	1078	2.9	行 書	裏面が磨かれる。 完形品
"	"	" (1)	"	"	2.5	"	表裏面とも磨かれる。 完形品
"	8	" (2)	"	"	2.9	篆 書	表裏面とも磨かれ、そのうちの一枚は中央の孔を輪花状にする。 完形品
"	10	元祐通宝 (1)	北 宋	1086	2.9	行 書	裏面は磨かれる。 完形品
"	"	" (1)	"	"	2.5	"	完形品
"	11	崇寧通宝 (2)	北 宋	1102	3.5	隸 書	1枚は「崇」の文字を残し、大部分は欠損する。
"	12	崇寧重宝 (4)	"	"	3.5	隸 書	「寧」、「宝」及び「重」の文字が欠損するのが2点、完形品が2点である。
"	14	政和通宝 (1)	北 宋	1111	2.9	篆 書	完形品

挿 番 号	貨 銭 名 (枚数)	年 代	初 鑄 造 (西 歴)	直 径 (cm)	文字の 書 体	観 察 事 項
第43図15	政和通宝 (2)	北 宋	1111	2.4	隸 書	表裏面ともに磨かれる。 完形品
” 16	宣和通宝 (1)	北 宋	1119	2.4	隸 書	「和」の文字が欠損する。裏面は磨かれる。
”	” (1)	”	”	2.9	”	裏面は磨かれる。 完形品
” 18	建炎通宝 (1)	南 宋	1127	2.9	隸 書	裏面は磨かれ一部に欠損する。
” 19	正隆元宝 (1)	金	1156	2.5	楷 書	「宝」の文字が欠損する。
” 17	大定通宝 (1)	金	1161	2.5	”	裏面に「酉」の銘がある。全面が磨かれる。 第4区Ⅱ25～30。
” 20	端平通宝 (1)	北 宋	1234	3.5	”	「端」の文字が欠損する。
” 21	嘉熙重宝 (1)	南 宋	1239	3.7	”	完形品 第3区Ⅱ30～35
” 22	至大通宝 (1)	元	1310	2.3	”	打撃により変形が生じ、外縁に刻目がみられる。第3区Ⅱ0～10
” 27	洪武通宝 (1)	明	1368	3.5	”	裏面に「三銭」の銘がある。
” 26	” (1)	明	1368	2.9	楷 書	裏面に「二銭」の銘があり、全面的に磨かれ 曲面となる。第3区Ⅱ35～40
” 25	” (2)	”	”	2.2	”	完形品
”	” (3)	”	”	2.4	”	1枚の裏面には文字があるが、不祥である。 完形品
”	” (4)	”	”	2.1	”	裏面に「一銭」の銘がある。
”	” (6)	”	”	2.3	”	完形品
” 28	永楽通宝 (1)	”	1411	2.5	”	一部が欠損する。
”	寛永通宝 (1)	日 本	1624	2.4	”	裏面が磨かれる。 完形品
” 29	無 文 銭 (2)	不 明	不 明	1.9	”	完形品が全んどである。

(松田)

24 銅 製 品

銅製品は鞋、八双金具、覆輪、責金具、切子頭、切羽、割ピン、棒状製品、飾紙、銅玉などがあり変化に富んでいる。主として武具に属するものが多い。また、「花押」など珍しいものも出土している。以下、それぞれについて記述する。

鞋 (第44図1~7)

鞋は全部で7点出土している。その内、笠鞋は6点で責鞋が1点である。笠鞋は大小の種類があり断面が明確な湾曲を有するものと、棒状で僅かの反りをもつものがある。いずれも鍍金が施されるもので、最も小さい標品は銅鍍化により表面の鍍金部分が剥離している。責鞋は1点の出土で、標品7は2つのリングの一方の部分で、繋ぎ部分が残存している。

覆輪 (第44図8~9、16)

8は長さ約6.2 cm、幅約5 mmの棒状のようなもので、上面からは先端部を丸くし縦位方向に深さ約4 mm、幅約3 mmの袢りがなされるもので端部の一方では山形状を呈し、先端は欠失する。袢り部分を除いては鍍金がなされるが無紋である。金具の縁に廻らすものとおもわれる。第5区Ⅲ5~10の出土。

9は板状のようなものを内側に折り曲げるもので、くの字状に曲がっている。両側は切断により全体的な形状はうかがえない。下端部は折り曲げによる合わせで半筒状を呈し、先端部は約5 mmの割り切れがみられる。8同様、表面に鍍金が施されるが無紋である。僅かに刷毛目状の細い条が縦位に走る。また、成形時点のものとおもわれる打痕点が全体にみられる。第3区AⅡ25~30の出土。16は厚さ0.5 mmの銅板を内側に折り曲げ半筒状にするもので、幅0.7 mm深さ0.3 mmの断面U字溝をつくるものである。両端部は欠失するが一方の端部近くに半円状の袢りがされ、他端部は欠失して不明である。標品は全体をU字状にする製品とおもわれる。

八双金具 (第44図10~11)

八双金具は2点でいずれも第2区1号落込みからの出土である。10は長さ約3.8 cm、幅約1.9 cm、厚さ約0.5 mmの長方形のもので両端は切断され原形を留めない。中に径約4 mmの孔が2つ穿たれ、一方の端部中央横位に約5 mmの切り込みがみられるが人工のものかは不明である。11は大小2つの孔を有するもので両端は欠失する。端部と中央部に折り曲げがみられるもので、端部は斜位に中央部は横位方向にそれぞれ折り曲げられる。表面に鍍金が施され、菊花状の花を配している。花文は鍍金をした後に細いポンチ状の器具で、表面から打ち込まれ打点が明瞭である。

責金具 (第44図12)

厚さ0.1 mm~0.2 mmの薄い銅板状のもので、刀の鞘を締めつける金具である。先端を幅0.5 mmの板線にしてカーブを描くもので、ほぼ中央部に如意頭様の装飾をこらし、更に延ばしながら鞘に周り込ませるものとおもわれる。第3区AⅡ25~30の出土。

切子頭 (第44図13)

方形1 cm厚さ8 mmのもので4面とも4角を三角形状に切り落とし、正面両側真ん中に径約5 mm、深さ約4 mmの孔を穿つ。孔はリングを装着するものである。また、底面の真ん中には割りピン状のものを差し込むものとおもわれるが、標品では約3 mmほど残存し先は欠損する。割りピン状の下部に鍍金が付随するようである。全形はうかがえないが冑に装着するとおもわれる。

切 羽 (第44図15)

刀の柄に付随する金具で、厚さ約1mm、長軸約3.8cm、短軸約2.4cmの楕円形のもので約1mm単位のギザギザの刻目を外周させる。長軸方向に幅約3mm～1cm、長さ約2.6cmの開口を設け、刀身が納まるようにしている。縦断面はほぼ直線状で僅かに傾斜する。比較的小さい刀とおもわれる。

割ピン (第44図17)

頭部を切子にして、厚さ1～2mm、幅3～5mmの1本の銅板を成形し2本の足をもたせる製品である。頭部側面は円形状の孔を開口させ、足部分の付け根を密着させる。足の1本は先端を欠き、もう1本は折れ曲がる。第2区I層の出土。

棒状製品 (第44図18～20)

3点の出土で、18は径約6mm、長さ約2.7cm、19は径約5mm、長さ2.4cm、20は径約4mm、長さ約1.7cmである。18、19とも頭部上位は叩頭による打撃でひしゃくれやや外方向に押し開かれる。20は厚さ約0.1mmの銅板を内に折り曲げるもので、曲げの接合部かよじれるようにして合わされその面に2条の線が走る。18—第3区II25～30。19、20—第5区II10～15。

飾 鋳 (第44図21)

長さ3.9cmの鋳で、頭部に径約1.2cmの円球板を伴うものである。球板の表面を鍍金にし、中央付近に径約2mmの丸い円が描かれる。胴部は厚さ約1mm、幅約4mm、長さ約3.4cmの銅板を2枚重ね合わせ1本とするもので、先端は直角に切断される。標品は調度品か甲冑などの飾鋳とおもわれる。

銅 球 (第44図22)

最大径2.3cm、重量45.3gの銅球である。球全面を叩打して円球にするもので、頂部中央近くは僅かにくぼみをもつ。底面をやや平坦に成形しているが用途は不明である。

花 押 (第44図25)

2.0cm×1.9cmの方形のもので上面中央に高さ約8mmの鈕を設ける。鈕は台形状を呈し、中に径約2mmの小孔を開け先端を欠損する。小孔は紐を通すものとおもわれる。上面には作製時のものとおもわれる細い条が縦横にみられる。また、底面には径1.8cmの円を浮彫り、円内に文字が彫られる。第3区II30～35の出土。

そ の 他 (第44図14)

厚さ約0.6mmの銅板を薄く圧延し半球状にしたもので鈴に似る。全体的な形状はうかがえないが下半部に受け身をもつものとおもわれる。直径約2.8cmで肩から頂部にかけてカーブを持ち、頂部に小孔を穿ち中に割ピンを通し固定している。割ピンは厚さ約1mm、幅2～3mmの板線状のもので先端部にやや丸味をもたせ頭部を円形に突き出し、中を開口している。孔を有することから紐を通す作用をするものとおもわれる。第3区II15～20の出土。(松田)

25 鉄 製 品

志慶真門郭出土の鉄製品は刀子、鏃、鋏、釣針、鎌、鉄球、釘などである。これまでに他のグスクからの出土例のないものもあり、その種類は変化に富む。

特に鏃の数が多ことから志慶真門郭内には武装集団の居住が想定される。以下、各出土品についてそれぞれ記述する。

(1) 刀子 (第45図1～8)

刀子は8点の出土である。刃部はいずれも両刃を有するものとおもわれるもので、刃部の先端部で外反りになるものⅠ類と、刃部中央付近で外反りになるものⅡ類とに分けられる。Ⅰ類は切先部近くで外反りになり、峯をほぼ直線状に造り比較的長身である。Ⅱ類は刃部の中央付近で外反りをなし、峯部を同様にやや反りをもつもので比較的短身のものである。

刃部の反り具合、長短の差、峯を直線状に造るものとやや外反りになるものとの相違から工具としての機能がそれぞれにあったものと考えられる。以下、それぞれについて記述する。

Ⅰ類 (第45図1～3)

1は全長約20.7cmで、身部約15.3cm、茎部約5.4cm、最大刀身幅約1.9cm、厚さ5mmである。身部先端から約3cmで反り、切先を造るもので峯は直線になる。刀子としてはやや大きいものである。刃部断面は逆三角形を示す。茎部の差込み先端部は欠損するが身部基部から先端にかけてやや傾斜をもたせ直線にするもので、断面は長方形を示す。ほぼ原形をとどめる好標品である。

2は全長約13.8cmで、身部約12.5cm、茎部約1.3cm、最大刀身幅約1.5cm、厚さ4mmである。身部はほぼ原形に近く僅かに先端部が損失している。峯の中央から先端寄り及び基部近くで錆ぶくれが目立つ。茎部は僅かに残存するが大部分は欠損している。地金がしっかりした製品である。

3は全長約12.5cmで、身部約8.5cm、茎部約4cm、最大刀身幅約1.7cm、厚さ約4mmを測る。身部中央から切先部にかけて刃こぼれがみられ、峯中央部と切先部に地金の腐蝕が著しく中空状を呈している。茎部は錆ぶくれがみられ身部との境に刃区がある。劣化が著しい標品である。

Ⅱ類 (第45図4～8)

4は全長約8.1cmで、身部約5.6cm、茎部約2.5cm、最大刀身幅約1.3cm、厚さ約4mmを測るものではほぼ原形に近い好標品である。僅かに峯の先端部と茎部に錆ぶくれがみられる程度で地金はしっかりしている。身部と茎部の境に棟区と刃区をもつもので、身部断面は逆三角形になり、茎部断面は長方形状を呈する。

5は全長約6.2cm、身部約3.2cm、茎部約3.0cm、最大刀身幅約1.5cm、厚さ2mmを測る。切先部は欠けるもので地金はしっかりしている。茎部は区をつくらず、身部から茎部にかけてはゆるや

かな傾斜をもたせる。茎部の先端は欠損する標品で、身部断面は逆三角形、茎部断面は長方形を示す。

6は全長約10.2 cm、身部約8.8 cm、茎部約1.4 cmで最大刀身幅約2.0 cm、厚さ5 mmを測る。全体的に錆ぶくれがみられ身部と茎部の両端をそれぞれ欠失する。身部中央付近から外反りになり、茎部と身部の境に僅かばかりの刃区を有する。地金はしっかりしている。

7は全長約10.6 cm、身部約9.0 cm、茎部約1.6 cmで最大刀身幅約2.2 cm、厚さ3 mmを測るものでやや切出しナイフに似る。身部と茎部の境に僅かの刃区を持ち地金がしっかりする。断面は逆三角形をなしている。

8は全長9.1 cm、身部約6.8 cm、茎部約2.3 cm、最大刀身幅約1.5 cm、厚さ約2.5 mmを測る。やや細身で全形がよくうかがえる好標品で、地金はしっかりしている。錆ぶくれの部分は中空になり、身部、峯部ともに外反りをなす。身部と茎部の境に刃区を有している。

(2) 鉄鎌 (第45図9)

全長約6.5 cm、幅1.8 cm、厚さ2.5 mmで刃先は僅かに欠失し、柄部は折れた痕がみられ約6 mm程残存する。形としては現代の鎌と変わらないもので、背を孤状になし刃は両刃で中央部に刃こぼれがみられる。農耕具に供したものと考えられる。

(3) 釣針 (第45図10)

先端部と頭部の両端とも欠損するものであるが釣針の形ちがよくうかがえる標品である。先端部に返し釣針の鉤を持たなく断面は四角形である。頭部はよじれるが先端で丸い円を造るものとおもわれる。

(4) 鋏 (第45図11)

1点の出土である。全長19.7 cmで刃部は約9.7 cmである。支点をほぼ中央に置き対称形をなすもので、取手部分は楕円形を造り両先端部に径約2 mmの真鍮のリングが巻かれている。標品は現代のものとは異なる種子鋏の類である。

(5) 鉄球 (第44図23～24)

最大径1.5～1.6 cm、重量6.6 g及び6.8 gを測る鉄球が2箇出土している。鉄錆により球全面に亀裂が走る。球面の部分に平面をもつ面もあるが全体を円球にするもので鉄砲の弾丸と考えられる。第3区AⅡ5～10の出土。

(6) 鉄鏃 (第46～47図)

鉄鏃は全部で27点の出土でⅠ類、Ⅱ類に分けられる。形状から鏃身が変形菱形を示し刃先が鋭角で、茎部の断面が円形、鏃身断面を楕円状にして比較的鏃身が長いものをⅠ類、鏃身基部から刃先にかけてやや平行を保ちながら刃先が外側に開き、茎部の断面が円形、鏃身断面が長方形で身部が比較的短く刃先を方形にしてバチ形状になるものをⅡ類とした。これまでに他のグスクからの出土例もあるが、それぞれについては観察一覧表に掲げる。

第12表 鉄 鏃 観 察 表

挿図 番号	類別	長さ (cm)	刃先幅 (cm)	重量 (g)	観 察 事 項
第46図 1	Ⅱ	4.9	1.1	8	茎部と身部との境目に抉りを有するもので、茎部の途中から欠損する。地金はしっかりしているが、刃こぼれがみられる。茎部から身部にかけてヒビ割れが走る。
第46図 2	Ⅱ	5.2	1.2	8	茎部と身部の境目に抉りがみられるが、境目に中空を有する。全体的に地金はしっかりしている。刃こぼれがみられる。
第46図 3	Ⅱ	5.4	1.3	10	刃先の両側が内側にめくれるもので、全面にヒビ割れがみられる。茎部と身部の境目に抉りを有する。茎部の先端を欠損する。
第46図 4	Ⅱ	5.0	1.4	8.5	茎部の先端が僅かに欠損するが全体的にしっかりした標品である。茎部と身部の境目に抉りを有する。身部に僅かのヒビ割れがみられる。
第46図 5	Ⅱ	5.8	1.3	6.5	刃先の約半分が欠損するもので欠損部からの錆による劣化がみられる。茎部と身部の境目に抉りを有する。茎部の先端は欠損し、縦位にヒビ割れがみられる。刃先がやや内側に傾斜する。
第46図 6	Ⅱ	4.9	1.0	6.5	茎部と身部の境目に抉りを有する。身部の基部は錆ぶくれが目立つ。茎部は途中より欠損するが地金はしっかりしている。刃こぼれが著しい。
第46図 7	Ⅱ	5.6	1.6	9	茎部と身部に錆ぶくれが目立つもので、刃こぼれが著しい。茎部と身部に抉りがみられヒビ割れが縦位に走る。地金はしっかりしている。
第46図 8	Ⅱ	6.2	1.2	7.5	茎部と身部の境目に抉りを有するもので、茎部の先端部を欠損する。茎部と身部にヒビ割れと中空が生ずる。
第46図 9	Ⅱ	6.0	1.1	9	全体的に錆ぶくれとヒビが縦位に走り、刃先は欠損する。身部の先端部の地金の劣化が著しい。身部と茎部に抉りを有する。 第4区Ⅱ0-5
第46図 10	Ⅱ	6.4	1.1	8.5	茎部と身部に抉りを有する。茎部はほぼ原形に近く全体がよじれた形状を示し断面は正方形になるが僅かの錆ぶくれがみられる。身部中央部に錆ぶくれをもち刃先は欠損する。
第46図 11	Ⅱ	5.5	—	8	刃先がほとんど欠損するが地金はしっかりする。茎部と身部に抉りがみられ、茎部の先端は欠損する。
第46図 12	Ⅱ	5.0	1.5	10	茎部を僅かに残し、欠損する。身部は抉りの近くから中央部にかけて劣化する。刃先の一方は錆ぶくれと中空がみられる。

挿図 番号	類別	長さ (cm)	刃先幅 (cm)	重量 (g)	観 察 事 項
第 46 図 13	Ⅱ	6.2	1.1	6	茎部と身部の境目に挟りを有する。茎部の先端を僅かに欠損する標品で地金はしっかりしている。刃こぼれがみられ極少の中空を生じている。 第 5 区 Ⅲ 15-20
第 46 図 14	Ⅱ	6.8	1.3	10	全体的にしっかりした標品で茎部の先端と身部と茎部の境目に錆ぶくれが生じ、ところどころに中空状態がみられる。 第 3 区 Ⅱ 20-25
第 47 図 1	Ⅱ	6.7	1.2	11.5	刃先が僅かに欠損するもので、鍔身の基部に錆ぶくれが目立つ。茎部先端は欠損。鍔身と茎部との境目に挟りが明瞭で全面縦位にヒビ割れが走る。 第 5 区 Ⅳ 40-45
第 47 図 2	Ⅱ	6.3	1.3	15	茎部の先端が欠損するが、地金はしっかりしている。全体的に錆ぶくれがあり小さな中空状態を示している。
第 47 図 3	Ⅱ	6.6	1.2	10.5	刃先の欠損が目立つもので茎部の先端は折れるものであるが全体的にしっかりしている。身部と茎部の境目には挟りがみられる。
第 47 図 4	Ⅱ	7.6	1.4	11	ほぼ原形に近い標品で身部、茎部ともにしっかりしていて境目の挟りが顕著である。茎部の断面が四角形を示す。茎部に錆による中空が僅かにみられるが地金はしっかりしている。刃先にカーブをもつ。
第 47 図 5	Ⅱ	7.8	1.2	12	全体的にしっかりしていて身部と茎部の境目の挟りが顕著である。身部と茎部に錆がみられる。茎部の中央寄りから、先端部にかけてカーブをもち刃先に刃こぼれがみられる。
第 47 図 6	Ⅱ	6.1	1.3	11.5	茎部を僅かに残すが、地金はしっかりしている。刃こぼれがみられる。身部と茎部の境目に挟りがあるが、身部が比較的長いのが特徴である。 第 4 区 Ⅱ 0-5
第 47 図 7	Ⅱ	8.9	1.4	21	全体的に錆ぶくれがあるが地金はしっかりしている。身部が長く茎部は比して短い。茎部と身部の境目に挟りがみられる。茎部の先端は僅かに欠損、刃部にやや丸味を持ち刃こぼれがみられる。 第 4 区 Ⅱ 15-20
第 47 図 8	Ⅰ	5.8	0.2	9	茎部の先端が欠損するが、茎部、身部ともに地金がしっかりしている。茎部は欠損のためなく、身部はハートの形状を示す。刃先の先端部を僅かに損うが鍔身はほぼ原形に近い標品である。
第 47 図 9	Ⅰ	7.0	0.1	9	鍔身の形状がうかがえる好標品で、茎部を僅かに残し、先端部を欠損する。茎部と身部の境目には挟りがある。刃部はV字状を呈する。全体縦位方向にヒビ割れが走るが地金はしっかりする。刃先を鋭利にする。
第 47 図 10	Ⅰ	6.7	0.1	8.5	刃部がやや変形を示すもので、刃部の錆のヒビ割れが斜位に走り中空になる。茎部を僅かに残し欠損している。身部の基部は錆ぶくれがみられ縦位にヒビ割れが走る。茎部と身部の境目の挟りが僅かにみられる。刃先を鋭利にする。
第 47 図 11	Ⅰ	6.5	0.4	11	刃部がやや丸味になるもので、刃先が僅かに欠損する。身部と茎部の境目に挟りを入れるもので、茎部を僅かに残し欠損する。身部の中央部がややくびれ、基部は錆ぶくれのためかふくらみをもつ。ヒビ割れが縦位に走るが地金はしっかりし

挿図 番号	類別	長さ (cm)	刃先幅 (cm)	重量 (g)	観 察 事 項
					ている。 第3区Ⅱ 35-40
第47図 12	I	4.8	0.4	7	茎部が僅かに残存するもので、身部全体に錆ぶくれがみられるが基部近くでコブ(瘤)状のふくらみをもつ、刃部全体が丸味をもち、刃先も同様に丸味を帯びる。地金はしっかりしている。
第47図 13	I	4.4	0	10.5	身部の途中から茎部にかけて欠損するもので地金はしっかりしている。一部に錆による中空とヒビ割れがみられる。刃先は鋭利をもつ。

(7) 鉄釘 (第48・49図)

鉄釘は細片を含めると相当の出土で、ここには38点を選んである。大小長短と変化がありそれぞれに用途があったものとおもわれる。形から頭部を叩き平坦にして折り曲げるものが多くすべて角釘である。第48図9、10のように極端に大きく、現代の船釘に類似するものもある。

(松田)

26 石 器

石器は石斧、凹石、砥石、短冊型護符、短冊型石製品、石錘などが検出された。なかでも砥石、短冊型護符、短冊型石製品などが多く検出された。

(1) 石斧 (第50図1・2)

石斧は2点だけである。1は沖縄貝塚時代中期の代表的な石斧で、2は後期の貝塚からよく検出される石斧である。城内に持ち込んだものと考えられるが、この石斧が実際に使用されたかについては明らかでない。

(2) 凹石 (第50図3)

1点だけ検出された。これも貝塚から多く検出されるもので、石斧と一緒に持ち込まれたものと考えられる。

(3) 砥石 (第51図1~10)

かなり頻繁に使用されたようで、三面または四面が砥面として使用されているのが多く、湾曲する程磨滅している。砥面には刃痕が見られるのが多い。柱穴の楔石として使用されていたのが3点

あった。石質は頁岩、細粒砂岩なども見られるが、ほとんどは琉球石灰岩である。琉球石灰岩ではあるが、砥面は現在使用している砥石の砥面と肉眼では区別できない程類似している。

(4) 短冊型護符 (第52図1～4)

護符だと断定する資料は何もないが、一応護符と仮称しておく。頭頂部と両側面に小孔を穿ち、3つの小孔は繋がっている。全面とも丁寧に研磨されており、紐を通して携帯するものと考えられる。なお、板状石を両面から摩り切って短冊型に造っていくことを示す資料が1点検出された。摩り切ってから穿孔すると考えられるが、穿孔の方法は明らかでない。

(5) 短冊型石製品 (第51図5～9)

短冊型護符より小型で、小孔のない短冊型製品である。全面とも丁寧に研磨されているが小孔がないところから、短冊型護符とは明らかに用途が異なる。しかし、その用途については不明である。

(6) 石 錘 (第52図10～17)

石錘としたものには2種類ある。10～12は全面研磨され、1つの小孔をもつ扁平な石錘である。13～17は縦断面が長楕円形状を呈する落花生型石錘である。側面を一周する小溝と胴部を一周する小溝があり、糸を結ぶための小溝と考えられる。釣針や綱の錘なども考えられるが、現在のところ用途不明である。

(7) その他の石器 (第50図4～6)

4は砥面と刃痕があることから砥石であったと考えられる。その砥石を両側面から打欠して挟りを入れ、二次使用したものと考えられる。挟り部分を紐で結んで石錘として使用することもできるが、実際にはどのように使用されたか明らかでない。5は滑石で、全面研磨されているが用途不明。6は半分欠損しているが、つき臼形の小型石製品である。雁首のような形をしているが、雁首としては大きすぎるように思われる。

石質を同定した大城逸朗氏はつぎのようにコメントしている。

- ①砥石として使用した岩石は琉球石灰岩で、本部町～今帰仁村の海岸線沿いに分布し、露頭が認められる。
- ②細粒砂岩としたものは、微細な石英粒を主体とし、ウンモ片やその他の微小鉱物を含むもので、一般には沖縄南部島尻層中の細粒砂岩（ニービ）によく似ている。しかし、同一のものであるといえる確証はない。
- ③結晶片岩類は、沖縄北部一帯に分布する名護層に類似のものがあり、そこに起源をもとめるのは可能である。

④斑レイ岩や輝緑岩は貝塚時代の遺跡に特有なものであるが、沖縄においては、その露頭を確認し難く、おそらく県外からの持ち込みではないだろうか。

第13表 石器観察表

挿図番号	器種	法 量				石 質	備 考
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
第50図1	石 斧	8.8	4.4	2.15	151	斑レイ岩	全面磨製の両刃石斧でやや片刃的、沖縄貝塚中期の石斧 2区Ⅱ0~10
2	〃	10.4	6.75	2.0	280	輝 緑 岩	全面磨製の両刃石斧で扁平。沖縄貝塚後期の石斧 5区Ⅰ
3	凹 石	10.3	10.5	5.5	1,100	琉球石灰岩	両面は研磨されている。両面に凹あり。3区Ⅱ5~10
4	不 明	18.2	10.9	3.2	612	砂 質 片 岩	砥石に挟りを入れて2次使用。3区 pit
5	〃	5.2	3.3	1.8	58	滑 石	四面は研磨されている。砥石(?) 4区Ⅱ10~15
6	〃				22	細 粒 砂 岩	半分欠損。内外に小量媒付着。雁首(?) 4区Ⅱ5~10
第52図1	砥 石	10.3	5.9	2.6	260	頁 岩	両面砥面。一面に数本の刃痕。3区Ⅱ25~30
2	〃	7.8	3.9	2.1	80	琉球石灰岩	両面砥面。4区Ⅱ5~10
3	〃	6.5	4.5	2.3	70	〃	四面砥面。一面に数本の刃痕。磨滅が強い。3区Ⅱ60
4	〃	5.2	2.7	2.1	52	〃	四面砥面。磨滅が強い。5区Ⅰ
5	〃	7.2	4.2	3.1	152	〃	四面砥面。二面に刃痕。3区35~40
6	〃	9.3	5.0	4.0	251	〃	四面砥面。二面に刃痕。3区 pit
7	〃	17.9	5.5	4.6	678	〃	三面砥面。磨滅が強い。1区Ⅱ
8	〃	15.8	12.6	3.6	1,090	細 粒 砂 岩	二面砥面。3区 pit
9	〃	12.1	10.9	3.3	600	琉球石灰岩	三面砥面。一面に刃痕。1区Ⅰ
10	〃	15.4	9.6	5.7	810	〃	三面砥面。磨滅が強い。3区 pit
第52図1	短冊型 護 符	6.4	1.75	1.25	25	砂 質 片 岩	頭部欠損。全面研磨。2区Ⅱ10~20
2	〃	7.0	1.4	0.7	12	〃	〃 〃 3区Ⅱ55~60
3	〃	4.55	1.6	0.9	13	細 粒 砂 岩	下部欠損。 〃 3孔有り 5区Ⅱ
4	〃	5.7	1.6	1.2	21	砂 質 片 岩	〃 〃 3孔有り 3区Ⅱ

挿図番号	器種	法 量				石 質	備 考		
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)				
第52図5	短冊型 石製品	5.1	1.8	0.6	10	黒色片岩	下部欠損。全面研磨。2区pit		
6	”	2.7	1.2	0.95	8	砂質片岩	完形品	”	3区Ⅱ20~25
7	”	4.45	1.2	0.7	9	”	完形品	”	1区Ⅱ
8	”	4.45	0.8	0.75	5	”	下部欠損	”	1区Ⅰ
9	”	4.5	0.9	0.8	4	”	”	”	1区Ⅱ
10	石 錘	3.0	2.25	0.9	11	石墨片岩	”	”	3区Ⅱ0~10
11	”	2.9	2.85	0.4	122	黒色片岩	完形品	”	4区Ⅱ20~25
12	”	2.2	2.2	0.55	5	石墨片岩	完形品	”	3区Ⅱ30~35
13	落花生 型石錘	3.35	1.4	0.5	1	砂質片岩	縦に半分欠損。全面研磨。3区Ⅱ		
14	”	3.4	1.15	1.0	9	シルト岩	完形品	”	3区Ⅱ40~45
15	”	3.45	1.3	1.15	8	砂 岩	”	”	3区Ⅱ20~25
16	”	3.05	1.15	0.95	5	砂質片岩	”	”	3区Ⅱ
17	”	3.2	1.0	0.7	3	”	”	”	3区Ⅱ10~15

(金武)

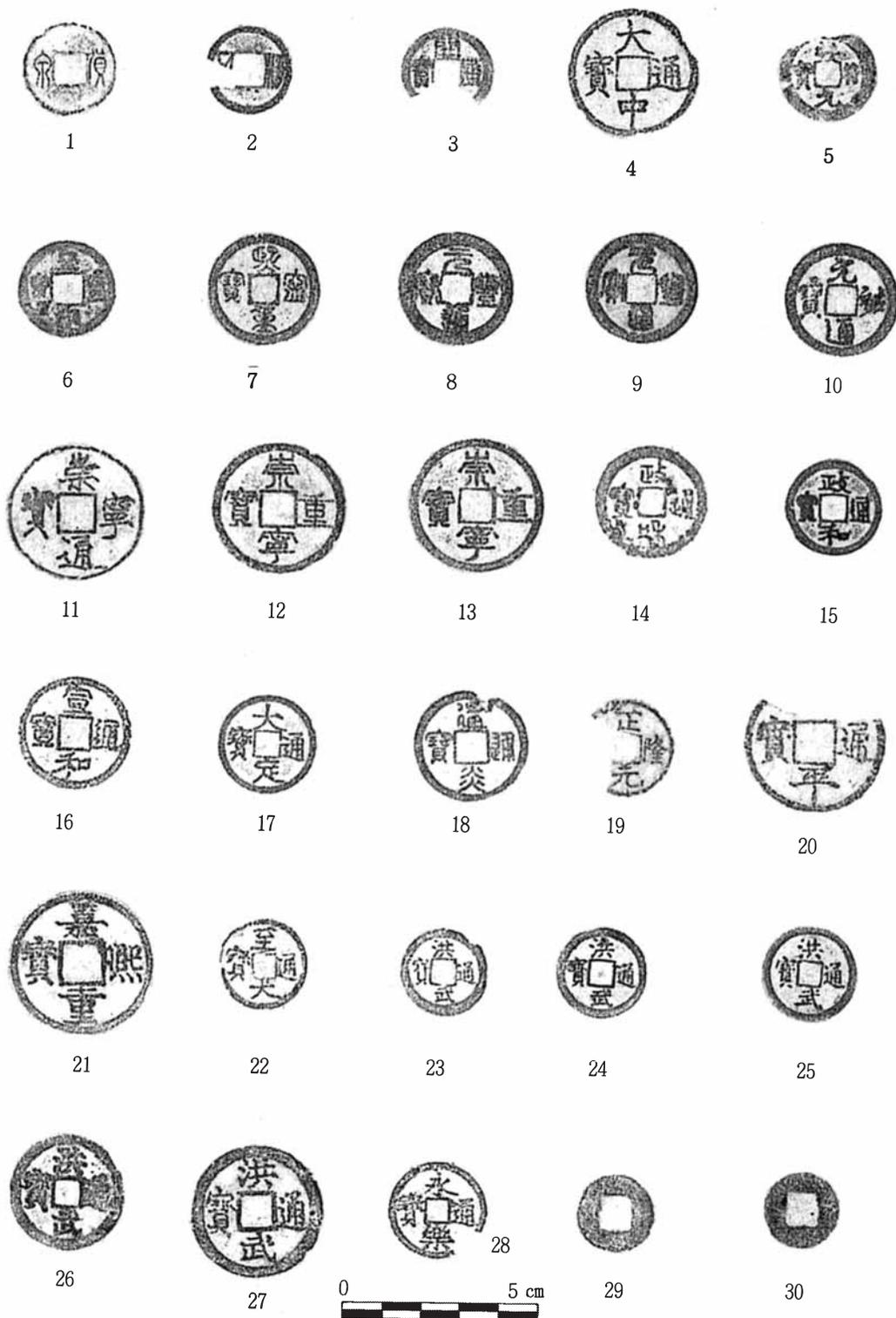
27 骨 製 品

(第52図18~20)

装飾品と考えられるものが3点検出された。18と19がサメ、20がエイの仲間の骨を利用したもので、いずれも脊椎骨の臼状凹部中央に孔を穿いた製品である。18と19は穿孔のほかにも人為的加工を認めないが、20は周縁にも入念な研磨が施こされている。

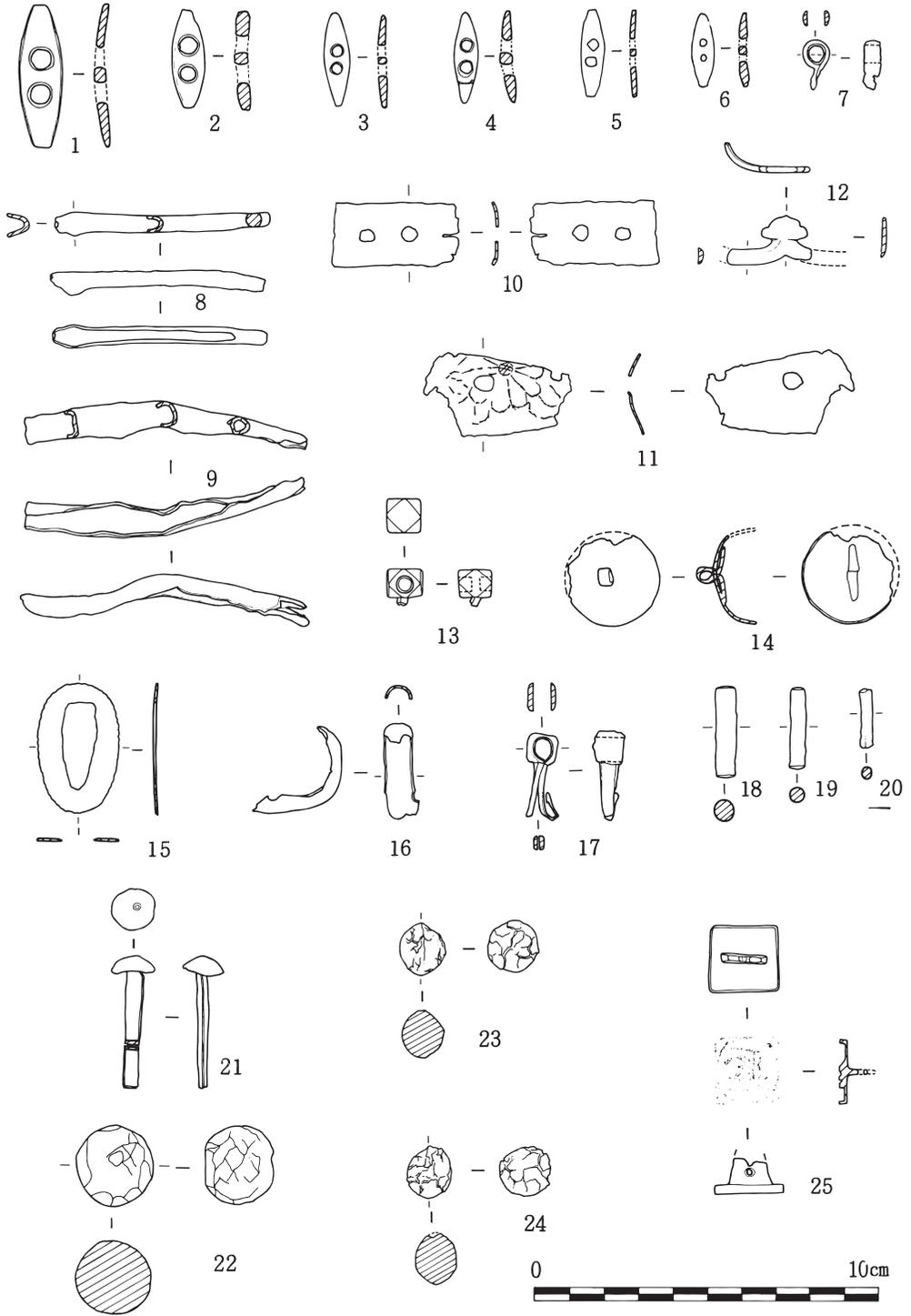
18: 第5区Ⅳ層5~10cm、19: 第3区Ⅱ層30~35cm、20: 第5区pit内の出土である。

(宮里)

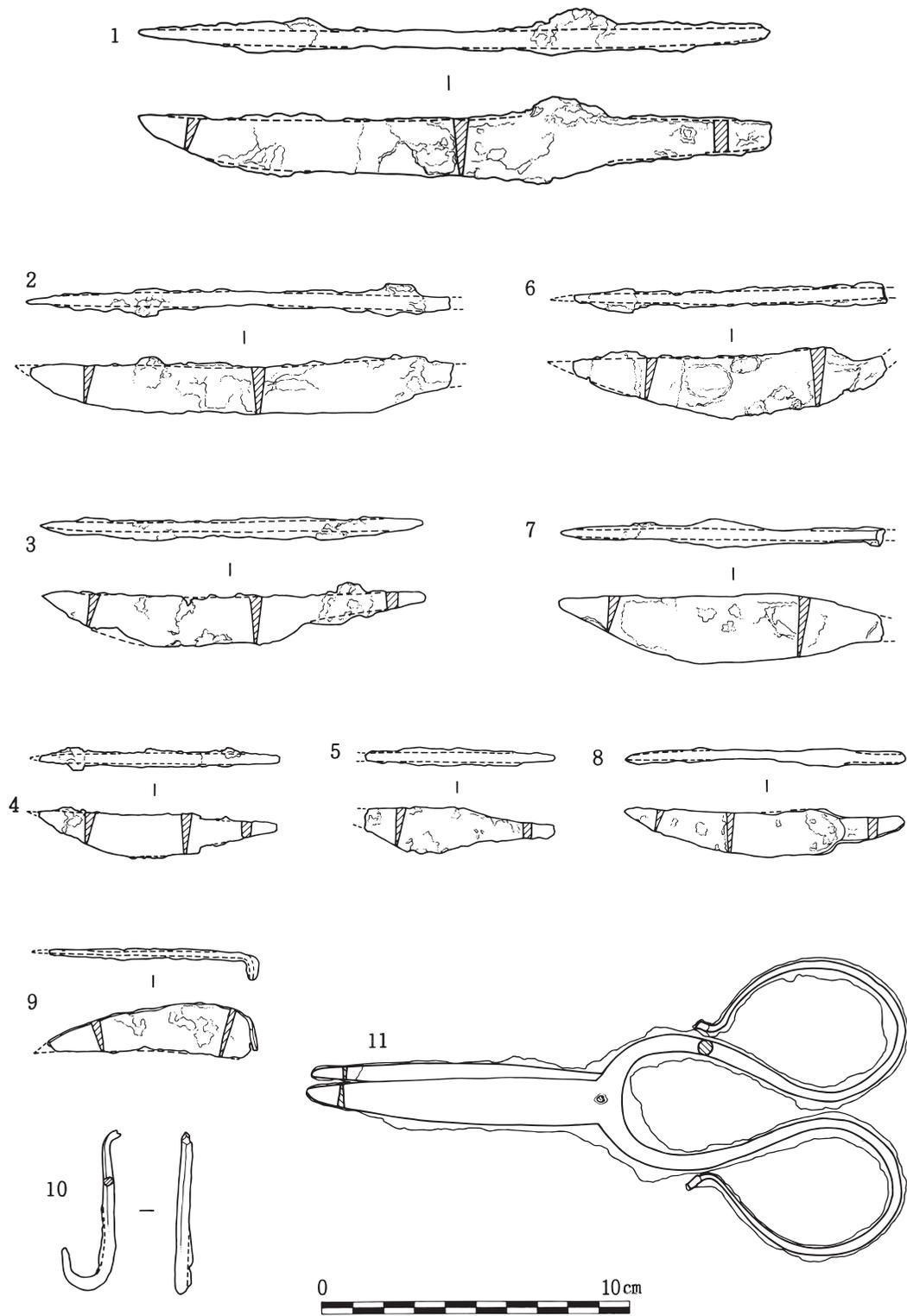


第43圖 (PL. 59)

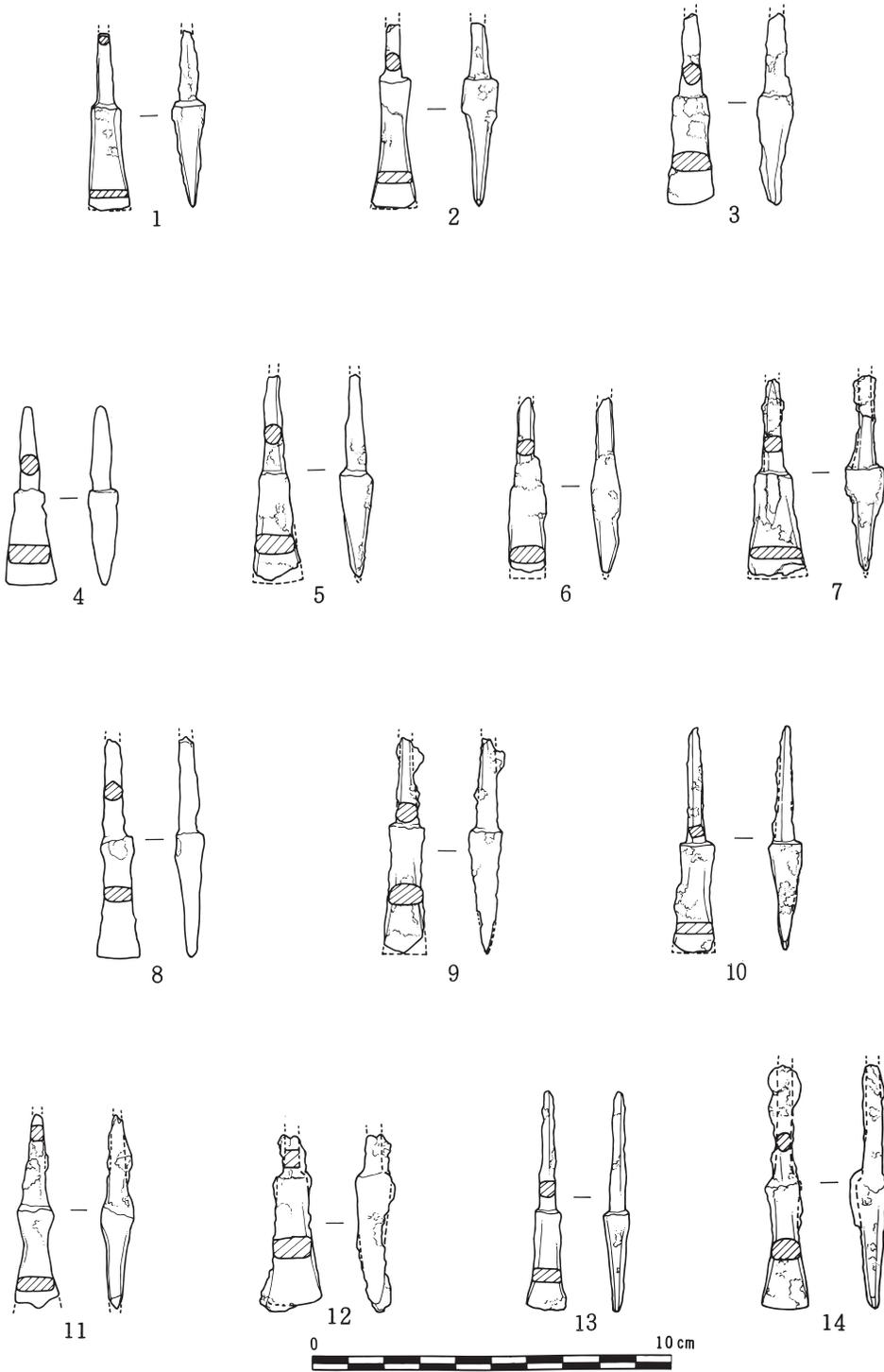
貨 錢



第44图 (PL.60) 銅製品

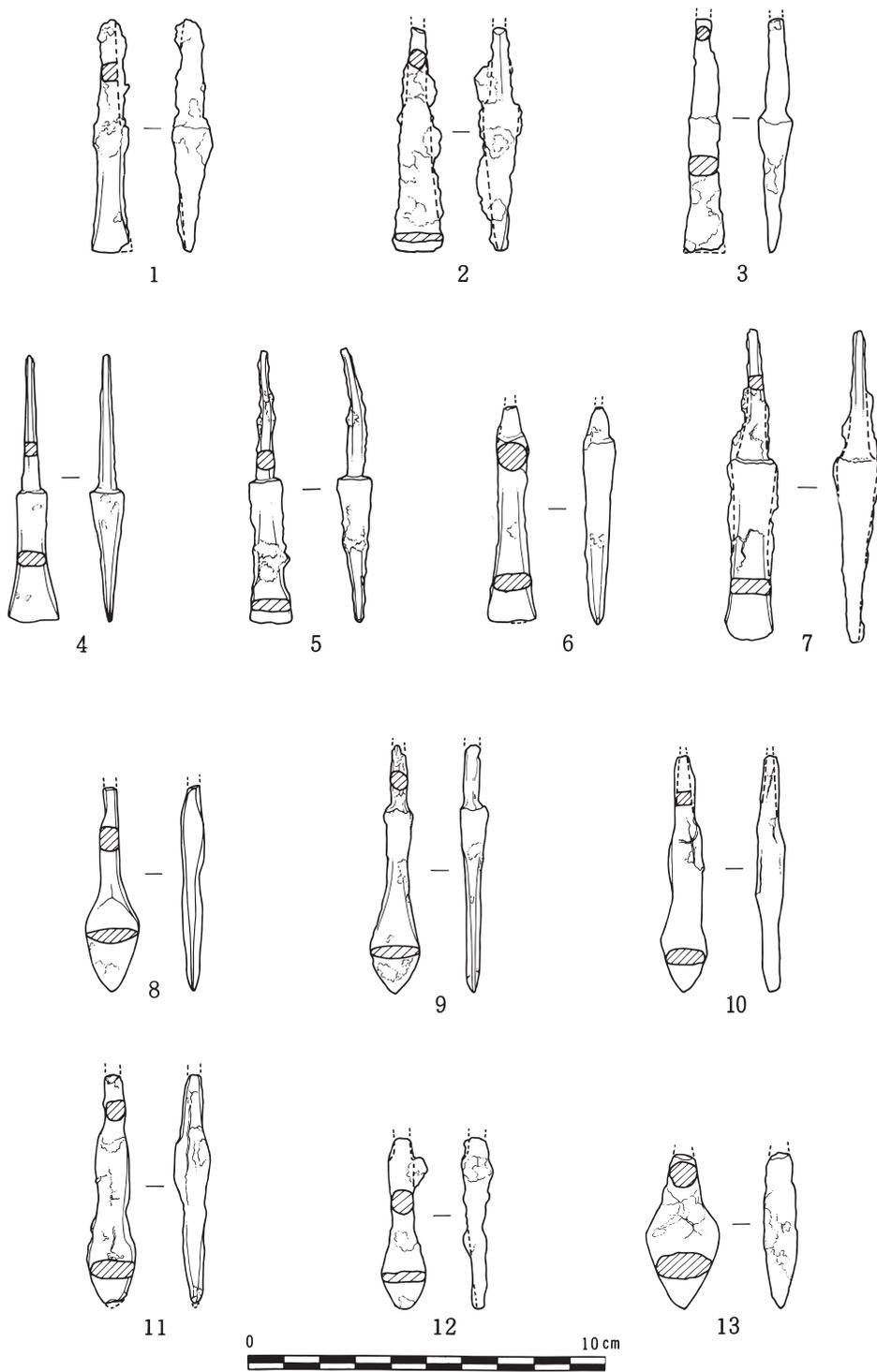


第45図 (PL. 61) 鉄製品 (1~8は刀子、9は鎌、10は釣針、11は鉗)



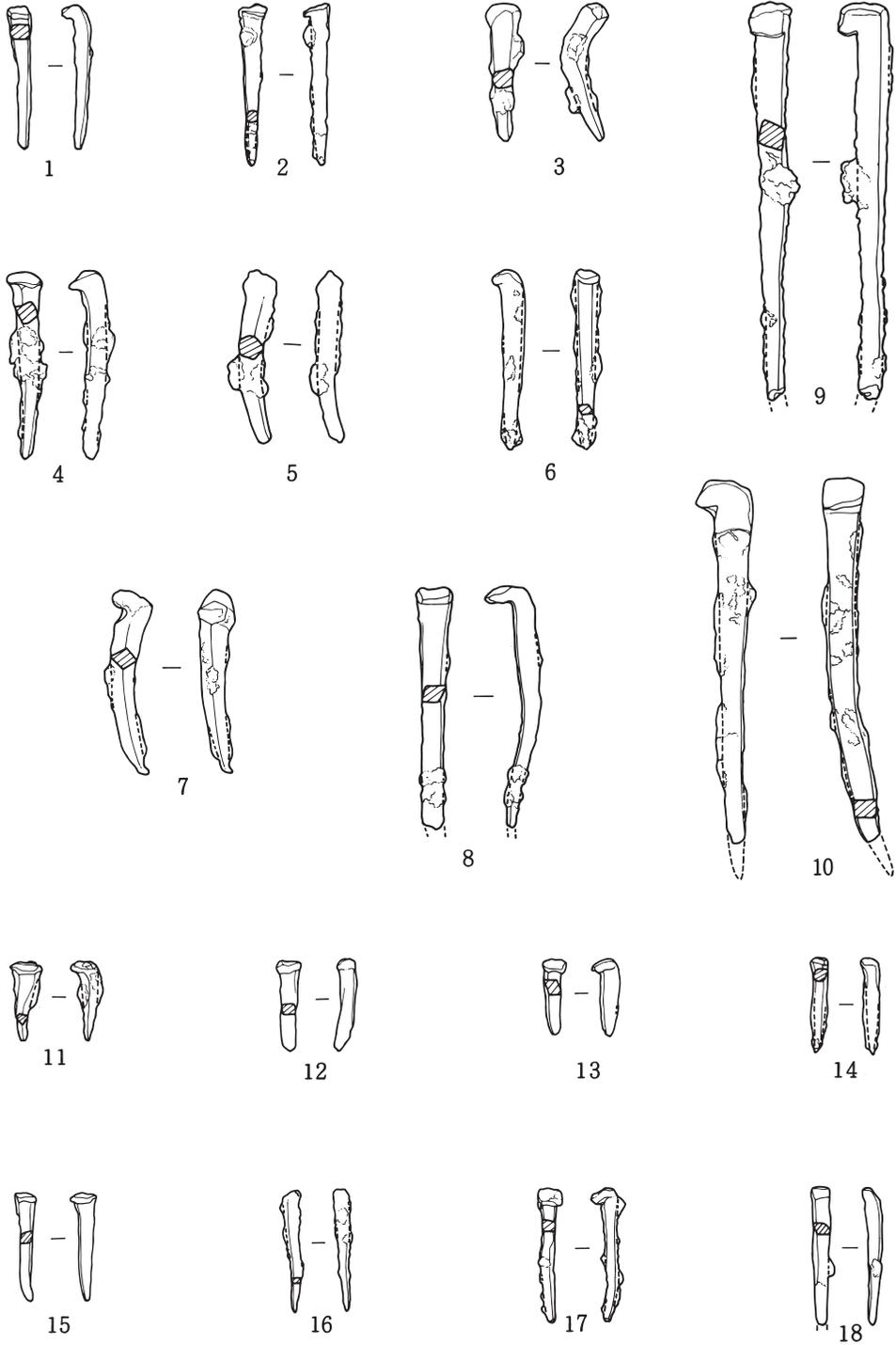
第46図 (PL. 62の1~14)

鉄 鋳



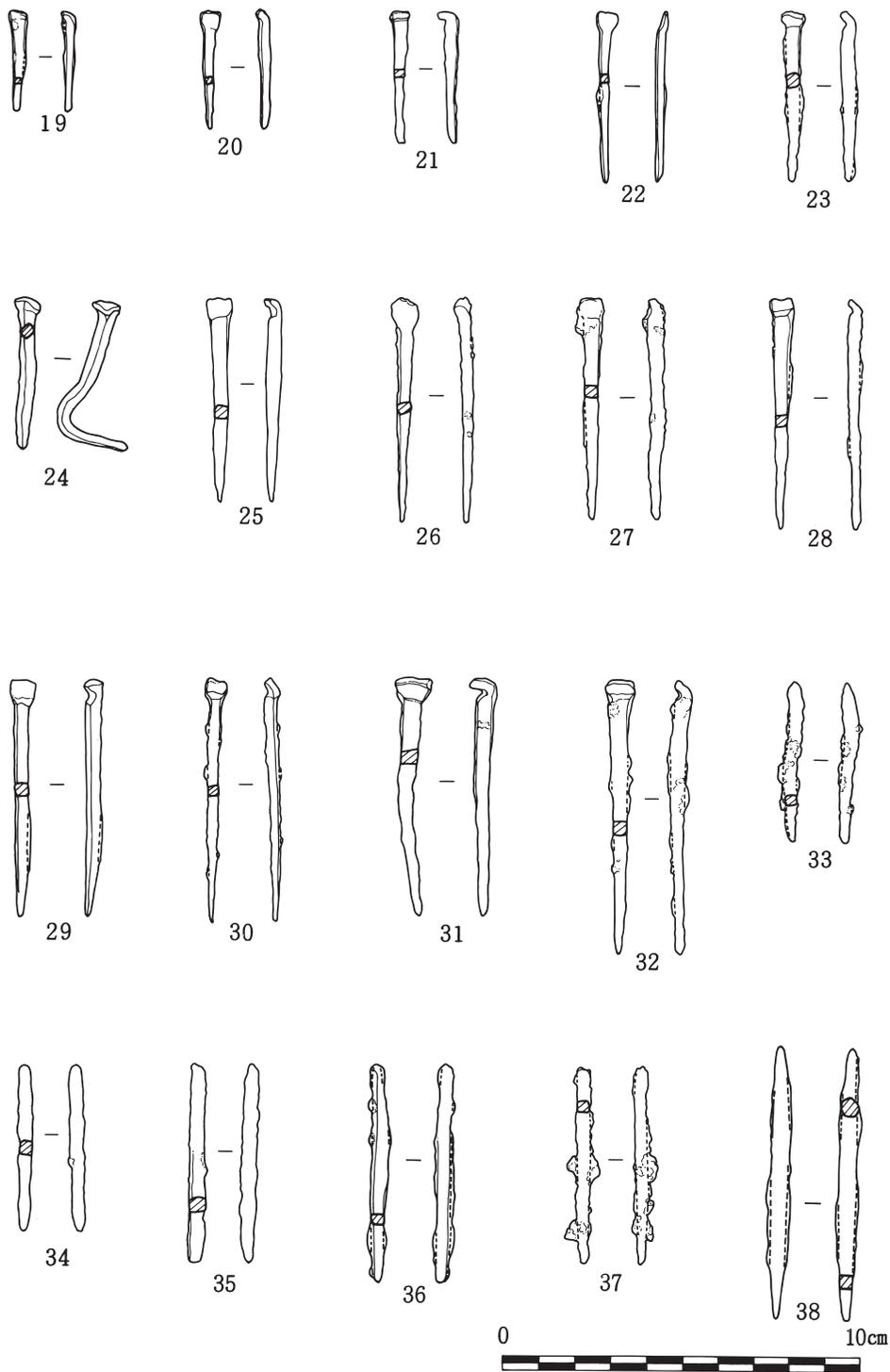
第47図 (PL.62の15~20)

鉄 鏃

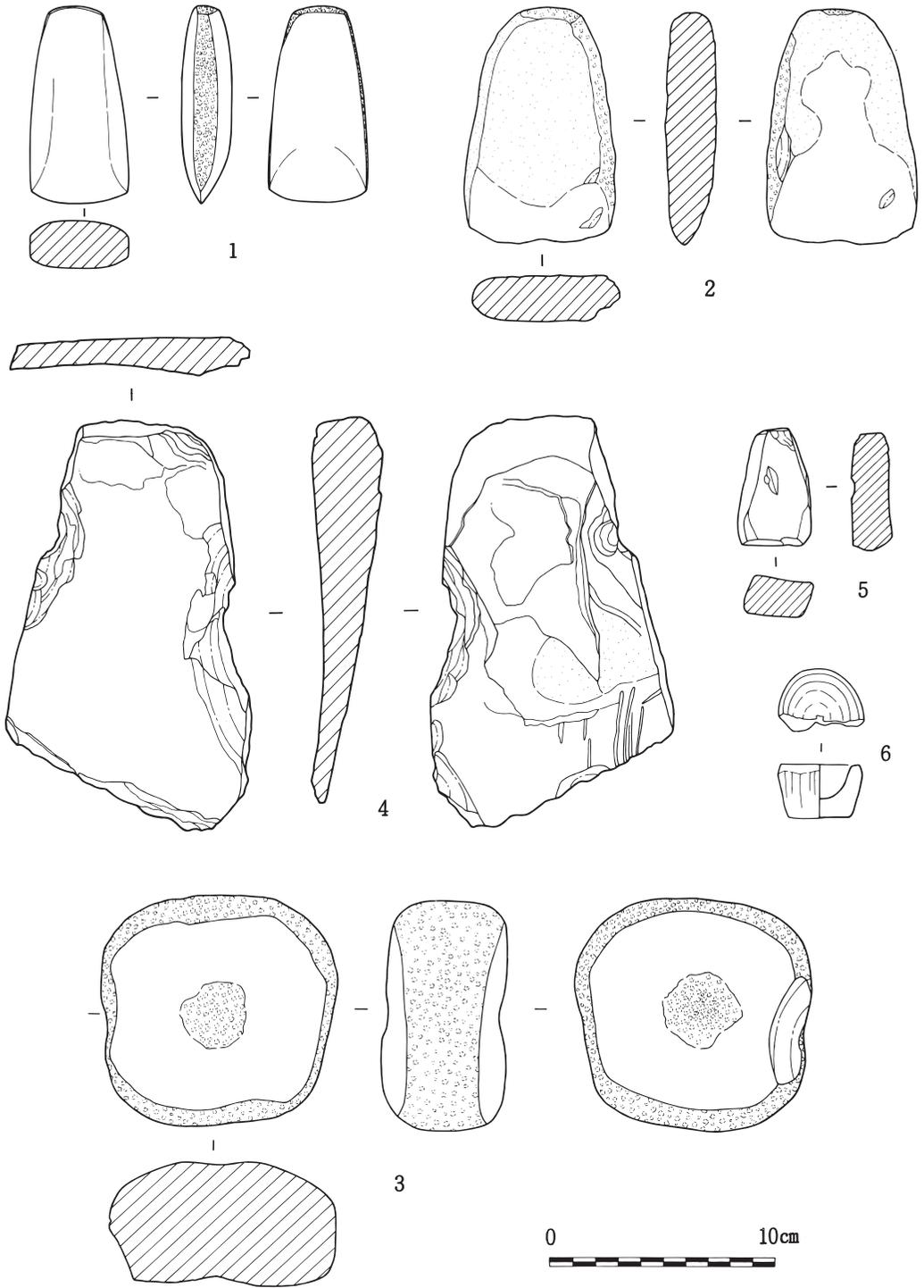


第48図 (PL.63の1~18)

鉄釘



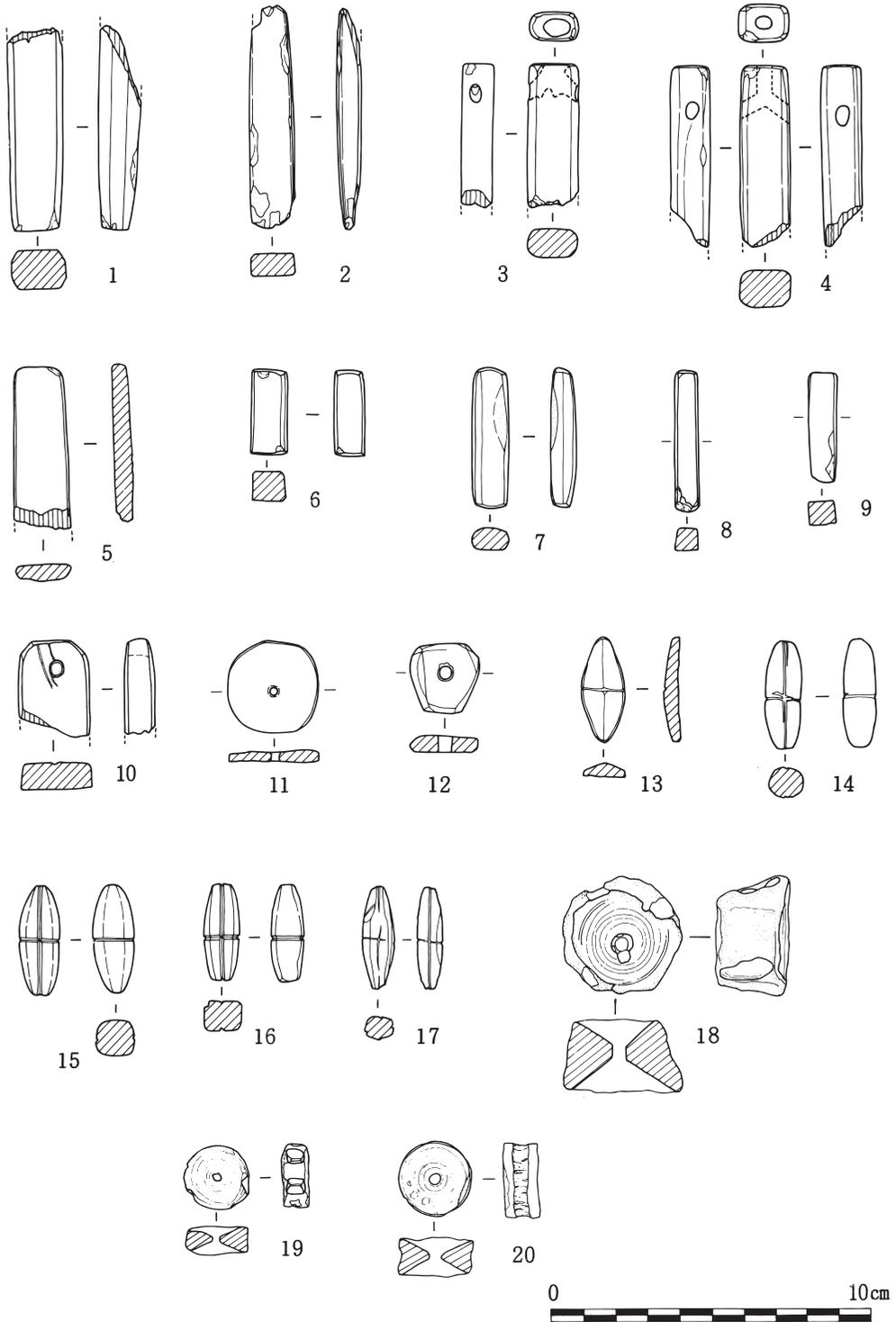
第49図 (PL.63の19~38) 鉄 釘



第50図 (PL.64の1~6) 石器



第51図 (PL.65) 砥石



第52図 (PL.64の7~23、PL.66の9~11)

石製品 (1~17)、骨製品 (18~20)

28 食料残滓

1. 炭化米・麦

ほぼ全面的に検出された。特に集中的に検出されたのは第3区の第Ⅱ層最下部と第5区第Ⅴ層である。5区Ⅴ層は炭化米・麦層と呼べるぐらい集中的に検出された。全体的には麦よりは米が多い。

2. 貝 殻

貝塚を形成しているところがなく、集中的には検出されてない。量は少なく、城外へ捨てたものと考えられる。最も多く検出されたのがマガイガイで、それでも92個である。

棲息地		貝 種					個 体 数						
淡水産		シ	レ	ナ	シ	ジ	ミ	3					
海	潮間帯	砂地	イ	ソ	ハ	マ	グ	リ	1				
			ヌ	ノ	メ	ガ	イ		2				
			ア	ラ	ス	ジ	ケ	マ	ン	ガイ	28		
		珊瑚礁・岩場	キ	ナ	レ	イ	シ			16			
			エ		ガ		イ			1			
			コ	オ	ニ	コ	ブ	シ		57			
			オ	ニ	コ	ブ	シ			64			
			ハ	ナ	ビ	ラ	ダ	カ	ラ	6			
			ア	マ	オ	ブ	ネ			1			
			ツ	ノ	マ	タ	モ	ド	キ	1			
			マ		ル	ニ	シ			1			
			ア	ン	ボ	ン	ク	ロ	ザ	メ	3		
			ヤ	ナ	ギ	シ	ボ	リ	イ	モ	9		
			ヒ	メ	ジ	ヤ	コ			3			
	潮間帯下	砂地	マ	ガ	キ	ガ	イ		92				
			ツ	キ	ガ	イ			1				
			ミ	カ	ド	ミ	ナ	シ	ガ	イ	2		
		珊瑚礁・岩場	リ	ユ	ウ	キ	ユ	ウ	ザ	ル	ガイ	1	
			チ	ョ	ウ	キ	セ	ン	サ	ザ	エ	76	
			シ	ロ	ミ	オ	キ	ニ	シ			23	
			ク	ロ	ム	ラ	サ	キ	オ	キ	ニ	シ	2
			ベ	ニ	シ	リ	ダ	カ	ラ			40	
			イ	ト	マ	キ	ボ	ラ				9	
			オ	ニ	ノ	ツ	ノ	ガ	イ			21	
			ク		モ	ガ	イ					4	
			ス	イ	ジ	ガ	イ					3	
			ニ	シ	キ	ウ	ズ					2	
セ	ン	ジ	ユ	ガ	イ				1				
カ	ン	ゼ	キ	ボ	ラ				1				
ミ	ツ	カ	ド	ボ	ラ				1				
ア	ラ	レ	ボ	ラ					3				
カ	ネ	ツ	ケ	オ	キ	ニ	シ		1				
ホ	シ	ダ	カ	ラ					5				
ヤ	コ	ウ	ガ	イ		(蓋)			52				
ヒ	レ	ジ	ヤ	コ					9				
シ		ラ		ナ	ミ				1				
シ		ヤ		ゴ	ウ				4				
合 計							550						

(金武)

29 今帰仁城跡志慶真門郭出土の脊椎動物遺骸の概要

金子 浩 昌

今帰仁城跡の第1～3次の調査は俗に志慶真門と呼ばれている郭を対象としたが、その際発掘された動物の遺骸はコンテナ約4個分があり、その大部分は脊椎動物の歯牙、骨格であった。今回それらの調査をはじめて行ったのであるが、調査の日時が限られ、動物骨の分類作業の後に直ちに報文をまとめねばならなかったため、詳しい数量について資料を整理する余裕が無かった。それらについてはまた別の機会にのべるつもりである。ここでは概要についてのべるに止める。

検出された動物種名

脊椎動物

I 軟骨魚綱

1. サメ目
2. エイ目

II 硬骨魚綱

1. ウツボ属
2. マハタ属
3. クロダイ属
4. フェフキダイ科の数種
5. フェダイ科の数種
6. ベラ科の数種
7. ベラ科の数種（ナガブダイ、ナンヨウブダイ、イロブダイなどを含む）
8. ハリセンボン科（イシガキフグ）

III 爬虫綱

1. ウミガメ科

IV 鳥 綱

1. ニワトリ

V 哺乳綱

1. マイルカ科
2. イヌ
3. ネコ
4. ジュゴン
5. ウマ

6. イノシシ

7. ウシ

この他に甲殻動物カニ類のハサミが1点出土している。

以下、特徴的な動物種について概要をのべておく。

魚類はブダイ類を主体として出土しており、頭骨や咽頭骨の出土が目立った。それに次いでペラ類、フェフキダイ類が多い。ブダイは頭骨で33個体分、ペラ類が17個体分（最少個体数）で骨の出土も多い。なお、サメ類は脊椎骨の椎体が出土しているのみであるが、大小の個体のものを含む。

爬虫類はウミガメ類の背甲板の骨十数点と肢骨1点が出土している。

鳥類はニワトリと思われる胫骨片と他に1点があった。

哺乳類は最も多くの骨がのこされており、ウシの歯牙、肢骨など17個体分、ウマが9個体分、イノシシが10個体分（いずれも最少個体数）があった。ウシ・ウマは在来牛・馬の大きさのものであって、特にウマには中・小形のものが含まれていた。

これらの骨はそのどれも（指趾骨などを除いて）が打ち割られ、骨髓などが食用に当てられていた。骨には鉄器による切断の刃痕をみる例、打撃によって打ち割られる例の両方がみられた。ウシの軸椎に切断の刃痕のある例があり、頭部が切り落されたことを示している。頭部の出土はウシ、ウマともに少なく、四肢とは別に処理されていた可能性がある。上下の歯が出土しているので、上・下頭骨のあったことは確かであるが、数は四肢骨から推定される個体数より少ない。

イノシシは上・下顎骨、四肢骨が多い。乳歯をもった若い個体の顎骨は3個例があったのみであったが、M3の未萌出段階のものは多かった。

イヌは下顎骨、上腕骨、尺骨が各1点、ネコは上腕骨中1、ジュゴン頭蓋中1、上腕骨2、肋骨片1であった。

イヌは中形犬に近い大きさで成獣である。上腕骨と橈骨には鋭利な金属製の刃物で切られた痕跡があり、中でも上腕骨は骨幹の半分位を切り込み、その後で折っている。このような切断のあったことは当時イヌもまた食用に供されたことを示している。

今回の発掘資料は、グスク時代の重要な家畜であったウマ、ウシがどのような形質のものであり、またその利用の方法なども示して興味深いものがあった。またイノシシについても、狩猟のみでなく、家畜化の可能性もあるかも知れない。これらについては、今後の検討を待たねばならないと思っている。

今回の調査は、はじめにも記した通り、第1～3次にわたる発掘のまとめではあるが、歯牙、骨角については資料が多く、十分な分類整理ができなかった。しかし、重要な資料であるので、近いうちにまとめて報告するつもりである。骨や歯牙についての詳しい内容もその際にふれたいと思っている。

（早稲田大学考古学研究室）

第V章 総括

前章までに第1次～第3次発掘調査の成果を記述してきたが、最後に若干のまとめをして結びとしたい。

まず最初に、志慶真門郭の使用年代について考えてみたい。検出された中国陶磁器で見ると、青磁輪花碗、青磁鎬連弁文碗など13世紀後半の陶磁器も含まれているが、それは僅かな量であり、14～16世紀の遺物がほとんどである。よって、14～16世紀に使用された郭であると考えられる。層序で見ると、第5区第Ⅷ層（地山）で、角礫を敷いて、その上に石垣（城壁）を積み上げていることが確認された。第Ⅶ層は15世紀以降の遺物が含まれない層であることから、城壁は14世紀に築かれたと考えられる。ただ、層序的に、14世紀を前・中・後期等に細分することはできなかった。文献で見ると、『明実録』^(注1)に登場する帕尼芝、珉、攀安知王の頃（1383～1415）が隆盛期であり、その頃には、志慶真門郭は完成していたのではなかろうか。今帰仁城は1416年に中山の尚巴志によって滅ぼされ、^(注2)1422年には中山から初代監守尚忠が派遣される。いわゆる監守時代の始まりである。本郭は監守時代になっても、16世紀までは使用されていたと考えられる。しかし、17世紀の遺物がほとんど検出されないことから、監守が首里（中山）に引き揚げる（1665）前の約60年間は使用されなかったと考えられる。

遺構としては、平場（宅地）造成、住居跡、石畳道・石段などが検出され、郭の機能面が把握された。平場造成では、傾斜地を削って1つの平場に造成する第1期造成があり、その後、土留め石積みをして5段の段丘（宅地）に造成する第2期造成がある。第2期造成でできた宅地（屋敷）には、中に炉をもつ約6m×4m、約6m×6mなどの掘建て柱建物が建てられていたようである。各屋敷間は石畳道や石段で結ばれ、石畳道・石段はさらに延びて、西上の本丸まで続いている。石畳道・石段によって、本丸と志慶真門郭は連結され、機能を発揮していたのである。つまり、志慶真門郭は武士の屋敷群であり、それは、王を支える側近の武士たちであったと考えられる。

出土遺物（人工遺物）の80～90%は中国陶磁器で、13世紀後半～16世紀の遺物が検出されているが、14世紀後半～15世紀前半のが多い。このことは、1383～1415年の間に18回の交易があったとする『明実録』の記録に符合する。中国陶磁器でも青磁、白磁、染付（青花）が多く、中でも青磁が最も多い。青磁は碗、皿類が特に多いが、酒会壺や盤など大型品が目立つのが注目される。また、輪花碗、仏像など出土例の少ないのも注目される。輪花碗、鎬連弁文碗など13世紀後半のから、線刻細連弁文碗など15世紀後半～16世紀のものまで検出されている。白磁は碗、皿が主体で、大型品はほとんど見られない。14世紀前半と考えられる口禿白磁碗・皿、ピロースクタイプ^(注4)の碗などが古い方で、14世紀後半～16世紀の碗、皿が主体である。白磁外反小皿（皿Ⅶ類）は口唇部に媒が付着しており、燈明皿として使用されたと考えられる。元様式青花は、元末・明初と考えられるもの

で、壺、玉壺春瓶、盤、片口などが検出された。特に大型の壺が多いのが注目される。壺や盤は勝連城跡^(注3)でも検出されているが、菊唐草文の小壺は全国でもはじめての出土である。元様式青花が多いことは本城跡の大きな特徴である。なお、本郭出土の破片と本丸出土の破片が数個接合できたことから、本郭出土の元様式青花は本丸から投げ捨てられたものがほとんどであると考えられる。明染付は碗、皿が主体で、大型の壺、瓶、盤などはほとんど見られない。15世紀のは少なく、多くは16世紀である。

その他の中国陶磁器として、黒釉陶磁、褐釉陶器、緑釉、三彩、翡翠釉、瑠璃釉、五彩などが検出された。黒釉は天目茶碗が多いが、茶入れ、壺などが検出されており、茶器としてセット関係にあるものと考えられる。天目茶碗、茶入れ、壺のセットはピロースク遺跡^(注5)でも検出されており、14世紀に納まると考えられる。褐釉陶器は壺がほとんどである。壺は有耳壺と無耳壺があるが、有耳壺が多い。有耳壺については広東省仏山の奇石窯のものに類似するようである^(注6)。緑釉は劃花唐草文瓶^(注7)で、沖縄ではまだ報告がない。熊本県の浜の館遺跡では水注が報告されている。三彩、翡翠釉、瑠璃釉なども沖縄ではまだ報告がない。緑釉、三彩、翡翠釉、瑠璃釉、五彩の殆んどは16世紀と考えられる。

中国以外の輸入陶磁器としては、朝鮮、日本、タイ、ベトナムの陶磁器が少量ずつ検出された。朝鮮のは、いわゆる高麗青磁の碗、盤である。白土象嵌の青磁で、ところどころに黒土象嵌が見られる。高麗青磁と呼んでいるが、実際には李朝の青磁で、15世紀のものと考えられる。高麗青磁は伊是名城跡^(注8)、屋良グスク^(注9)などで検出されている。日本のは備前焼播鉢^(注10)である。日本陶磁全集に掲載されている備前焼播鉢編年のⅡ・Ⅳ～Ⅴ期に相当すると考えられるのが検出された。なお、備前焼播鉢は佐敷グスク^(注11)で検出されている。タイのサワンカロック窯鉄絵袋物、ベトナムの染付碗が検出されたが、15～16世紀の陶磁器と考えられる。

その他の焼物として、瓦質土器、瓦、中世須恵器、象嵌陶質土器、土器などが検出された。瓦質土器は菊花のスタンプや透しの見られるもので、火鉢の破片と考えられる。沖縄では勝連城跡^(注12)からの出土報告があり、九州では大宰府遺跡^(注13)からの出土報告がある。瓦質土器、中世須恵器、象嵌陶質土器等は産地不明で、年代も明らかではない。土器はわずかに出土しているが、本郭では殆んど使用されなかったと考えられる。

銅製品、鉄製品には武具関係のが多い。銅製品の鞆、覆輪、切子頭、八双金具等は甲冑の付属品で、鍍金されているのが殆んどである。刀の付属品として切羽、責金具などが検出されている。武具関係以外の銅製品では貨銭や花押などがある。貨銭は殆んど中国古銭で、貨泉から永楽通宝まで23種が検出されている。貨泉（初铸造西暦14年新）は沖縄ではじめての出土であり、九州では弥生遺跡から検出されている。花押が1点検出されているが、銅製の花押の出土はほかに報告例を見ない。鉄製品では鎌、刀子などの武具がかなり検出されている。武具以外には釘、鋏、釣針などがある。鋏は種子鋏で、沖縄ではまだ報告例がない。

石器は砥石が多い。鉄器が多いのと比例している。砥石は琉球石灰岩を使用したのが殆んどであ

る。三面または四面が砥面として使用され、しかも砥面が大きく湾曲するほど磨滅している。砥面には刀痕が残っており、刀や刀子などが盛んに研がれたことが窺える。砥石以外には短冊型護符が数点検出されているが、これは小孔に紐を通して携帯するものと考えられる。

遊具と考えられるものが検出された。青磁、白磁、青花、褐釉陶器などの破片を打欠して円板状に仕上げたもので、おはじきと考えられる。また、青磁、白磁の碗、皿の高台脇を打欠して、高台部分を円板状に仕上げたものもあるが、それも遊具と考えられる。なお、遊具のほかに、祭祀具としての青磁香炉、勾玉などが検出されている。遊具、祭祀具の存在は、婦人や子供たちの生活を示しているものと考えられる。

食料残滓としては、炭化米・麦が各地区で検出された。総体的には麦よりは米が多い。獣魚骨はウシ、ウマ、イノシシ、ハリセンボン、ペラ類、ブダイ類が多く検出されている。ウマが大量に消費された点は注目される。食料残滓で見ると、かなり贅沢な食生活だったと考えられる。量は少ないが、イルカ、ジュゴン、イヌなども見られる。なお、貝殻は郭内には少ないことから郭外に捨てられたものと考えられる。

以上、発掘調査で得た遺構、遺物等から、志慶真門郭の機能や、そこに住んだ武士の生活状況などが明らかにされた。今後は本丸や他の郭を発掘することによって、城跡全体の歴史が解明されることであろう。(金武)

- 注 (1) 『中国朝鮮の史籍における 日本史料集成 明実録之部一』国書刊行会編
 (2) 『中山世譜』(蔡温本) 『球陽』
 (3) 矢部良明「日本出土の元様式青花磁器について」『南島考古』第4号1975
 (4) 『掘り出された沖縄の歴史』沖縄県教育委員会1982
 (5) 『ピロースク遺跡発掘調査ニュース』石垣市教育委員会1981
 (6) 三上次男氏の御教示による。
 (7) 『中国陶磁の美』—熊本県出土の中国陶磁—熊本県立美術館1980
 (8) 手塚直樹「伊是名島の陶磁器」『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』伊是名村教育委員会1980
 (9) 『掘り出された沖縄の歴史』沖縄県教育委員会1982
 (10) 伊藤晃・上西節雄『日本陶磁全集』備前 中央公論社1977
 (11) 『佐敷グスク発掘調査報告』佐敷村教育委員会1980
 (12) 『勝連城跡の発掘調査概報』勝連町教育委員会1982
 (13) 『大宰府史跡』昭和55年度発掘調査概報 九州歴史資料館資料普及会1981